
One ' s inmost thoughts

minimone

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One's inmost thoughts

【Nコード】

N9298F

【作者名】

minimone

【あらすじ】

one's inmost thoughts; 秘めた想い。人はそれぞれ秘めた想いを持って生きている。日常に満足している陽菜と、本気で恋する事を知らない颯太。颯太は陽菜に一目惚れするが・・・そんな二人が出会って、恋する王道ラブストーリー！。陽菜・颯太に加え、幼馴染みカップルが二人を見守ります。現在12話公開中。これまでスローテンポの二人は、ある事をきっかけに急接近する？颯太、ただ今頑張り中です。

第1話 出会い1 高校2年・春 side 陽菜

正直、特別な人ってよく分からない。

かつこいいなって思う人ならいた。

じゃあ、ずっと一緒にいたいとか、側にいたいとか、そんなこと考えられない。

それだったら女友達と遊んだ方がいい。

友達は早く彼氏を作れって言っけど、今はまだいい。だって、私はこの生活に満足してる。

「あーやっと来たあ。今日って学校遅かったの？」

慌てて予備校の教室に入ってきた私に、艶のあるサラサラロングの少女が話しかけてくる。

彼女の名前は相田結衣。

高校は違うけど、どちらも世間的には進学校と言われる学校で、私とは公立か私立かの違いだった。

志望大学をK大と決めていた私は、高校入学早々予備校に入った。予備校の初日たまたま隣の席に座ったことがきっかけで、結衣とは仲良くなった。

彼女は、なんていうか美人で、少し同世代の子よりも大人っぽく見える。

サラサラの黒髪は彼女に清廉さを醸し出していた。

性格は、竹を割ったような人。この一言で言い表せると思う。クラ

ス委員とかやってそう。

てか、実際に二年生から生徒会役員になったらしい。

世の中こんな完璧な人がいるんだなあゝって思っちゃう程。

予備校で一緒にいると、よく周りから（特に男子生徒）からの視線を感じる。

きっと学校でもこんな感じなんだろうなゝってぼんやり結衣を見ながら考えてた。

「・・・え、・・・ねえ、陽菜、ちゃんと聞いてる？」

心配そうな声に我にかえった。ごめん、考え事してた。と笑いながら謝っている私に、もう一度結衣が話だした。

「だからね、今週末に陽菜の学校に試合で行くって話してたの。だから、陽菜も良かった見に来ない？実は、彼氏も試合なんだよ。」

少し照れながら、結衣はバスケの応援に誘って来た。

結衣には中学から付き合っただけで幼馴染みの彼氏がいる。

まだ会った事はなかったけど、彼氏の話をする時、大人っぽい雰囲気少し幼く見える。

そんな結衣はすごく幸せそうに見えて、あんなにかいいなあゝ、私もこうやって幸せそうに話すことができる彼氏ができるのかなあ。

って、いつも思ってしまう。

「じゃゝ結衣の活躍と噂の彼氏を見に行こうかな？」

そう茶化しながら、私は週末の応援に行くことにした。

約束のバスケの応援の日、少し早めに学校まで来た。

うちの学校は、一般に言うお坊ちゃん、お嬢様が多いと言われている。

勿論それだけじゃなくて学力面でも有名だ。多くの著名な諸先輩方を輩出しているため、OBからの寄付金も多く学校の施設面でも他の学校にも引けを取らない。

私はというと、別にお嬢様ではない。

ただの一般生。父親は外務省の役人で、母親は専業主婦。ごく一般的な家庭で育っている。

両親とも、この学校のOBで自由な校風がいいと勧めるから受験した。

見かけや学校の肩書きのせいで、プライド高そうな生徒が多そうに思われることが結構あったりする。

実際は本当に普通で、自分の学生生活は充実している。

（ちょっと早すぎたかなあゝでも試合前に結衣に会いたいし、学校の友達にも激励したいし・・・とりあえず体育館だね。）

中庭の茂みを抜けると体育館脇の水飲み場に抜けられる近道がある。高校生活も二年目になると体育館までのショートカットも熟知しているの、迷わずその道をチョイスした。

丁度茂みを抜けようとしたら、その陰から話し声が聞こえて来た。

「颯太、何で昨日部活の後一緒に帰ってくれなかったの？一緒にいたかったのに。」

「あゝごめん。翔たちと飯食ってた。」

「嘘！ナオが他校の子と一緒にいるの見たって！」

「翔たちと飯食ってたのは本当。それから、まあそうだったかなあ？」

「ヒドイ！私も待つてたのに……」

「だってよぉ～お願いされたし……別にこれからも会っわけじゃないし、いいじゃん？」

「よくない！颯太のバカ、バカ、バカぁ～」

「はぁ～。分かったよ。ほら、こっち来いよ。お詫びするから機嫌直せって。」

修羅場？ヤバイかな？と思って、そつと音を立てずに茂みを抜けようと試みている所に、その現場が目に入った。

まあキスシーン位なら良かったんだけど、なんていうか女の子のジヤージが乱れていた。

腕を彼の首に回して、男の子の方はキスしながら片手が彼女の上着の中に入ってた。

（わっ、しかも他校生だし。早く、逃げなきゃ。てか、よその学校で……勇気あるな。）

私は、逸る気持ちを抑えながら音を立てない様に気を付けながら体育館へ逃げ出した。

第1話 出会い1 高校2年・春 side 陽菜 (後書き)

初めまして、minimoneです。

初回から、こんなんでいいの？って感じですよ。

颯太と陽菜、まだお互い出会ってません。

陽菜は颯太の顔を見てないのでニアミスです。

これからの二人を応援してやって下さい。

初小説でドキドキしているので、何かお気付きの点や感想待ってます。

第2話 出会い2 高校2年・春 side 陽菜（前書き）

お詫び：

前回の茂みでの会話のやりとりで、颯太の所を翔と記載してしました。

修正しましたが、修正前にお読みになった方すみませんでした。

mini mone

第2話 出会い2 高校2年・春 side 陽菜

ドキドキした心臓が落ち着くのを待ちつつ体育館に入ると、結衣たちはミーティングしていた。

それを確認しつつ自分の学校のチームの所に差し入れに行った後、体育館の二階で両チームの応援席から離れたスタンドに座って眼下のバスケット部を見ることにした。

「先に女子の試合をしてから、男子なんだって。一緒に翔の応援してくれない？試合終わったら紹介したいし。」

結衣はミーティングが終わって、そう言いながら私の所に来た。試合までのウォーミングアップは各自で自由にしていらしい。

自分の学校のチームにも差し入れたレモンの蜂蜜付けを結衣のチームにも差し入れた。

試合中の結衣は本当に格好良かった。バスケのルールとか全然分らないけど、結衣のシュートフォームが綺麗だった。

一連の動作が流れる様に見えた。滞空時間ってというのが他のプレイヤーよりも長いんじゃないかと思う。

結衣の手から離れたボールが吸い込まれる様にゴールに入っていく。どっちを応援するわけじゃなくて、ただ観戦するだけだったけど楽しかった。

結衣のチームは、後日ミーティングとかで 試合が終わったらそのまま解散だった。

ジャージに着替えた結衣と合流して男バスのウォーミングアップを

見ていると、

「吉岡じゃん。試合見に来るのとかめずらしくね？ちゃんと応援しろよ」

下からクラスメートの佐藤君が声を掛けてきた。

「今日は、どっちも応援しないことにしているの。見るだけ。」

「何それ？意味わかねえ。ただ、見に来たの？」

「そう。今日は、友達の学校が相手なのよ。両方応援したいから、どっちかを応援したらフェアじゃないでしょ？」

手を振りながら答えると佐藤君も笑って、変なの。といいながらチームの輪の中に戻っていった。

そんなやり取りを見ていた結衣に、なんで陽菜までスポーツマンシップ？って茶化された。

だけど、うん。私はどんな時もフェアがいい。

いつも誰にも負い目なく接したい。その為にも、相手にはいつでもフェアでいたい。

自分の勝手なモットーに一人頷いていたら、結衣に洋服の袖を引っ張られた。

「コートセンターにいる背番号10番。あれが彼氏の翔だよ。」

結衣に言われてコートに目をやったら、その横に背番号8のユニフォームを着た人がいた。

あの感じは、多分茂みで見かけた男の子に似ていた。

多分、そうだと思う。

（なるほどあれが噂の背番号8番なんだあ）

結衣の彼氏、翔君と楽しそうに話しながらストレッチしてる姿を眺めながら、

さっきの女バスの友達が騒いでた噂の人物の話を思いだした。

常陽高校バスケ部背番号8番。

彼は有名ならしい。バスケは大学推薦がきている位上手らしく、かなりのイケメン。目はくつきり二重で鼻梁も日本人にしては珍しく通っている。

長過ぎない程度にのばした髪を綺麗にセットして清潔感がある。甘くみえるルックスに爽やかな雰囲気で、誰にでも好感を与えそうな感じだった。

（まあ、こんな見た目でスポーツも出来ればモテるよね・・・でもなあ、私だったら付き合いたくないかも。）

なんて彼を観察しながら、噂の続きを思い出していた。

背番号8番は、当然人を惹き付ける魅力があるためモテる・・・らしい。

そして、女遊びが激しい。

彼女がいても、平気で他の子とも関係をもつし、「来るもの拒まず去る者追わず」といった遊び人の典型の様な人で、うちの学校でも彼に泣かされた女の子は多いとか。

だから、彼女の入替わりが激しい。彼の彼女になりたい子が、順番待ちしているとか。

ここまでくればどこまでが本当の事が分からないけれど、私には縁の無い人であるのは確か。

だってフェアじゃないんだもん。

思い出した噂とさつき目撃したことが妙に納得できて、あれは噂の背番号8番だったんだと確信した。

「翔一、颯太ー！負けんなよー」

突然結衣が大きな声を出すから、いつの間にか下を向いていた頭を上げた。

結衣の彼氏を見ると、名前を呼ばれた翔君が笑って手を振る横で背番号8番が

「誰に言ってたんだよ。」

と返事をした。

「翔の隣にいたの、私たちの幼馴染みの颯太っていうの。ああ見えてバスケット上手いんだよ。」

「らしいね。有名人ってさつき噂聞いたよ。なんか、結衣と幼馴染みって意外。仲いいの？」

一応社交辞令的に、話をふってみた。

「うん。小さい頃は三人で3on3とかやってて、バスケットだけは真剣なんだよ。根はいい奴なんだけど、どこで間違ったのか・・・」

そう悩んでしまった結衣を見て、つい笑ってしまった。

結衣が、嫌ってないってことは悪い人ではないだろうな。って、

少し彼に対する認識を改めた。

第2話 出会い2 高校2年・春 side 陽菜（後書き）

minimoneです。

陽菜の颯太への第一印象は、『軽い人・無縁な人』って所です。
あんな場面に遭遇したら誰でも思いますね・・・

第3話 出会い3 高校2年・冬 side 陽菜

いつもの様に予備校帰りに少し遅めの夕食を結衣と食べようと表に出たら、結衣の彼氏・翔君が待っていた。

「あれ？今日ってミーティングって言っただけじゃなかった？」

「さっきメールしたけど見てない？ミーティング早く終わったから一緒に飯食おうと思っただけで待ってた。」

結衣が首を傾げながら翔君に寄って行ったので、私は少し離れた所で二人を待っていた。

二人は少し話した後、翔君が私に声を掛けた。

「吉岡さんも、夕食一緒に大丈夫だね？俺たちも、まだなんだ。」

あのバスケの応援以降、何回か翔君を交えてご飯を食べに行ったりとあったから、特に迷いもせずにOKする。

（……ん？俺たち……？）

その言葉に違和感を感じた時、後ろから聞き慣れない声が聞こえた。

「ごめん。待った？電話少し長くなってさ。」

合流して来たのは、背番号8番で二人の幼馴染みの『颯太』が立っていた。

とりあえず、近くのアミレスに入って四人で食事をする事になった。

った。

ファミレスに入ると、それなりに込んでいたがなんとか席につく事が出来た。

結衣が窓際、私は通路側。結衣の前は翔君で、その隣は霜織君。この席順は、当然といえば当然だった。

（・・・当然なんだけど・・・えっと、なんか霜織君って話に聞いていたのと違うのかな？）

何て言うか、直接会って話した霜織君は思ったよりも静かだった。

三人の小さい頃の話とか、お互いの高校の話とか話してたんだけど、霜織君と目が合うと、それとなく逸らされる。

会話中は、以前見かけた様な軽い感じが出てるんだけど、私が話しかけると少しだけ眉を顰めて言葉がぎこちなくなる。

遊んでるって聞いたわりに結構普通ぽかった。

四人で話していると楽しくて夢中になっていると、ポケットに入れておいた携帯が鳴った。

着信相手がクラスメートからだ確認してから、皆に断りを入れて席を外した。

戻ってくるとすぐに翔君から、彼氏から？って聞かれたからクラスメートからだよ。と答えて席についた。

「そう言えば、私陽菜の好みのタイプとかって聞いてたこと無いかも。」

私の話ばかりで狡いって結衣が詰め寄って来て、これは誤摩化しても追求されることを悟った。

正直に言って、好みのタイプって分からないから聞かれても困るっていうのがホントの所。

でも、外せない条件がある。

（・・・けどなあ、本人を前にしては言いづらいっていうか、何だかなあ・・・）

ちらつと、霜織君を見た後に結衣達を見ると、全員こっちを見てた。仕方なく覚悟を決める。

これから言うことが相手の気分を害しません様に・・・と祈りつつ。

「好みの外見とかつて言うのは、無いと思う。てか、好きになつた人まだいないし。でも、フェアな人がいい。これは外せないかな。」

また陽菜の「フェア」がでたよ。と言いつつ食後のコーヒーを結衣が飲みながら呆れていた。

どうやらこれでこの話題も終わったな。って安心した所に

「フェアな人ってどういう意味？」

と霜織君に聞かれた。

（あゝあ。せっかく誤摩化したのに、言いづらい人に聞き返されたな。）

霜織君を見ると思ったよりも真面目な顔をしたて見つめられ、私は出来れば穏便にやり過ぎたいと思っていただけ、無理そうだった。

この場の雰囲気が悪くなる可能性はあるけど、もう霜織君とは会うこと無いかもしれないと思うと、何となく、いっか。って、開き直った。

「私は、好きな人には自分と同じ位気持ちを返して欲しいと思う。同時に別の人を好きになることは出来ないと思うし、相手にも自分だけを見て欲しい。まあ気持ちなんて、計れるわけじゃないけどね。私にとって、それってフェアって思うわけ・・・ですよ。」

なんだか熱く語ってしまった自分が急に恥ずかしくなって、最後は変にゴニョゴニョと小声になってしまった。

恥ずかしさと霜織君に対する申し訳なさで、霜織君を見ていた目線を下を向けてしまった。

だって、私が今話した事って霜織君の批判みたいにも受け取れるから。

ブハハって豪快な吹き出し笑いの後に

「それって、颯太と全然真逆のタイプじゃん。まじウケる！」

その声に下げていた目線を翔くんになると、霜織君の背中を叩いている翔君がいた。

ぶすりとしながら翔君の手を振り払う霜織君は、ほっとけよ。一言言い返しただけで不機嫌そうになって顔を背けた。

思った通り霜織君の機嫌を損ねてしまって、私は慌ててフォローする。

「えっと。これって私の私見だし、女の子には霜織君みたいな人がタイプって人もいるよ。実際モテるって聞いているし。ただ、私はダメ。って言うてるだけだから。」

一生懸命フォローしてたんだけど、何がツボなんだか翔君は増々爆笑して

「吉岡さん、追加攻撃してどうすんの？それ、全くフォローになってないから。ホント即死だから」

そう言いながら遂にテーブルに突っ伏して笑ってる。

結衣も、翔やめなよ。可哀想じゃん。と言いながら苦笑いして私を見ていた。

霜織君は背けてた元に戻して、テーブルに肩肘ついた手に顎を置きながら、今度は視線を合わせてくる。

「てことは吉岡さんは、俺の噂知ってるんだ？」

翔君に言われた通りフォローするどころか、自分で彼の噂を知っていながら熱く語ったことを暴露してしまっただけ。

自分の迂闊さに、呆れながら渋々頷く。

「うちの学校の子と付き合ってたとか、だよ。あつ、でも頭もいいつて。私どうしてもK大行きたく予備校行ってるんだけど、

霜織君は合格圏内に入ってるって聞いたよ。すごいね。」

以前、模試の結果を見ながら結衣が話しているのを思い出して夢中でフォローを試みた。

「で、颯太が色々な子をとつかえひつかえしてるって？」

「うん。そう。それもサイクルが早いって。」

焦り過ぎて、翔君の質問にもフォローと同じ位必死になって頷きながら聞かれてもいないことまで話していた。

もう、ここまでくると人間どうでもよくなってくる・・・

これを魔のループと言わずになんて言うんだろう。

それからファミレスの席を立つまで霜織君は一度も目を合わせる事なく何も言わなくなった。

ファミレスから帰る時には、楽しかった気持ちもその楽しさが半減していた。

それから、霜織君と会うことはなかった。

初めのうちは、自分の失礼な物言いを気にして、その事を結衣に何度が聞いたが、結衣が気にしなくていいと言ってくれたので、いつの間にか彼のことを忘れて日々の生活を送っていった。

第3話 出会い3 高校2年・冬 side 陽菜（後書き）

やっと陽菜と颯太の絡みです。

まったく陽菜は颯太の事を意識していない様子。
恋には程遠い感じですかね・・・

一方、颯太は？

次回は、颯太サイドです。

第4話 出会い4 高校2年・春 side 颯太

女なんて皆一緒だろ？

彼女と彼女以外ってなにが違う？

だって、近くにいたらヤルことは一つじゃん？

これまで彼女を欲しいなんて思った事は一度もない。

女は付いてくるものだったから。

やりたい時に、やりたい子とする。

その場限りでも、その時気持ちよければいいと思う。

特別だから、彼女にするってわけでもない。

付き合っただけでいいって言われるから付き合うだけ。

面倒臭くなったら別れる。その繰り返し。

時々親友に幼馴染みを見ると『特別な彼女』ってそんなに良いものなのか？って思う事がある。

でも、深く考える事はしない。俺には、こんな風なのが合ってると思う。

今の彼女とは、俺にしては半年と続いている。

彼女・鞠は、同じバスケ部のマネージャー。

自分がどんな風にすれば一番男を惹き付けるのかを知っている所がある。

濃いと思う程ではないがしっかりメイクをして、顔は華やか。

美人だと思うけど、結衣と違い人工的な所がある。

体は、しっかり出る所が出て、男だったら一度はお願いしたくなり
そんな妖艶さをもっていた。

父親がどこかの重役でお嬢様のためか、少し我が儘な所があったが、
許容範囲だったし、

他の子と浮気してもその後セックスすれば簡単に機嫌が直るので半年続いてるって感じだった。

そんな俺たちを見た男バスの仲間は、鞠が本命じゃないかと思って
いるようだった。

・・・まあ、翔以外だけど。

鞠に、一年の冬休みの合宿帰り体育倉庫で告られた時は、部内でゴ
タゴタしたくなかったから俺にしては珍しく断ろうとした。

鞠の策略もあったと思うけど、一週間の合宿で疲れた体と、その前
から彼女と別れてヤツてなかった事もあって、

断ろうと開いた口に鞠からの深いキスで少しその気になってしまっ
た。

まあキス程度なら・・・と思っていたら、そのまま俺のシャツの中
に手を入れて愛撫しはじめてきた。

それから、まあいつもの事って感じだったけど、ヤツたこともあ
って鞠と付き合い始めた。

鞠は見た目通りというか、俺から見ても男の喜ばせ方が上手かった。
これまでで一番具合も良い。

あまり校内でする事は好きじゃなかったが、セックスが出来ない時
よくフェラを鞠はしたかった。

俺は特別好きってわけじゃなかったが、気持ち良いことをしてくれ
るのを断る理由もなかったので、鞠の好きな様にさせていた。

だけど、いくら鞠との具合が良かったって他の子から誘われたら断る
事はしない。

この辺でも有名な私立の進学校慶明館とのバスケの試合の前日、練
習後翔たちと夕食をファミレスで食ってコンビ二に寄った時、逆ナ

ンされた。

制服が可愛いと言われる学校の子で、顔も悪くなかったと思う。試合があるし、あんまり疲れたくなかったから愛撫もそこそこの欲望だけを吐き出し、さっさと帰った。

試合当日慶明館の体育館で、スターティングメンバーの発表が終わった後ウォーミングアップまでに時間があつた。

鞠に手招きされて中庭の裏にある茂みに呼ばれた俺は、嫌な予感の中ついて行った。

思った通り、鞠の話は昨日の夜の事だった。

部活には、真面目な俺を友達は意外らしいが、バスケは俺が本気になる唯一のものだ。

試合まであんまり時間もなかったし、試合に集中したい。

こんな事に時間を取られるのは、勘弁して欲しかった。

鞠とのやり取りが面倒で、お詫びする、と言って鞠を呼び寄せキスと指で満足させた。

最後までしたがってたが、他校の茂みでヤルなんて趣味じゃないし体育館に早く戻りたかった。

鞠には、試合が終わってからと誤摩化してさっさと翔と合流した。

第4話 出会い4 高校2年・春 side 颯太（後書き）

やっと颯太サイド登場です。

陽菜に出会う前の颯太ですが、

女の子にとって、決していい子ではないですね。

第5話 出会い5 高校2年・春 side 颯太

・・・一瞬、体に衝撃が走った。すごく印象的な子だった。

『言葉が出ない』ってこういう事を言うんだなって無意識に感じてしまっ程に・・・

試合前のセンターコートで翔とストレッチしていると、慶明館のメンバーの一人が二階スタンドの所に座ってる女生徒と話していた。今日は、俺たち常陽にとってはアウェイ。

応援も慶明館の生徒が多いだろうと思っていたから別に気にもしなかった。

コートに座って前屈している俺の背中を後ろから押している翔が、結衣が慶明館の友達と試合を見るとい話をしていた。

あんまり興味もなかったし試合に向けて意識を高めていたから、それに対して特に返事はしなかった。

「両方応援したいから。一方を応援したらフェアじゃないでしょ？今日は、見てるだけ。」

そんな声が聞こえて、自分のつま先を見てストレッチを続けていた視線を声の方に向けた。

さっきの慶明館のスタメンと話している子だった。

手を振っていた彼女は、全体的に細身で色素が薄いのか色が白かった。

髪の毛も茶色っぽかったが、人工的な違和感がなかった。

遠くて詳しい顔の造作は分からなかったけど、遠目でも分かる彼女の目はクルミの様にクリンと大きかった。

彼女を目にした時、全身に衝撃が走って呼吸が止まるかと思った。思考回路が全部停止していたまま、翔に押され、かろうじてストレッチしていただけた。クリアに分からない彼女だったが、それでも印象的すぎた。

二階スタンドから結衣が名前を呼ぶ声が聞こえて、目をやると隣に彼女が座ってこっちを見ていた。

自然と目が彼女を観察しようとしていた。

彼女はそんな俺に気付く事もなく、いつも周りの女から向けられるような視線もなかった。

平静を装って結衣に軽口を返したが、俺は彼女の視界に自分が入ったことで体中に甘い痺れを感じていた。

——そう、それが彼女・吉岡陽菜が俺に与えた印象、いや衝撃だった。

第5話 出会い5 高校2年・春 side 颯太（後書き）

陽菜を初めて見たときの颯太の第一印象です。

今回は少し話が短めになってしまいました
が区切りが丁度良かったので・・・

次回はもう少し長くなるよう頑張ります。

minimoneでした。

第6話 出会い6 高校2年・春 side 颯太

吉岡陽菜を見かけた日以来、ずっと胸がモヤモヤしたり、イライラしたり落ち着かない。加えていえば、彼女の事が忘れられない。彼女について結衣に探りを入れたら、「吉岡陽菜よ。でも颯太、陽菜には変なことしないでよね。私、友達が泣くの見たくなし。」と眼を細めながら牽制されてしまった。

仕方がないが、結衣の俺に対する異性関係の信用度は皆無と言っていい程ない。

信用が全くない俺に、なおも結衣の牽制は続いた。

「まあ陽菜が可愛いのは分かるわよ。実際、予備校でも陽菜とお近づきになりたい男共が多いしね。」

その言葉に、なぜか苛立を感じつつ「お前じゃなくて？」と結衣に聞く。

「陽菜は男達の視線は私だと思ってるけど、実際は逆ね。気さくな子だから基本、誰とでも話すから寄ってくる男はいるんだけど・・・陽菜は意図的じゃないけどガードが固いのよ。だからね。そんな事全く気付いてない。颯太みたいなのは一番警戒されるんじゃない？だから、興味半分で近づいても無理よ。」

確かに結衣が言った通り、別に彼女じゃなくても相手に困ってるわけじゃない。

鞠だっている。

ただ、今も続いてるこの変な気持ちの正体が知りたい。きっと彼女にこの気持ちの原因があると思った。

もう一度彼女・吉岡陽菜に会ったら分かる様な気がする。

だからって、欲望はしつかりとある。

むしろ強くなった？

鞠は相変わらず積極的に求めてくるし、他の子からの誘惑もあった。ただ誰とヤツても下半身のすつきり感だけで、ずっと燻っているモヤモヤ感は晴れてくれない。

むしろ、ヤツてもヤツても、すればする程、物足りない感じが付いてまわる。

もし相手が彼女だったら？そう考えただけで、形容し難い感情が込み上げてくる。

込み上げてくる思いを何とかしたくて、また違う子を抱く。

そして、また言いようもない気持ちだけが胸に疼いて、彼女の事が頭に浮かぶ。

そして、彼女に会いたくなる。

こんな不毛なサイクルを繰り返し、気付くと今まで以上に派手に遊んでいた。

そんな俺を翔だけが嬉しそうに見ていた。

時々思い出した様に、吉岡陽菜の事を話題に持ち出してくる。ある時、翔のベッドの上でゲームをしていた俺に聞いて来た。

「なあ、今なら俺の気持ち少し分かるんじゃない？」

「お前の気持ち？って何時の？」

「結衣と付き合う前の俺。」

ゲームをしつつ翔を横目で見た後、中学の頃を思い出した。

翔は男の俺から見ても男気があって、バスケット部でも皆を纏めたりと頼りになった。

俺とは違って、少し太めの眉に奥二重で少し吊り上がった眼。

男の色気を感じさせる奴で、やっぱり学校でもモテていた。

中学三年にあがって、同じ幼馴染みの結衣と付き合い始めてから落ち着いたけど、それまで一緒に女遊びしていた。

俺と違って浮いた噂が回ってなかったのは、翔が結衣にバレない様に細心の注意を払って口の堅い子を選んでいたからだ。

翔は小さい頃から結衣一途だった。

そんな翔が結衣とは違う子とヤル様になった原因は、やっぱり結衣だった。

思春期真っ只中の健全な男子としては、性欲や興味もある。

そして、誘ってくる子も翔にはいた。

初めは断り続けていた翔が遊び始めたのは、中学二年の時結衣が一つ上の先輩と付き合う様になってからだ。

実は、どういう成り行きで翔と結衣が付き合い始めたのか知らないが、結衣との交際が始まってから翔の女遊びは止まった。

彼女が出来たからって、他の子との遊びを止めて一途になるって事が俺には理解出来なかった。

俺は同じ子ばかりだと、飽きてしまう。

その子との関係が続けようとするなら、別の子の刺激っていうのが必要だった。

「結衣って、遊ぶの止める程そんなにお前と相性いいの?」

翔が部屋遊びに来た時に聞いたことがある。

それまで読んでた雑誌を丸めると、翔は俺の頭を叩いた。

「バカか。相性じゃなくて、結衣だからいいんだよ。マジで好きな子とヤルと全然違う。これまでが何だった？って思うくらい」

翔が言う事は抽象的すぎて、俺にはやっぱり分からなかった。

どんな女の子ともする事は一緒なんだから、変わんねえよ。

気持ち良いだけじゃん。

そう思いながら、俺も本気になれる奴に会ったら変わるのか？

ぼんやり考えながらタバコを銜えていた。

（今の俺が、あの時の翔の気持ちが分かる？・・・って、分つかんねえよ。）

眉間に皺を寄せながら考え込む俺に翔が続ける。

「だから、結衣の事好きなのにその子は他の男と付き合ってた、俺は幼馴染みのポジションのまんま。何とかしたくても出来なくて、もどかしい。その気持ちをスッキリさせて、他の子で気晴らししようとしても、満足しない。」

「ど？この悪循環に身に覚えはないか？多分ここ数ヶ月の颯太じゃないかと俺は思うんだけど。」

その言葉は意外だった。それじゃまるで俺が彼女に惚れてるみたいじゃないか。

俺が？まさか？

ちゃんと会って話した事もないし、遠くから少し見ただけの子を好

きになる？

「あつりえね〜！俺が吉岡さんを好きってこと？ないない。」

「別に、俺は吉岡さんだつて一言も言っていないけど？」

否定した俺に、翔はニヤリと笑った。

「やっぱりな。颯太が荒れる様になったのって吉岡さんが試合に見に来た位からだもんな。結衣に探り入れたりして、颯太が興味もつた子って初めてじゃん？」

「だから、違うつて言ってるだろ。吉岡さんは関係ないよ。」

本当は気になってたし胸のモヤモヤの原因は彼女だけど、それを認めたくなくて翔に嘘ついた。

翔は、俺の気持ちに対して何か確信めいたものを感じていたのか、吉岡さんの話を続けてきた。

「好きかは別にして、気になってんだろ？今の颯太は、彼女に会いたくてもどうにも出来ないって感じだし？一度彼女に会ってみる？」

「マジで?!」

突然の翔の提案に勢いよく反応してしまった。

いつの間に、翔との会話に集中していてゲームの事を忘れていた。画面を見るとゲームオーバーの文字が映っていたことに、気まずさを感じてテーブルの上においてあった飲みかけのコーヒーを一気に飲み干した。

苦みに少し眉を寄せたが、なぜかいつものモヤモヤが薄れていくの

を感じた。

第6話 出会い6 高校2年・春 side 颯太（後書き）

陽菜とは対照的に、颯太は陽菜に何かを感じている模様。

結衣には全く信用されてないけど、翔は颯太贗眞。

やっぱり男同士です。

今回は、少しだけ翔の過去話も登場です。

二人の話もいつか書けたら・・・

とりあえず、颯太と陽菜をなんとかしないとです。

第7話 出会い7 高校2年・冬 side 颯太

夏は地区大会にインターハイ、そして三年生の引退で俺は副キャプテンになった。

キャプテンには翔がなって、二人で練習メニュー考えたりと忙しく過ごした。

秋は学祭や体育祭の準備に明け暮れ、いつの間にか日々が過ぎていた。

それでも、胸のモヤモヤが晴れた事はなかった。

鞠も俺の変化に気がついてるのか、これまで以上に甘えては誘って来た。

そんな鞠に少々うんざりして別れようかと考えたが、この気持ちを少しでも何とかしたくて鞠との関係が続いていた。

「颯太、今日のミーティング早く終わらせて一緒に食事しね？」

「その後約束あるから無理だわ」

「せっかく、ミーティング終わらせた後結衣と一緒に食事しようと思っただけど。じゃ、三人で行くか。」

「は？だから俺は、行けないって。」

「分かってるよ。結衣、今日は予備校だろ。大抵、予備校のあと吉岡さんと夕食してんだよ。だから、今日は俺も一緒についてこと。せっかく颯太もって思ったのによ。」

「おい。お前、性格悪いぞ。約束、断るから俺も行く。」

色々なイベントも終わり、やっと落ち着いた生活に戻ったある日、翔から突然彼女・吉岡さんと出会いのセッティングを言われ、鞠との約束を慌ててキャンセルした。

どうやら翔は吉岡さんは勿論、結衣にも怪しまれない様に自然な形で彼女に会わせてくれる様だった。彼女と夕食ができると思ったら、遠足前の小学生か？と思う位落着きをなくしている自分がいた。

ミーティングが終わって翔と結衣の予備校まで行くと、終了時間よりも早く到着したみたいだった。

翔が結衣にメールを打っていると俺の携帯が鳴った。――着信相手は鞠だった。

鞠と話す気になれず無視しようとしたが、明日何を言われるか分からない。

そっちの方が厄介だと思い直し、翔から離れ電話に出た。

鞠はドタキャンされた事で、俺が他の子と一緒にいないか疑っている様で電話をなかなか切ろうとしなかった。

はやく彼女に会いたいのに、鞠との無駄な話に少し苛つきだして、とりあえず明日会う約束して電話を切った。

やっと終わった鞠との電話から戻ると、結衣達は授業が終わって翔と一緒にいた。

結衣の少し距離をとって後ろで立っている彼女を見た瞬間、鞠との電話で苛ついた気持ちやこれまで居座り続けていたモヤモヤが吹き飛んだ。

その代わり、初めて彼女を見かけた時の様な形容し難い感情が沸き起こって来た。

自分自身の事なのに、どうしていいか分からなかった。

ただはつきり確信した事は、ここ数ヶ月ずっとあった気持ちは、やっぱり『彼女』が原因だと言う事。

『今の颯太は、彼女に会いたくてもどうにも出来ないって感じだし？』

以前翔に言われた事が、頭によぎった。

（俺・・・彼女に会いたかった・・・？）

それを自覚したと同時にもう一つの事まで自覚してしまった。
自覚してしまったら、急に顔が熱くなるのを感じて思わず片手で顔を覆った。

（やばい。俺、彼女・・・吉岡さんに惚れたんだ。）

短距離走後の様にドキドキしている心臓と赤くなった顔を落ち着かせるために深呼吸した。

徐々に落ち着いてきたのを感じて、翔達の所に合流するために歩き始めた。

正面に座った吉岡さんは、試合の時遠目で見て思ったよりも可愛かった。

いや、これまで遊んだ子の中には吉岡さんよりも可愛い子がいたかもしれない。

あんまり興味がなくて、全く覚えてないけど・・・

全体的に薄い色素は、父方の祖父がハーフだったためらしい。

大きくクリンとした眼は、ほんの少しだけタレていた。

フワリとした女の子の雰囲気があるが、話すと大人しいタイプというわけではなく程よく明るい。

というか、彼女の存在自体が俺のツボだった。

彼女の癖なのか、話す時相手の目をじっと見る。

そのせいで、彼女から話しかけられても思う様に話せないし、顔が緩みそうになってしまったため眉間に力を入れ、笑顔も引きつりそうになる。

気を抜いたら、ずっと彼女の顔を見つめてしまう自分がいる。もつと近づきたいと思うのに、どうしていいか分からない。

これまで自分がどうやって女の子と接していたんだろう・・・

内心焦っていた時、彼女の携帯が鳴り出し彼女が席をたった。上手いかな自分に知らず嘆息する。

「な？俺の言う通りだったろ？お前あからさますぎる。見ててこっちが恥ずかしい。」

翔が笑いながら言った言葉に結衣も同意する。

「大丈夫？いつもの颯太じゃないよ。ここまで違うところちの調子まで狂うわ。陽菜の事そんなに気になってたの？」

「うるせー。いつもの俺ってやつを俺も知りたいわ！まじ、全然話せないし・・・」

自分でも思う様に出来ないことに焦れたさを感じていた。

結衣も、いつもと違う俺の行動の原因が陽菜にあることを気付いていた。

幼馴染みだから分かったんじゃないかって、普段の俺を少しでも知っている奴なら今の俺を見たら明らかに挙動不審に見えるだろう。

「こんな颯太みたら、これまでの子達がビックリするわね。まあ、これまでの様に適当にしたら承知しないけど。」

ふと、結衣の言葉で彼女がこれまでの自分がしてきた事を知っているのかどうか気になった。

あんまり、いや、かなりこれまでの事を知られたくない。

できれば、彼女にはそんな噂など知らずに自分を見て欲しかった。

そして、電話の相手の事も気になり出した。

（もしかして彼氏とか・・・）

勝手な憶測だったが、彼女に彼氏がいたら・・・そう考えるだけで胸の中がどす黒い色に覆われた。

一度気になり出すと、確かめられずにはいられない。

結衣に聞くと、少し意地悪そうな顔をしながら彼氏はいないじゃないかと答えた。

「ただねえ、前にも言ったと思うけど陽菜に近づきたい男達は沢山いるからね。いつ彼氏が出来てもおかしくないかもね。」

結衣の言葉にまた俺の心にどうしようもない焦りが沸き上がってくる。たったこれだけの事で動揺している俺が可哀想になったのか、電話から戻って来た彼女に翔が彼氏の存在を確認してくれた。

翔と違って結衣は全面的に協力してわけじゃなかったが、彼女の好みのタイプには興味があったのか、彼女に水を向ける。

彼女の男のタイプを黙って聞いていた俺は、『フェアな人』って言葉がイマイチ分からなかった。

結衣は、それを聞いて呆れていたから彼女がよく言う台詞なんだろう。

きっと俺が彼女と近づけるためには、この『フェアな人』がキーになると思った。

そんな重要な条件を聞き逃すわけにはいかない。

もつと詳しく聞きたくて彼女に聞くと、チラリと俺を見て気まずそうに語り出した。

なんで彼女が気まずそうに俺を見て話し出したのか、その内容を聞いて納得した。

それは、俺とは180度違ったからだ。

そして、そんな彼女の態度は俺のこれまでの行いを噂で知っているんだろう、という事も物語っていた。

徐々に顔が氷の様に固まっていくのが分かった。

翔が爆笑しながら俺の背中を叩くその痛みで、固まった顔が溶解していった。

きつと、俺がショックを受けて何の反応も出来ていない事に気付いたのだろう。

気を取り直しても、ショックは隠せないしきつと情けない表情をしていると思われる顔を見せたくなくて、不機嫌そうな顔を作った。

そんな俺に一生懸命フォローする彼女は、見ていて可愛かった。

でも、彼女のフォローははつきり言ってフォローになってなかった。

『私はダメってただだから』

その言葉は、俺をどん底に落とすには十分だったのに翔がだめ押しの様に、核心を突いた質問をする。

それにのせられる様に彼女が墓穴を掘る。

これまでの自分の行いのせいなのだから、自業自得だが目の前が真っ暗になった。

（全然だめじゃん。何やってたんだ、俺は？過去を消去してえ。）

急に彼女の視線に耐えきれなくなって、店を出るまで顔を背けて何も話す事が出来なくなった。

過去をどんなに悔やんでも仕方がない。

彼女にとって、俺は恋愛対象じゃないという事を告げられた様に聞

こえて、その日はよく眠る事が出来なかった。

第7話 出会い7 高校2年・冬 side 颯太（後書き）

やっと陽菜に会うことができ、『好き』だと言っ事を実感した颯太。

自覚した途端、恋愛対象外ということが判明。

初めての『本気』になれそうなのに、今までの様に上手くいかない。さて、颯太はこれからどうするのでしょうか？

第8話 出会い8 高校2年・冬 side 颯太

学校に行くと、校門の前で鞠が待っていた。

昨日のことで気分が落ち込んでいるのに、鞠の姿を見て更に気が重くなった。

昨日なげやりに約束したことを後悔するが、仕方なく鞠に近づく。

二人でいつも行く特別棟に向かう。

目的は美術部の作品置き場だった薄暗い部屋。

ここは日中でも北側の教室のせいか日が射すのは真昼の数時間位だ。二人で籠るのには便利な所だった。

扉を閉めてすぐに鞠が首に腕を絡めてキスをしてきた。

沈んだ気持ちだが、少し紛れてくる。

鞠と舌を絡ませながら、自分にはこういう付き合いが合ってるんじゃないかとボンヤリ考える。

柔らかくポリリウムのある胸を揉んでいると、カチャカチャと鞠がベルトを外す音が聞こえる。

鞠の体に手を這わせながらも、頭を占めるのは彼女の事だった。

自分の行いによって、好きになった彼女に振り向いてもらえない。

そんな絶望が俺を自暴自棄にする。

鞠からの愛撫で、彼女の事を諦めて今までの様な快楽を求めてもいいんじゃないか？という思いがさらに大きくなっていく。

鞠を机の上に乗せブレザーを剥ぎ取り、ブラウスとセーターを一緒にたくし上げる。

彼女への気持ちを振り切ろうと胸に舌を這わせようとした時、鞠と目が合った。

その一瞬、昨日の彼女の笑顔や声、その全てが蘇った。それだけで、心と体が止まる。

自暴自棄になり、これまでの惰性で本能のままに流されそうになった自分に理性が戻ってきた。
そして、気付いた。

こんな事しても、自分は満足しないことを。
もう彼女を知らなかった自分には戻れないことも・・・

押し倒した鞠からゆっくりと離れる。

鞠起き上がり、不機嫌そうに軽く睨んでくる。

そんな鞠を見ながらも、徐々に冷静になってくると色々気持ちの整理もついてくる。

「鞠、俺たち別れよ。これ以上鞠とは付き合う事が出来ない。」

鞠は何も反応を見せない。

今まで自分達を取り巻く雰囲気と全くそぐわない言葉に、鞠はついて行けてないようだった。

俺が言った言葉を一言ずつ咀嚼するように、鞠が反応するのをじっと待った。

「何で？私、何かした？だって、今さっきまでそんな感じじゃなかったじゃん？」

まだ正気になっていないのか、ぼんやりと鞠は俺に聞いてきた。

「ごめん。俺、好きな子が出来たんだ。鞠には悪いけど、今までみたいに軽い気持ちじゃないんだ。だから、もうこんな事するは止めにしたいんだ。」

その言葉に鞠は涙を浮かべ乱れた制服のまま俺に抱きついてきたが、

抱きとめることはしなかった。
堰を切った様に鞠は言い募る。

「私、颯太が浮気しても我慢してたんだよ。飽きられないように頑張ったし私に出来る事なら何でもした。我が儘が嫌なら、もう言わないから！だから・・・だから別れるなんて言わないで・・・」

胸に押し付けられた頬を伝う涙がブレザーに吸い込まれていく。

どちらかと言えば気の強いほうだった鞠が、こんなに縋ってくるとは思わなかった。もっと気楽にこの関係が続けていると俺は勝手に思っていた。

どうやら軽く考えていたのは、俺だけだったらしい。

鞠に対して申し訳ないという思いはあるがそれ以上には心が動かない。

「ねえ、その子とはもう付き合ってるの？」

「いや。俺が勝手に想っているだけだから。」

「それなら・・・！このままじゃダメなの？時々会ってくれただけでいいから。その子と付き合っても私何も言わないから・・・だから・・・お願い・・・」

背中に回された腕に少し力が入って、俺を見上げる鞠は苦しそうな顔をして泣きながら見つめてくる。

そんな鞠の腕を静かに離し、俺は見つめ返した。

「それじゃ意味がないんだよ。今までと変わらない。俺は、彼女に俺を好きになつて欲しいんだよ。彼女に俺の本気を知ってもらいたいから、これまでみたいなのは止めるんだ。」

一旦言葉を切って、鞠の反応を窺うが鞠は何も言わない。

「勝手な事言ってるのは分かってる。鞠が、悪いわけじゃないんだよ。」

始業のチャイムが鳴り出す。教室に行くよう促したが「先に行つて」と首を振られた。

俺は鞠の気持ちを受け入れる事が出来ない以上この場に去った方がいいと思つた。

正直、別れ際に泣いて縋れたのは初めてだった。

これまで付き合ってきた子とは、期間も短かったのもあつてか後腐れなく別れる事が出来た。

だから、鞠がこんなにも俺に対して本気だったことに罪悪感を感じた。

昨日、俺が吉岡さんのことで絶望感を感じたのと似ているんじゃないかと思つたら、本当に自分のやってきたことがどれだけ無神経なことだったのか痛い程分かった。

鞠に対して罪悪感はあるものの、これ以上の事は出来なかった。

そして、鞠を傷つけてもいいと思つてしまふ位吉岡さんに惚れてる。昨日彼女と話して、どうしようもない程彼女で一杯になっている自分がいる。

彼女と視線が合うと、緊張もしたがそれ以上に言いようのない甘い疼きを感じ、同時に温かいものが流れてきた。

振り向いてもらえない事に絶望を感じて、他の子に流されている時じゃない。

諦めるのはまだ早い。

俺はまだ、自分に出来る事を何もやっていない。

これまでの事を後悔しても始まらない。

それなら、これからの道が彼女に続く様にすればいい。
彼女との未来は、自分に懸かっている――

第8話 出会い8 高校2年・冬 side 颯太（後書き）

第9話 入学式：スタートライン side 颯太

四月。大学の正門へと続く道の両側を五部咲きの桜が咲いている。天気も快晴で俺の大学生活が明るいものである様に思える。

――やっとこの日、彼女に会える日が来た。

彼女に会って変わろうと決意した高校二年の冬。あれ以来彼女に一度も会った事はない。

『彼女に向き合える様な男になる事』

それまでは、彼女に会わない事を自分に課した。会いたかったが、俺は願掛けをした。

自分でも、こんなことを考えているなんて笑ってしまいそうになる。

一年半前、彼女と話した後、鞠と別れた。勿論、俺の周りにいた女全てを切った。

鞠と別れたことは、あつと言う間に学校中に知れ渡った。

二人でいるが全くなかったこと、別れた日に鞠が泣いている所を多くの生徒が目撃していたからだ。

その噂のせいで、俺に対する誘惑は増えたが一度もその誘いにのることはなかった。

正直な所、自分が女なしで生活を送ることが出来るなんて自分でも驚いた。

携帯の番号もメールアドレスも変えた。簡単に番号を教えていたわけじゃないが、どこからか流出していたみたいで、よく知らない子から電話

がかかってきていた。

家族と結衣以外の女の子の番号は消去したし、登録番号以外は着信拒否にした。

これまでとは正反対の生活を送る様になった俺を、友達は初め「出家でもしたか？」と冷やかし半分、心配半分で声を掛けて来た。

とにかく、『彼女に向き合える様な男』になるためにはまず、彼女の恋愛の土俵にも立つことだ。

彼女にとって問題外の俺がその権利を手にするには、俺に付いて回る噂を消すこと。

これに関しては後悔しても始まらないが、とにかく噂が消える様に真面目に生活を送ることにした。
人の噂も七五日って言うだろ？

そして、ちよつとストーカーっぽいかな？思ったが、彼女と同じ大学に進学することに決めた。

一緒にファミレスで食事した時、彼女が言っていたK大。

もちろん、そのことは覚えていた。

周囲以上に俺の変わり様は結衣を驚かせた。

それだけ俺が彼女に本気だと言うことを知って、翔と応援(?)してくれているみたいだった。

まあ、積極的にとこういうわけじゃなかったが・・・

たまに彼女の志望大学に変更がないことや、このままだった合格できそうなことを教えてくれた。

遊ぶ事に充てていた時間は、自然と勉強時間となった。

そうなると成績も上がる。

これまでもK大は合格圏内だった俺は、担任や進路指導主任からもっと上を目指せと言われた。

それを、やんわりと断りK大に照準を当てた。

まあ、K大も難関大学に変わりのないで反対はされなかったが・・・

いくら自分が真面目になったところで、彼女に彼氏が出来たら・・・と不安になる時もあった。

彼氏がいたぐらいで諦める気は毛頭なかったが、彼女が付き合うつてことはそれだけ相手のことを思っているということだ。

そう考えると言いようのない焦燥感が俺を襲う。

そして彼女に会いにいこうと何回も思い、その度に思いとどまる。それを繰り返しながら、時間は過ぎていった。

高校を卒業する頃には、本気で好きな子が出来て俺が変わった。という事が周囲にも浸透してきたのか、遊びで声を掛けてくる子もいなくなった。

それでも告られる事はあった。どうやら、真面目になったことが逆にウケたらしい。

軽くお手軽なものではなく、明らかに本気が分かるようなものが多くなっていった。

鞠とのがあって以来、言い寄ってくるのが全て軽いというわけじゃないことを知った。

きつと、彼女を好きになっっていなければずっと気付かずにいたと思う。

そして、今日は待っていたK大の入学式。

結衣からの情報で、すでに彼女がK大に合格しているは知っていた。ついでに言うと、翔と結衣も同じ大学だ。

俺と翔は家から入学式に向かったが、結衣は彼女と待ち合わせして大学に向かうと行って先に家を出たらしい。

二人とは、大学で落ち合う予定だ。

といっても、彼女にとって俺はおまけみたいなものだと思うが・・・それでも、彼女に会うのは一年半以上ぶりで緊張する。

「やつと、スタートラインだな。これら頑張れよ。」

「焦らずやるわ。てか、へましない様に？」

翔にかけられた言葉が何を指しているのか、すぐに理解して頷くと気持ちを落ち着ける為に、冗談ぽく返答する。

正門前は、新入生やサークルの勧誘が大勢いた。

この中で二人を見つけるのは、難しいかと思ったが一際目を惹く二人組がいた。

そこには、多くの男達に囲まれていた結衣と彼女がいた。

無意識に体が動き二人に近づくと俺は彼女の腕を引いていた。

それは翔も同じだったようで、俺たちは周りの男を牽制した。

「吉岡さん。そろそろ式の時間だから、行こう。」

なまじバスケしているせいか、身長は高めで不機嫌になった顔で睨みを利かせてる俺たちに、先輩であろう男達がたじろぐ。

（簡単に、近づくんじゃねーよ。俺だって、話したの一回しかねえのに）

そんな周囲を尻目に俺と翔はそれぞれ結衣と彼女の手を引いて、会場へと歩いた。

「あの、霜織君。手、そろそろ話してくれない？」

独占欲丸出しの俺は、だまって手を引かれていた彼女に言われて気

付いた。

男達にムカついて手を繋いでいたことを忘れていた。

「ご、ごめん。つい手なんか握っちゃって。急に連れ出して迷惑だった?」

ほとんど自分勝手な思いで、彼女を輪の中から連れ出しものの不安になってしまった。

「ううん。あんまりしつこいからどうしようか困ってたら助かったよ。ありがとう。」

少しハニカんで礼を言う彼女は、以前会った時よりも綺麗になっていた。

肩までのフワリとした髪はそのままに、桜の色と同じ淡いピンクのワンピースは俺の中の彼女そのままだった。

意識し始めると、急に緊張してきて何も話せなくなった。

入学式の会場に向かう俺たちの前を翔と結衣が歩く。

一年半ぶりの彼女を前に何を話そうか、悩んでいると彼女から話しかけてくれた。

「今日の新生学生代表って、霜織君って結衣から聞いたよ。」

彼女の歩くペースに合わせながら、きもちゆっくり歩く。

身長差は20センチ以上あるのか、少し見上げながら俺に話しかけてくる彼女。

その仕草も可愛かった。

きっと彼女の事を可愛いと感じるのは俺だけじゃないんだろうな。

実際、結衣と男達に囲まれていたし・・・

「あー。そうだね。入学式前に何度か教授に呼ばれて、内容確認とかで結構大学に来てたよ。」

心の中で、意識しないように念じてみるけど、彼女を感じたいと全神経が彼女へと向かっていく。

平静を装って、会場までなんとか話すことが出来た。

四人とも学部が違ったため、それぞれの席に着く。

やっぱり、俺と同じ様に感じている奴は多かった。

惚れた欲目なんかじゃない。

自分の席へと歩く彼女に、皆注目しているのが俺の席からも見えた。それを遠くから見ながら「こんな、ただ見ているだけの関係を早くなんとかしたい。」と強く思った。

第10話 入学式：新たな出会いと期待 side 陽菜

大学の入学式。

正門前は、沢山の人がいた。話には聞いていたけど・・・凄い。

何が凄いつて結衣と正門を通り抜けて会場に行こうとしたら、

あつという間にサークルの勧誘をする人たちに囲まれた。

結衣と一緒にだから目立っただんだと思う。

今日の結衣は、ベージュのパンツスーツを着ていて大人っぽい雰囲気の中に女性らしさがあつた。

まだ、どのサークルに入るかなんて決めてないからって断ってるのに男の人は諦めてくれない。

どうしようかと困っていたら、急に腕を引っ張られ誰かに引き寄せられる。

「そろそろ式の時間だから、行こう。」

すこし、硬質な声が入から降ってくる。

そのまま引っぱられる様に手を繋いで歩いてたけど、恥ずかしさと居たたまれなくなつて手を離す様にその助けてくれた人物に頼んだ。その人は気付いてないみたいだけど、私たちは周りから注目されていた。

特に女の子達の視線が突き刺さってくる。

周りの事など全く気にしてないのか、私の訴えに振り返ったのは霜織颯太くんだった。

ファミレスで一度会ったきりだった彼と一緒に大学の大学に入学すると結衣に聞いた時は驚いた。

あの当方でK大は合格圏内だったから、きっと彼ならもつと上の大

学に行けたんじゃないかと思う。

彼に追いつこうと足早に歩こうとしたら、彼は自然と歩調をゆっくりにして私が歩きやすいペースを作ってくれた。

繋いでいた手を離すと、助けたことが迷惑だったか窺う様に尋ねてきた。

まさか霜織君が助けてくれると思ってなかった事と、

久しぶりに見た彼は、細身の黒スーツにストライプのシャツ、無地のネクタイをしていて大人っぽくなっていた。

同じ年には見えなかったし、少し落ち着いた雰囲気になっていたと以前会った時と変わらない甘めのマスクと一緒にだったけど、

あの時は少し軽い雰囲気があって自然と警戒してしまっていたけど、今はそんな雰囲気もなくなつてあんまり警戒心を抱く事もなかった。そんな彼に窺う様に顔を覗かれたら、どんな子でも赤面してしまうはず。

もちろん私も知らずに少し赤くなつてたはず。だって顔に血が集まっているのが自分でもわかって、それを笑顔で隠しながらお礼を言った。

私たちの前を歩いていた結衣と翔くんを見ると、同じ様に囲まれていた結衣を見た翔君は少しご機嫌斜めになっているようだった。

普段、物事に動じなさそうな彼が結衣の事に関しては別になるらしい。

『少し、心配性なのよ。』結衣はよく言ってるけど、嬉しそうにそんな翔君のことを私に話してくれた。

そんな二人は私の理想のカップルでもある。

入学式の会場に着くと学部ごとに座るため、皆と別れた。

私の学部は、英文部。

小さい頃絵本を読む事が好きだった。

私が好きな絵本はほとんどが海外の物で、翻訳されたものだった。父親の海外出張のお土産にお気に入りの本の原文をもらった。

その原文を読みたいという思いで英語への興味に繋がった。

中学生になると、友達に誘われてよく映画に行くことが増えて、そこで感じる日本語と英語のニュアンスの違い。

翻訳じゃなくて自分で英語を理解したいと思った。

そして、私が尊敬している翻訳者がK大の講師として勤務している事を知って以来、私はひたすらK大を志望した。

この春長年の希望が叶って、私は押さえきれない気持ちで自分の席に着いた。

周りを見ると皆大人っぽかった。ちょっとドキドキ緊張していた私に隣の席の子が話しかけてきた。

彼女は、中山彩音ちゃんといって隣の県出身で、大学進学を機に一人暮らしを始めたらしい。

女の私から見ても、すごく可愛い。声がソプラノで、ふふつて笑う顔が小動物みたいで守ってあげたくなる子だった。

入学式が始まって、小さい声で二人少し話した。

彩音ちゃんと仲良くなれた事で緊張していた気持ちが落ち着いていた頃、新入生代表で壇上へ上がる霜織君が見えた。

堂々と新入生代表を述べている霜織君は、注目の的だった。

私の周りでも「うそー！カッコイイ！」「モデルか何か？」って騒いでる女の子が一杯いた。

初めて会った時もあったけど、皆が騒ぎたくなるのは分かる。

カッコイイんだよね霜織君。人を惹き付けるオーラみたいなのがあと思う。

そう言えば、霜織君の乱れた（？）噂はいつの間にか無くなってい

た。

うちの学校でも、霜織君に振られた子が結構いてそこから噂を聞いたんだけど、どうやら本気になった子ができたらしい。

そのために、これまでみたいな軽い事をやめるって色々な子との関係をスッパリ切ってしまったらしい。

そんな噂を聞いて、これまでの自分を一变に変える事が出来る程、人を好きになれるって凄いと思った。

それと同時に、一緒に食事をした時本当に失礼な事を言っただけと後悔もした。

まあ、同じキャンパスだし今度会った時に謝罪しようと、そんな事を考えていたら彩音ちゃんが私の方を見た。

「あの人知ってる。霜織くんって言ってバスケがね、凄く上手くて優しいんだよ。」

会場内が暑かったのか、少し頬を赤くして私に霜織君のことを彩音ちゃんは話してきた。

どうして霜織くんの事を知っているのか不思議に思ったけど、気にする程でもなかったから彩音ちゃんの話に頷くだけにした。

「私の高校によく遠征に来てて、よく見かけたから知ってるの。でも、やっぱり彼って人気ありそうだね。」

少し困った様に笑う彩音ちゃんに相槌を打つ。

「そっか。霜織君はどこでも目立つんだね。高校の時もすごく人気だったよ。私の高校にもファンがいたみたいだし・・・」

彼の過去の噂に付いては何も言わなかった。

よく知らない他人が色々噂を話すのは良くないと思ったから。

「陽菜ちゃんも霜織君を知ってるの？」

「高校が近くで、やっぱり有名だったからね。一度うちの高校であった試合を見た事がある。彩音ちゃんの言う通りバスケットが上手かったよ。」

不思議そうに霜織君について聞いてきた彩音ちゃんに、高校の時の事を話す。

彩音ちゃんは、私の話も楽しそうに話を聞いてくっていた。

入学式当日にこんな良い子と友達になれて、大学生活は順調に始まった気がする。

これからの四年間に期待を膨らませて、残りの式に耳を傾けていた。

第10話 入学式：新たな出会いと期待 side 陽菜（後書き）

minimoneです。

やっと大学生編まできたって感じです。

そろそろ恋愛モードで二人には頑張って貰いたいところですが・・・
陽菜が恋愛体質じゃなくて、颯太が可哀想になってきます。

「陽菜ちゃんも、今日行くよね？」

次の講義までの休み時間、持ってきたお菓子をパクついている私に彩音ちゃんがニコニコして話しかけてきた。

彩音ちゃんの言う『行く』っていうのは、クラコンのこと。

講義室を見渡せば、いつもは代返をクラスメートに頼む子達が色々メイクを念入りにチェックしたりしているし、妙に皆の服装も気合いが入っている。

なぜこんなに皆が入念になっているのかというと、クラコンこと『クラスコンパ』が今日の夜に経済部と合同であるからだ。

私が在籍している英文科は女子率が高い。じゃあ、どうしてそんなに気合いを入れて皆おしゃれをするのか？

それは、合同でする『経済学部』っていうのがキーワード。経済学部には、『彼』がいるからだ。

——霜織颯太くん彼は経済学部に在籍している。

新入生代表で目立っていた霜織君はやっぱり大学に入っても人気があった。

入学してから一ヶ月が過ぎた今でも、彼に彼女がない。

彼に彼女がない事は学内では有名だった。

もちろん、彼女になりたい子なんて沢山いるけど誰一人として良い返事をもらった子はいない。

携帯番号やメアドも、女の子には教えてくれないらしい。

そんな霜織君に関する噂は、自然と耳に入ってくる。

女の子は噂好きだから。

でも、本当に高校の時に聞いた様な噂が全く彼にはなくなっていた。実際にそんな現場を見たわけじゃないから、あくまで噂だけど・・・

そんな彼だから、仲良くなりたいてって思っている子は多かった。

どうして経済学部と合同クラスコンパが開かれることになったのか分からないけど、その事を知った皆はこの日を楽しみにしていた。

「うーん・・・悩み中。私、大勢で飲むのってあんまり好きじゃないしなあ・・・」

「行こうよ。陽菜ちゃんがいなかったら、私一人になっちゃうじゃん。」

どうやら彩音ちゃんは参加する気らしく、消極的な私を少し強引に誘ってくる。

よく見ると、いつもより可愛らしい格好をしていて 彩音ちゃんらしからず 私の説得を一生懸命にしている。

経済学部との親交は別として、クラスメートとは仲良くなりたくて今日のクラコンに参加する事にした。

皆と違って気合いを入れることもないし、講義が終わった後少しメイク直しにパウダーをはたいて、オレンジの配色具合が絶妙で買ったコーラルピンクリップを塗り直すだけだった私は隣の彩音ちゃんに目をやる。

彩音ちゃんは、髪の毛を整えていた。

鏡越しに目が合うと、準備しているところを見られて恥ずかしかったのか、ほんのり頬を赤く染めて微笑んだ。

かつ、カワイイ！！

なんて、可愛いだろー！本当に女の子らしい！

私が男の子だったら、この仕草だけで胸キュンものだよ。

今日のクラコンを彩音ちゃんがこんなに楽しみにしてなんてちつとも気付かなかったよ。

少し遅れてクラコンが開かれるお店に行くと、皆すでに集まっていた席に着いていた。

妙に人が集中している所に目をやると、その中心に霜織君がいた。これまで噂や彼に向けられる視線としか見た事なかったけど、間近で女の子が霜織君の周りに集まっているのを見るのは初めてだった。

まるで今時ドラマでもこんな現象は起こらないだろう、って思う位の光景に何も言えなかった。

彼とは、数える位しか話した事はなかったけど、凄い人だったんだ。
・

（普通っぽい人だと思ってた・・・けど、こんなに人気があるんだ
ーーー）

その光景に初っ端から圧倒されたけど、まあ関わらない様にテーブルの隅のほうに彩音ちゃんと座った。

霜織君の周りでは、水面下で女同士の静かな戦いが繰り広げられていた。

少しでも会話が出来る席にと、女の子達が座った反動で隅の方に座った私たちの周りには、霜織君以外の男の子達が座っていた。

その他に、女同士の戦いに参戦しない女の子もいた。

彩音ちゃん以外は、ほぼ初対面と言っていい程の人たちばかりだったけど皆の高校や地元の話は面白かった。

大学は高校までと違って色々な所から人が集まっているから、

まだ地方出身の子からは方言が出て来る。

その方言がとっても可愛い！

なんだか、故郷があるって感じがして羨ましい。

ちよつとした異文化コミュニケーションやカルチャーショックで頂垂れている男の子とかをみて、皆で爆笑。

最初は乗り気じゃなかった合同クラコンだったけど、参加して良かった。

彩音ちゃんに感謝しなくちゃ。

相変わらず霜織君の周りの女の子達の戦いは続いていた。

皆が霜織君の携帯番号やメールアドレスを教えてもらおうと、携帯を持って話しかけている。

「もう携帯の充電がヤバいから。それに、そういうのはあんまり人に教えない事にしてんの。特別な人だけ。」

甘く人好きする笑顔で女の子達に断っている彼に、彼女達は不服そうにしながらも自分の携帯をバックに戻していた。

そんな彼はやっぱり、高校の時の噂の人とは思えなかった。

だって霜織君には言っていけないけど、彼のキスシーンを目撃したことのある私にとっては、そのギャップに驚かされるばかりだった。

（人ってかわるものなんだなあ〜）

なんて考えながら梅酒のロックを一口飲む。

楽しい時って、お酒を飲むペースまで 早くなる。

隣に座っている彩音ちゃんを見ると、どうやら楽しかったのは私だけじゃなかったみたいで彩音ちゃんもらしい。

私は結構お酒を飲める方なんだけど彩音ちゃんは弱いのかな？
顔が赤くなってきた。

一緒に飲みに行った事がないから、彼女がどれくらいキヤパがあるか分からない。

とりあえず、一回ソフトドリンクで休憩させた方がいいかな？

彩音ちゃんのためにウーロン茶と他の子のオーダーをしたついでに、外の空気を吸いに非常階段に出た。

皆と話すのは楽しいんだけど、やっぱり初対面の人ばかりだと気を遣って疲れてしまう。適度に休憩が必要だね。

新鮮な空気を吸って、少し酔いを醒ませていると非常階段のドアが開いた。

振り向くとそこには、霜織君が立っていた。

「霜織君も酔いさまし？」

「いや。ちよつと逃げてきた。」

「あー、ちよつと大変そうだったもんね。」

彼の人気っぷりを思い出した私に霜織君は少し不機嫌そうな顔をした。

「よく言うよ。俺の事なんて、全く気にせず他の奴と楽しそうに話してたくせに。」

少し恨みがましそうな顔で霜織君は私に言ってくる。

「だって、このクラコンの主旨は親睦でしょ？近くの席になった子と話すのは当然だと思うよ。それに、霜織君は他の子に囲まれて話

し相手がいないなってことないじゃない。」

「そうじゃなくて、俺は吉岡さんと話したかったんだけど。」

霜織君の言っている意味が理解する事が出来なくて、首を傾げる。

「これじゃ、何の為にこの合同クラコンを企画したか意味ないし・
・」って、項垂れる霜織君を見て、彼がこの企画に関わっている事が分かった。

いつもはこういう飲み会に参加しない彼が今日は参加するって張り切っていたクラスメートを思い出し、彼の参加理由が企画の関係者なら参加して当然かと一人納得している私を横目に、「俺が言った事、スルーなのか分かってないのか・・」多分こんな様な事を小声で呟いて嘆息している霜織君。

霜織君の言う『話したかった』ってきつと幼馴染みの友達と親交を深めたいってことなんだと分かった。

結衣と一緒にいたら、霜織君と会う機会もあるかもしれない。

いつでも会えると思ったたら、ついその事が口について出た。

「そんなの何時だって話せるよ。今日で最後つてわけじゃないし、大学や結衣達一緒とか、また話す機会はあるよ。」

そんなに酔ってはいないと思ってたんだけど、やっぱり酔ってたのかな？

いつもの私だったら気軽には言わない様な事を、口から滑らかに出た。

「今言った事本当？」

「へ？今言った事って、何？」

「だから、いつでも話せるってやつだよ。」

「そりゃそうだよ。霜織君は結衣の幼馴染みだし、私は結衣の友達なんだから会う機会があつたら話せるに決まってるじゃん。変な霜織君。」

思いがけない自分の言葉と彼の反応に、少しビクリしながら頷く。やっぱり酔っているんだわ。

春だとはいえ、夜はまだ冷える。外の冷たい空気にさらされたことで冷静になると、急激に羞恥心にかられた。

そして、残してきた彩音ちゃんの事を思い出して焦る。

だって私でも何気に酔っていたのに、私以上に飲んでいた彩音ちゃんが気になってくる。

霜織君になのか、自分になのか分からない羞恥心と彩音ちゃんの事で、部屋に戻ろうとした私は後ろから呼びかけられた。

「俺、もう少しここに避難しておくから、この場所誰にも教えないでおいでくれない。」

振り返ってみた霜織君は、手すりに凭れて夜空を見上げていた。

私もつられて見上げた後、「わかった。」と返事をして戻った。

非常階段から見た夜空には、これか満ちてくるだろう三日月とネオンに負けず輝いていた金星が綺麗だった。

第11話 クラコンと非常階段と三日月 side 陽菜（後書き）

少しズレている陽菜と颯太。

高校生の時と変わった颯太に、少し驚きと戸惑いを感じている陽菜。
颯太の最初の目的である、颯太の悪い噂は無くして新たな印象を与える事に成功したと思います。

入学して一ヶ月がたってしまった。

同じ大学に入ったと言っても、彼女と仲良くなる事はなく、学科も違う広いキャンパスで偶然出会うなんて事はそうそう簡単にはない。そんな、出会う事もままならないのに彼女の噂は俺の耳に入ってくる。

——彼女は俺が思っていた以上に可愛いと男達の間で噂になっていた。

惚れた欲目を引いても、彼女は可愛いらしい。

俺にとっては、不安になるだけで嬉しくも何ともない噂だ。

正直、今かなり焦っている。

翔達に頼んでみようとも考えたが、きっと彼女は結衣とばかり話すだろう。

それでは意味がない。少しでも個人的に打ち解けたい。

何か良い案はないかと考えていた時、クラスメートからクラコンに誘われた。

新人生代表をしたせいか、毎日懲りずに俺は女に囲まれることが多い。

昔の俺だったら、言い寄ってくる女を片っ端から受け入れていたと思う。

だけど、彼女に出会って以来どんな女に誘われても何とも思わない。

自分で禁欲(?)を決意した時、少し無謀かと思ったが、そんな事は杞憂だった。

どんな女ともやりたいたいなんて思わなくて、大学入学後も女からの誘惑も軽く受け流していた。

それでも、懲りずにやって来るから本当に疲れる。

仲良くなりたい子とは上手くいなくて、どうでもいい女ばかりやって来る？

世の中本当に思う様にいかない。

でも今日は違った。

俺を誘っているクラスの女の話を聞いていた英文科の子が、英文科でもクラコンが来週に開かれると言って俺を誘ってきた。

この誘いで、俺は閃いたんだ。彼女に会える方法を。

—— そう、合同クラスコンパ

クラスの女達は少し渋っていたが、そこは以前培ったトーク術と幹事をすることを引き受けることで合同コンパを実現させた。

いつもはこんな行事には参加しないが、彼女と接点を持てるなら面倒なんてちつとも思わない。

店を決めるのも、予約を取るのも積極的に動いた。

もちろん彼女の好みの店を結衣から聞いて、それに添うような店を探した。

同じ学部の子達も彼女（吉岡さん）と一緒に飲めると聞いて、クラコンの参加率が高かったし、彼女を誘って抜けれるかも、なんて話をしていた。

悪いが他の男に何て彼女を取られるなんて間抜けなことはいらない。

この一年半ずっと彼女を想ってきたんだ。

絶対に、彼女とお近づきになるんだ。

そう思って気合いを入れていたのに・・・

——・・・クラコン当日俺の期待を余所に、楽しそうに周りの男とクラスの女達と仲良く話す彼女を、俺は遠くはなれた席が見ていた。

まあ、俺の周りに女が集まるのは予想出来たが彼女の席の近くに座る事は出来る自信はあった。

現実には、そう甘くなかった。

友達と少し遅れてきた彼女は、俺に見向きもしない空いた席に座った。

彼女がクラコンに遅れてこなかったら・・・悔やまれてならない。

本当だったら一緒に盛り上がっていたのは自分かもしれないと思うと、今の状況が空しくなってきた。

俺は、興味も楽しくもない女達の相手をしなきゃならないし、酒のピッチが早い彼女を見ると心配でしようがない。

実際、周りにいる男が下心あり気な顔で彼女と話している。

いい加減周りの女たちの相手にウンザリしていると、彼女が部屋を出て行くのが見えた。

誰かにこのまま持ち帰られるんじゃないかと心配したのと、彼女と話すチャンスだと思いトイレに行く振りをして部屋を出た。

彼女を追って非常階段に出ると、深呼吸している彼女が振り返った。

「霜織君も酔いさまし？」

彼女は無邪気に首を傾げて俺を見つめて来る。

思ったより意識ははっきりしているが、見つめて来る瞳が酒のせいで潤んでいる。

やっと彼女と話せると思っていたのに、そんな潤んだ瞳で見つめられるとそのまま抱きしめてしまいそうになる。

他の女のあからさまなボディータッチは平気だったのに、彼女に見つめられるだけで、クラクラしてくる。

俺の気持ちに全く気付く事もない彼女は、クラコンで俺と話さなくてもいいと平気で言っただけ。

ここまで意識されてないと心がささくれてくる。

「そうじゃなくて、俺は吉岡さんと話したかったんだけど。」

つい、本音を言ってしまった。

思わず言ってしまった本音。彼女は、不快に思わなかっただろうか？自分の迂闊さを内心罵ってしまう。

いくら好きでも、いきなり彼女にそんな事言ってしまったら警戒されないかと不安になる。

そんな俺に彼女が思いがけない事を言った。

——『いつでも話す機会がある。』

その一言にささくれていた心が、その刺々しさをなくす。

本当に彼女の一挙一動に、俺は振り回されていると思う。

だってそうだろう？さっきの『いつでも話せる』ってことは、俺の事を少なくとも嫌いっていうわけじゃないって事だろう？

そう思ってしまったら、顔がにやけてきそうだったしドキドキしてきた。

たったこれくらいの事で、——彼女はたったこれくらいの事で、俺の心を揺り動かす。

自分を落ち着かせるために、非常階段に残ると言った俺を彼女が振り返る気配がしたけど、今のにやけてしまいそうな顔を見せるわけにはいけないから、ずっと手すりに凭れて夜空を見上げていた。

平常心に自分を戻して部屋に入ると、そろそろ一次会の終わりの時間になっていた。この後は、二次会のカラオケに皆が流れていく。俺は二人で抜けようと誘って来る女達をかわしつつ彼女を探すと、洗面所が続く奥まった廊下に蹲る友達を介抱している彼女を見つけた。

幹事でする事があるから先にカラオケに行くように邪魔な女達を追っ払って、彼女に近づいた。

「吉岡さん。二次会行けそう？一応人数確認したいんだけど。」

いかにも幹事の仕事と装って話しかけると、少し困った顔をした彼女が友達をちらりと見た。

「止めとく。彩音ちゃん動けそうにないし、家に連れて帰ろうと思っ
て・・・」

「そうだね。彼女結構酔っているみたいだけど。大丈夫？手伝うよ。」

そう言っ
て、酔っている彼女の友達を支えて歩きながらタクシーを捕まえるために外に出る。

「一人で大丈夫？俺も一緒に付いて行こうか？」

「大丈夫だよ。彩音ちゃんも歩けるし、家の前までタクシーで帰るから。」

「そう？じゃあ、何かあったら携帯に連絡して。」

そう言って連絡先を交換した後、タクシーに乗って帰る彼女を見送った。

ずっと知りたいと思っていた彼女の携帯番号とメアドが俺の携帯のメモリーに入っている。

今回面倒な幹事やって良かったと心から思った。

クラコン中はほぼ話す事が出来なかったけど、彼女からの思いがけない言葉と連絡先――

今日は、自分が思った以上の収穫があったと思う。

次に会う布石ができた。

彼女の思いがけない言葉は、少なくとも嫌われていないという事だし、

会うための手段（連絡先）が手に入ったんだ。

クラコンで一回話すよりも、こっちの方が断然今後に繋げる事が出来る。

やっぱり、神様は俺の頑張りを見ていてくれたんだ。
彼女の連絡先は、頑張った俺へのご褒美に違いない。

第12話 思いがけない言葉と神様からのご褒美 side 颯太（後書き）

颯太が最後ファンシーなキャラ（陽菜に関してだけです）になってしまいました。

最初のキャラと違う様な・・・

『恋は人を変える』を体現していると思って下さい。

さて、ここまでのんびりとした感じでしたが、そろそろ物語も動き始めます。

お気付きの方もいると思いますが、あの人・・・です。

でも、その前に・・・？

今後の参考や励みになるので、感想お寄せくださると嬉しいです。

mini mone

第13話 アフェア? side 陽菜

私は今悩んでいる。

じつと携帯の液晶を眺めること数十分・・・未だにメールの送信ボタンを押せない。

送信先は、霜織君。

幹事の霜織君は、酔っぱらっている彩音ちゃんをタクシーに乗せるまで支えてくれてうえに心配してくれた。

やっぱり昨日のお礼と無事に帰り着いた事を伝えた方が良さだろうと思ってメールを打ったんだけど、送信しようと思った時に少し迷ってしまった。

だって、昨日色々な女の子達からメアドを聞かれて断っている所を知っているから。

「特別な人だけ」って霜織君は言ってた。

それを思い出したら、なんだかメールを送ることが気が引ける。

アドレスを特別な人にしか教えない霜織君は、幹事ってことで交換したしてくれたけど、やっぱり仲良くない子からメールが来るのは良い気がしないかもしれない。

そこまで思い至ってメールを送信するべきかを私はこの数十分悩んでいた。

（他の女の子からメールがきて、特別な人から誤解されたくないよね。でも、何も連絡しないのも失礼だし・・・）

やっぱり人としてお礼はちゃんとすべきだと決心して、ボタンを押す。

液晶にすぐ「送信終了」の文字が浮かんだ。

送信してしまえば、今まで悩んでいた事が嘘みたいに気持ちが軽くなった。

すんでしまった事は、後悔しても始まらないしね。

朝目が覚めた彩音ちゃんは、午後からバイトがあるからと一緒にランチして帰っていった。

ご飯を食べながら、タクシーまで結衣を支えるのを手伝ってくれたのが霜織君だと分かると、彩音ちゃんは「お礼が言いたい」って言うてた。

少し赤くなっている彩音ちゃんは、よっぽど酔った姿を霜織君に見られたのが恥ずかしかったらしい。

もし私が同じ立場でも、酔っぱらった姿を親しくない人に見られるのは恥ずかしいと感じるんだから、私より女の子らしい彩音ちゃんにはもっと恥ずかしいはず。

お礼が言いたいと言っていた彩音ちゃんに、霜織君の連絡先を聞いた事を話そうか迷ったけど、霜織君自身が簡単に教えていない連絡先を勝手に教えるのも悪いかなって思ってた。

私自身も、きつと今回限りで霜織君と連絡をとる事もないだろう。

彩音ちゃんが帰った後、何をして過ごそうかと外を見ると、気持ちのいい風と温かい太陽、小春日和って感じだった。

こんな日は私にとって洗濯日和。

私は、洗濯するのが大好き。

洗濯物を取り込んだ後のお日様の匂いと柔軟剤の香り。それに囲まれるだけで、幸せになれる。

ベッドシートや掛け布団のシートを外し、洗濯機に入れる。
洗濯機がまわっている間、布団をベランダに干して部屋の掃除をする。

なんとか一通りの事が落着いた頃、携帯の着信音が聞こえた。
携帯に出てみると、相手は結衣からだった。

「陽菜？結衣。これから時間ある？会えない？」

「今、洗濯物干してるからそれ取り込んだら大丈夫だよ」

いつもは比較的落ち着いている結衣が、少し興奮しつつ矢継ぎ早に話している事にビックリしながら答える。

結衣と三時に近くのカフェで待ち合わせする約束をして携帯を切ると、急いで出掛ける準備にとりかかった。

待ち合わせのカフェに入ると、すでに結衣が来ていた。
結衣の座っているテーブルに近づく。

話しかけようとした時、結衣を見て固まってしまった。

だって、結衣が泣き腫らしたような顔をしていたから・・・

さっきのいつもの結衣らしくない電話と泣き腫らした顔を見て、なんとなく嫌な予感がした。

オーダーをとりに来た店員に紅茶を頼んで、二人になった所で口を開く。

「どうしたの？ここに来るまで泣いてたの？」

私の質問に結衣は何も答えず、黙ったまま下を向いている。

無理に聞き出す事はせずに、結衣が話し出すまで待つ事にした。

何も言わない結衣だけど、肩が少し震えて時々鼻を嚙る音が聞こえるから泣いている事だけは分かった。

結衣が泣くなんて、めったにある事じゃない。なんとなく翔君が関係しているんだろう思う。

結衣が泣く理由なんて、翔君の事以外思いつかなから。

オーダーした紅茶を店員が運んできた後、結衣が静かに話し出した。

「翔が浮気してた。・・・私、翔と別れるかも・・・」

結衣の話に反応する事が出来なかった私に気にせず、結衣は話し続ける。

「昨日、私実家に帰ってたんだけど、今日は翔と出掛ける予定だったから実家からそのまま翔の部屋に行ったの。そしたら、ベッドで翔と女の子が一緒に抱き合ってた。」

結衣が話している事が信じられなかった。

だって、結衣と一緒にいる翔君は本当に結衣の事が好きなんだな。

って思える程結衣を大事にしている事が私から見ても明らかに分かっていたから・・・

浮気なんてないと思ってた。

「本当に、浮気したのか翔君に確認したの？」

私の言葉に首を横に振る結衣。

「翔から直接話は聞いてない。あの場を見て、すぐに家を出て行っ

たから・・・」

「じゃあ、本人に確かめた方が良くない？翔君から連絡ないの？」

「分かんない。陽菜に連絡とった時以外携帯の電源、切っているから・・・だけど、今は翔の言い訳聞きたくない・・・」

結衣は、静かに泣いている。

私には恋愛経験がないから、こんな場合なんて声を掛けていいか分からない。

ただ、こんな状態の結衣を一人にする事はできない。

「今日、うちに泊まる？気持ちが悪くまで、一緒にいよう？」

力なく結衣が笑って頷いてくれる。トイレで顔を洗って来るといつて席を立つ結衣を見送ると、私の携帯に霜織君からメールがきた。

『昨日は無事に帰れて良かったです。ちゃんと帰れたか心配だったから連絡貰えて安心しました。ところで、今って一人でいるの？』

霜織君が結衣と翔君の事を知っているか分からなかったから、無難に結衣と一緒にカフェにすることだけメールで伝えと、すぐに電話がかかってきた。

「吉岡さん？霜織だけど、結衣と一緒にいるって本当？」

「うん。昼頃、連絡もらって一緒にいるよ。」

「そっか。あのさ俺、今翔と一緒にいるんだけど結衣、吉岡さんに何か言ってた？」

「・・・うん。その、翔君が浮気してたって・・・言って、別れるかも・・・って」

私の言葉に霜織君は嘆息した。

「翔が結衣と話したいって言うてるんだけど、結衣の携帯繋がらないし・・・結衣に替わってもらえるかな？」

霜織君の頼みに少し考えてしまう。今結衣はいない。

翔君と話すのは、結衣に聞いてみてからの方がいい様な気がした。

「今、結衣席を外しているから戻ってきてから聞いてみるね。一度電話切っていいかな？また後で連絡から。多分急に翔君と話せって言っても、結衣気持ち追いつかないかもしれないし・・・」

そう言って、電話を切ろうとしたら霜織君から呼び止められ、手を止めた私に電話口から翔君の声が聞こえた。

「吉岡さん！結衣とどうしても話したいんだ。吉岡さんからも結衣に言ってもらえないかな？！」

「うん。私も、翔君と話した方がいいと思うから結衣に言うておくね。」

「ごめん。あと、結衣の事宜しく。」

「大丈夫。結衣の事は任せて。」

翔君は、一言「ありがとう」と言って電話を切った。

あんなに翔君の焦った様子は、今まで知らなかった。
その事で、やっぱり翔君は結衣の事を一番に思っていること感じられて、安堵する。

洗面所の方に目をやると、遠くに結衣が歩いているのが見えた。
戻ってきた結衣は、「すごい顔になってビックした」と照れ笑いして席に着く。

少し落ち着いた結衣に霜織君から連絡があつて、翔君が話たいということを伝えると、結衣は、顔を曇らせて翔君と連絡を取るのを拒んだ。

そのこと結衣の様子を知らせるために霜織君にメールした。

『結衣に翔君の事言いました。まだ、翔君と話す事が出来ません。
今日は、私の家に泊まるので、結衣がもう少し落ち着いてからの方がいいみたいです。』

『分かった。今日はそつとしておこう。また明日連絡するよ。』

霜織君からすぐに返信が来た。

携帯を閉じると、私と結衣はそのままカフェを出て家に戻ることにした。

第13話 アフェア? side 陽菜(後書き)

拍手を下さった有り難うございます。

細々と続けているこの小説を読んで頂けて本当に嬉しかったです！
！これからも、少しでも楽しんでもらえる様に頑張ります。

メイン二人を差し置いて、ピンチなのは幼馴染みカップルの二人。
サブタイトルもそのまんま「AffAIR」浮気」です。

第14話 心の傷とお日様の匂い side 陽菜

今夜は二人で飲むことになり、結衣と二人で家に帰る前に食料を買い込んだ。

家にあるもので夕食やサラダは出来るため、赤ワインにシャンパン、ビール、クリームとクラッカー、生ハム、スナック菓子をチョコレートなどお酒と肴を大量に買い込んだ。

二人でお酒を飲みながらたわいない話をしたり、借りていたDVDを見て過ごしていたけど、翔君の事には結衣も私も意識的に避けていた。

結衣は、あまり翔君の話をしたくないようだった。

注意深く観察しながら、だいぶ気持ちが落ち着いてきた結衣に翔君の事の話を持ち出した。

「翔君、結衣と話したいって言ってたけどどうするの？」

私の言葉に結衣は持っていたワイングラスに視線を落とす。

「今は、翔の顔みたくない。考えたくない。」

小さい声で呟く様に話す弱気な結衣を見たのは初めてだった。

結衣は視線をそのままワイングラスに落としていたけど、目に涙が溜まっているのが分かった。

私にとって結衣は、何時だって頼りがいのあるお姉さんみたいな感じだったから、こんなに落ち込んだ結衣に何て言ったらいいか分からない。

「そっか。本当に翔君と別れるって思っているの？」

結衣は何も反応しない。

「どっちにしても、一度翔君とちゃんと話した方がいいよ。うちには、気がすむまでいてもいいからさ。」

静かに頷く結衣にお風呂に入る様に促したあと、いつでも眠れる様に準備する。

結衣と入れ替わりにお風呂に入った後、明日は二人で買い物にこうと話して寝る事にした。

暗くなった部屋で天井を見つめながら結衣と翔君の事を考えた。詳しい状況は分からないけど、さっきの電話からも翔君が浮気していたとは思えなかった。

電話で結衣と話したいと言った翔君は、本当に一生懸命だったし結衣の事を一番に思っていると思うけど一緒にベッドに女の子と寝ていたというのは、浮気していたと誤解されても仕方がないと思う。恋に理想を持っているわけじゃないから、男の人が好きじゃない子とも浮気出来るのは分かっているけど、翔君からは想像付かない。

二人はこのままどうなっちゃうだろう・・・

一人グルグル考えていると、「陽菜。まだ起きてる？」と結衣が声を掛けて来た。

「起きてる。結衣も眠れないの？」

「うん。やっぱり色々考えちゃって・・・あのさ、今回の事ショックだったんだけど、私知ってたんだよね。」

結衣が何を知っているのか分からなくて、結衣の方に体を向けて黙って話の続きを待っていた。

「私と付き合ってからでは本当の所分らないけど、翔昔結構遊んだと思う。」

その言葉に、静かに息をのむ。

「翔は隠してたのかもしれないけど、違う女の子を連れて二人で歩いている所何回も見かけた事あるから・・・」

別に翔君を好きってわけじゃないけど、何て言うか翔君は結衣に一度途つてイメージが自分の中にあつたから、結衣の言葉に少しだけショックを受けた。

「他の子と遊んでいる時も翔は優しくかつたし、付き合ってからでもそれは変わらなかつたんだよね。私、翔と付き合う前に先輩と付き合ってたんだけど、その人に何回も浮気されて辛くてよく泣いていたんだよね。もう浮気しないって言っても繰り返すし、いつの間にか彼氏の事を信用してない自分がいて・・・」

その後も色々あつたんだけど、最終的に別れることが出来て翔と付き合い始めたの。翔と付き合ってから本当に幸せだつたんだよね。翔は一番に私の事を考えてくれるのが嬉しかった。私、翔なら大丈夫って安心してた。だから・・・」

今まで聞いた事がなかつた結衣の過去の恋愛に何も言えなかつた。翔君と一緒に笑っている結衣しか知らなかつたから、そんな辛い経験していたなんて想像もしなかつた。

「だから・・・今日の他の子と一緒にいる翔を見て、『あゝやつぱり』って思っちゃった。」

結衣の押し殺した鳴き声が暗い部屋に響いている。

「もし翔も先輩と同じだったら・・・私、これ以上翔とは・・・いられない。」

翔・・・だから・・・余計に、辛い・・・」

押さえていた感情が、一度口にすることで堰をきつたように結衣から溢れる。

私は、何が出来るんだろう？

きつと翔君と付き合う前の結衣は沢山傷ついて、その傷は翔君と付き合っている中で、癒されていったんだと思う。

だけど結衣にとって今日見た事は過去の傷を思い出させ、翔君を信じていたからこそショックが大きかったんだ。

結衣の気持ちをやっと理解することが出来たと思う。

結衣と翔君の二人の事は何も出来ないかもしれないけれど、結衣のために私が出来ることあると思う。

それは、結衣を一人にしちゃいけないってこと。

結衣のために私が出来る事は、それしかないから・・・

「結衣。せつかく泊まるんだから一緒に寝よつか？」

ベットから抜け出し結衣の布団に潜り込んだ。

結衣は、私の行動が意外だったらしく目をパチクリさせて私を見た後、笑った。

どうやら涙は止まったみたいだった。

「陽菜がいてくれて良かった。いいね、陽菜の家の布団気持ち良い。お日様の匂いがして、心が落ち着く感じがする。」

鼻の所まで布団を引っ張る。

結衣の言葉に今日お布団を干しておいて良かったと思う。

「翔君の事私も分からないけど、結衣と一緒にいる翔君は結衣の事を凄く大切にしているし、彼の中での一番は結衣だと思うよ。翔君の過去はどうか分からないけど・・・翔君の気持ち信じてもいいんじゃないかな。」

お互いの体温で布団の中はポカポカしてきて、眠気を誘う。このままだとすぐに眠ってしまいそうだったから、結衣にどうしても伝えたい事を伝える。

結衣は「ありがと」と小さく言って、目を閉じる。

私も目を閉じ、お日様の匂いと結衣の温かさを感じながら、結衣の傷が少しでも癒される様に願いながら眠りへと落ちていった。

第14話 心の傷とお日様の匂い side 陽菜（後書き）

拍手くださった方有り難うございます。

これを励みに頑張ります！

サブタイトルに毎回悩みます。

ネーミングセンスが全くなくて、悲しくなります。

第15話 目覚めの幸せ、昼のトラブル side 颯太

携帯の着信音で眠っていた意識がゆっくりと覚醒する。

眠気でぼんやりとする中、ベッドサイドに腕を伸ばし携帯をとる。

昨日、彼女をタクシーまで送り届けた後二次会のカラオケボックスに行った奴達と合流した。

カラオケボックスで周りが盛り上がっている中、何度も彼女のアドレスがメモリーの中にあるのを確認しては顔がにやけそうになった。アドレスを手に入れただけで、こんなに幸せになれる俺ってちょっと簡単だな～と思いつつも、これは大きな前進だと思うとテンションも上がって来る。

酒を飲む量も自然と増えると、隣に座った同級生から一緒に抜けようと誘われた。

（ホント彼女以外興味が全くないんだけど・・・香水臭いし、勘弁して欲しい）

他の女達も酔いが回ってきたのかベタベタしてくる奴も出てきて、早々に切り上げようとトイレに行く振りをして家に帰ることにした。家に帰り着いて、彼女から連絡が来ていないか確認するけど、あるのはどうでもいいメールだけだった。

まだ視界がはつきりしない目で時間を確認すると、昼を過ぎた所だった。

昨日飲んだ酒で、遅くまで寝ていたようだ。

のろのろとベッドから起き上がって、メールの相手を確認すると彼女からのメールだった。

その名前を見た途端、体中の機能がはつきりと覚醒した。

メールを読むと、昨日の礼と無事に家に帰り着いたことが書かれてあった。

こっちが疲れてしまう様な絵文字を無駄に使うわけでもなく、その内容もあっさりと事務的なもので、彼女の真面目さに笑みがこぼれる。

たとい事務的なメールだとしても、自分のアドレスに彼女の名前があつてメールが届くという、昨日まで考えられない状況が妙に嬉しい。

返信メールを送ったら、また返事が返つて来るだろうか？

とりあえず、シャワーを浴びて彼女へのメールを送る事にした。

シャワーから出て、濡れた髪をタオルで拭きながらミネラルウォーターを飲んでいると、着信が鳴る。

通話ボタンを押して俺が話し出す前に翔が切羽詰まった声で話し出した。

「俺、結衣と別れるかも・・・颯太、俺どうしたらいいか分かんねえ。マジどうしよう・・・」

いつになく弱気で参っている声に、尋常じゃない事がすぐに分かった。

しかも、結衣と別れるかもって意味が分かんねえ。

とりあえず、状況を確認するために翔の居場所を聞きだし、すぐに行く事にした。

翔の部屋のドアを勝手に開け部屋に入ると、翔がベッドの端に腰掛け俯いている。

声をかけると、翔は顔を上げてこっちを見た。

「急に携帯で結衣と別れるかもってどういう意味？何があつたんだ

よ？」

俺の質問に気まずそうな顔した翔は話し出した。

「昨日、クラスの仲間と俺の部屋で飲み会する事になったんだよ。クラスの女も何人が混じって飲んでて、

終電過ぎるくらいまで皆飲んでたから全員泊まる事になってたんだよ。

俺、途中眠くなって先にベッドで寝てたんだけど、夜中に水飲みたくなって起きたら俺の横に女が隣で寝てた。

他の奴らは、皆帰ってて・・・朝、結衣が家に来て、女が俺の横で寝ている姿見て出て行った。

それから何度も連絡するけど、電源切ってて繋がらないし家にもいなかった。」

翔が話す状況を考えたら、誰でも誤解するだろう。

「そりゃ、朝来て自分の男がベッドで違う女と一緒に寝てたら誤解するだろうな。でも、誤解ならすぐに解けるだろ？」

「一つ確認するけど、その子とは何もなかったんだよね？」

項垂れている翔に確認すると、バツの悪そうな顔をした。

「・・・夜中目が覚めて時、いくらクラスの女でも一緒に寝るのはマズイからベッドから出ようとしたら、その女が起きて・・・」

翔はその続きを言い淀む。

あゝ成る程。何か結衣に後ろめたい事をやらかした事が分かった。そうじゃなきゃ、ここまで翔が落ち込むわけないもんな。

「で、ヤツちゃったわけね。」

わざと冗談っぽく言う。

「いや。最後までしてないっつーか、口だし・・・って、あー！な
んで俺、あんなことしたんだろ・・・酔ってたって言っても・・・」

頭をグシャグシャに搔きながらかなり後悔している翔を見て、携帯
で結衣に連絡してみる。

携帯の向こうから無機質なアナウンスが流れるだけだった。

「ダメだ。やっぱり、結衣まだ電源切ってる。」

俺が結衣の携帯にかけている様子を、不安げに見ていた翔は嘆息す
る。

「あいつさ、前の彼氏が結構浮気してて、その度に泣いてたんだよ。
だから、絶対そんな事で泣かせないつもりだったのに・・・」

翔は結衣と付き合い出す前、遊んでた。

だけど、付き合い出してから一度も浮気なんてした事なかったし、
遊んでいた時だって結衣の事をずっと好きでいた事は一番近くにい
る俺が知ってる。

小さい頃から一緒にいた結衣も翔のことを知ってるが、男の深い部
分みたいなのは女の結衣には話せないこともある。

そういう意味で、一番翔を分かっているのは俺だと思う。

だから、今回の事で翔がどれだけ後悔しているか分かるし、結衣と
の事に不安を感じているのが分かる。

絶対に翔は結衣と別れるなんて考えられないし、逆に俺は別れた時
の翔が心配になる。

何とか翔の力になりたいし、俺も大事な幼馴染みの二人には上手く
いって欲しい。

とにかく結衣と連絡を取る事が最初だ。

翔は結衣の事で頭が一杯で全く頭が働いていない様だった。

結衣がこんな時に頼る相手を考えると、すぐに吉岡さんが思いつい
てメールを彼女に打つ事にした。

もしかしたら結衣から何も聞いていない場合も考慮して、結衣の事
は伏せて誰かと一緒にいるか聞いてみる。

勿論、昨日無事に帰れたというメールの返事も忘れずに。

メールを送つてすぐに彼女からの返事が来る。

やっぱり、結衣は彼女と一緒にいるようだ。

彼女の携帯に掛ける。まさか、こんなにすぐ彼女に連絡を取るなん
て思つてもなかった。

数回のコールの後、彼女は静かに出る。携帯から聞こえる雑音で彼
女と結衣がどこかにいる事が分かる。

翔と結衣の事を聞いたか確認した後結衣に様子を尋ねると、翔と別
れると言っているという言葉に思わず嘆息がこぼれる。

思っていたよりも、状況は深刻だった。

翔と同じ様に結衣も翔の事を好きだと思っていたから、一回の浮気
で別れるなんてないと内心思っていた。

浮気が日常だった俺は、やっぱり『浮気する』ってことを軽く考え
ていた所があつたんだと思う。

一度結衣と話せないか聞いてみると、今結衣は席を外しているらし
い。

俺と彼女との会話から、結衣がそこにいる事が分かり携帯を奪いそ
うな勢이었다翔を、抑えつけ彼女と話を続けていた。

結衣と話せるかの連絡を待つ事になって携帯を切ろうとした俺から

翔は携帯を奪った。

やっと結衣の居所が分かったことと、なんとか話したいと焦っていた翔は勢いよく彼女に話しかける。

とにかく彼女から連絡を待つ事になった俺たちは、翔の部屋で待機した。

その間、俺は気になっていた事を翔に聞く事にした。

「お前と一緒に寝てたって子どうした？」

「結衣が出て行ってからすぐに追い返した。結衣が部屋の中に入ってきたの気付いて、わざと俺の首に絡み付いてきた。

それで目が覚めたんだけど、目を開けたら結衣がいるし・・・」

その女は翔と結衣を別れさせたかっただろう。

「じゃーそっちの方は、自分でちゃんと片を付けておけよ。後々、結衣とのこと邪魔されたくないだろ？それと、結衣にはどこまで話すつもり？」

「嘘はつかない。結衣には本当の事を話すつもり。」

翔は逃げない。『何も無い』と嘘を突き通す事も出来るのにしない所を、俺は凄いと思う

不器用でバカ正直だが、だからこそ翔が言う事は全て本当なことなんだと思えるし、信頼に値すると思う。

まあ、今回の事は結衣の信頼を著しく損なうものだけど、これは男だったら陥りやすい落とし穴だと思う。

それを女の結衣に理解しろってのは難しいかもしれないけど・・・

「分かった。俺も出来る限りフォローするから。」

翔の背中を叩く。

「悪いな。でも、お前が吉岡さんの連絡先知ってて良かったよ。いつの間に連絡取り合う様な仲になったんだ？」

少し余裕が出てきたのか、ニヤリと笑って翔は俺に聞いてくる。

これまで全くと言っていい程彼女に近づけなかった俺を知っているだけに、翔は少し興味を示した。

「たまたま昨日連絡先交換したんだよ。それに、俺の事よりも今はお前の事の方が重要だろ？」

なんとなく気恥ずかしくなり、話を変えようとしたところに携帯の着信音が鳴り、メールを読む。

それは彼女からで、結衣はまだ翔と話ができる状態ではないらしい。俺たちはとりあえず結衣の気持ちが悪くなるのを待つ事にした。

少なくとも今日は、彼女の部屋に結衣が泊まる事になったので翔は安心して居ようだった。

第15話 目覚めの幸せ、昼のトラブル side 颯太（後書き）

minimoneです。

2/14、15に拍手を下さった方有り難うございます。

なかなか進まない颯太と陽菜ですが、少しずつ二人は近づいています。

minimone自身も二人にくっついてもらいたいんですが・・・

これからも頑張りますので、また遊びにきて下さい。

第16話 企みと相談 side 陽菜

翔君の浮気発覚（本当の所は分からないけど）から二日経った。
結衣もだいぶ落ち着いてきて、そろそろ翔君と話し合ってもいい様な気がする。

毎日の様に翔君から結衣の携帯にはメールや電話があるみたいだけど、一度も結衣が応えることはなかった。

きつと、結衣は真実を翔君から聞くのが怖かったんだと思う。

今日の朝ずつと泊まっていた結衣は、朝食を摂っている時に家に帰ると言った。

結衣がこの二日間、眠れず泣いている事を知っていた。

だつて朝起きてくる結衣の目は、いつも赤くなっていたから・・・
最初の頃みたいな気持ちの昂りは落ち着いて一人で家に戻る事を決めた結衣だけど、

結衣からは翔君に連絡しないような気がした。

もちろん、翔君からの連絡に應對すると今も今の結衣からは考えられなかった。

だからつて、私が出しゃばるのも違う気がしなくもない・・・

どうすればいいんだろう・・・？

学食のテラス側に彩音ちゃんと座っていた私は、結衣の事を考えていた。

前に座っている彩音ちゃんは、持ってきている雑誌を読んで春の日差しを楽しんでいる。

「隣いいかな？」

その言葉に振り返ると、Aランチを持った霜織君と彼の友達の人々が立っていた。

霜織君と一緒にいたのは、この間のクラコンにもいた人で名前は梶君だったと思う。

一緒に地元話をした一人で、すごく気さくな人だった。

中学・高校と野球をしていたという彼の肌は少し焼けていて、白い歯が似合う爽やかスポーツマンって感じ。

本人曰く、日焼けはこれでも良くなった方らしいけど。

霜織君は返事も聞かずに隣に座ると、「この間は、無事に家に帰り着いて良かったよ。」と言いながらこちらを見てくる。

「あのつ、この前は酔っている所を運んでくれたって聞いて・・・あつ、あ、ありがとうございます。」

いつの間にか読んでいる雑誌を閉じた彩音ちゃんは霜織君にお礼を言った。

お礼を言われた霜織君は彩音ちゃんに顔を向ける。

「あー、だいぶ酔っていたみたいだったけど次の日大丈夫だった？二日酔いとか。」

彩音ちゃんは、近くで霜織君をみているためか顔を赤くしている。

近くで見る霜織君はやっぱり整った顔をしている。

そんな彼に気遣わしげな顔で尋ねられたら、誰だった緊張もするよね。

彩音ちゃんはコクコクと赤くなったままの顔で頷く。

彩音ちゃんの隣に座っていた梶君が彩音ちゃんと話し出すと、霜織君が顔を近づけてきた。

そして、声を潜めて話し出す。

「吉岡さん、結衣の事ありがとうね。どう？あいつ落ち着いた？」

かつ、顔が近いよ！

こつ、声がダイレクトに私の耳に届く！

耳元で聞こえる彼の声に、心臓が意味なくドキドキする。

いくら他の人に聞かれたなくても、こんな近くに男の人が接近することに慣れていないから意識してしまう。

それでも、話の内容が結衣の事だったから、無理矢理緊張して早鐘を打っている心臓を落ち着ける。

「うん。夜はあんまり眠る事できないみたいだけど、最初の頃より落ち着いてきたよ。今日は家に帰るって言ってたけど、翔君に自分からは連絡とらないと思うんだよね。でも、どうしたらいいかわからなくて・・・」

「だよな」

少し思案顔していた霜織君がまた顔を近づけてくる。

「吉岡さん、ちょっと協力してもらってもいいかな。今日結衣を食事に誘ってくれない？で、店決まったらメールして。俺、翔を連れて来るから。」

こういうのは、苦手なんだけどなあ、と言う霜織君に、恋愛に関してほとんど経験のない私は肯定の意味で頷く。

このままだと、事態は一向に解決しないと思っている私たちは、二人を会わせることにした。

二人が上手くいくかわからないけど、きっかけになると思う。

「おい。二人で何コソコソ話してるんだよ。」

あんまり他人には聞かれちゃいけない様な内容だったから、自然と二人で近寄って声を抑えて話していた私たちに梶君が話しかけてきた。

「別に。この前、吉岡さんにお世話になったからお礼しようと思って、その事話してただけだよ。」

素知らぬ顔して会話を逸らした霜織君の他に、彩音ちゃんが霜織君に話しかけた。

「私も、霜織君にお世話になったからお礼したいです。」

「じゃー今度一緒に食事に行こうか？俺は吉岡さんにお礼したいし、俺もそこで食事をお礼してもらうってのはどう？」

霜織君の言葉に、彩音ちゃんは頬を赤くして、可愛らしい笑顔を見せている。

（——ん？・・・もしかして、彩音ちゃんって・・・）

彩音ちゃんを見ていると、どうも霜織君がカッコイイから赤くなっているわけじゃないような気がした。

もしかして、彩音ちゃんは霜織君の事が好きなのかな？

「俺も、その食事参加したい。いいよね、吉岡さん？」

笑顔で梶君が肩肘をついたままの状態で手を挙げて、参加の意思を表してくる。

彩音ちゃんと霜織君で、どんどん話が進められているのをポケっと見ていた私は少し反応が遅れる。

「いいけど、お前は自腹だからな。」

私が反応する前に、霜織君がすぐさま梶君に言い返すと、「えー」と言いながらも了承する梶君。

結局、四人で行く事が決まったあと食事が終わった霜織君達と別れた。

「陽菜ちゃんって、霜織君と知り合いなの？」

突然の彩音ちゃんの質問に、何て答えたらいいのか分からなくてジッと見つめてしまう。

結衣と幼馴染みで面識はあったし、今は結衣との事で話しているから知り合いだと思うけど結衣達の事を話さずに、それを説明するのは難しい。

「なんだか仲良さそうに見えたから・・・そうなのかなって・・・」

私の様子を窺う様に彩音ちゃんが聞いてくる。

「別に仲が良いわけじゃないよ。私の親友の幼馴染みで顔見知りっただけ。あまり話したことないし。」

頭の中で色々説明の言葉が浮かんできたけど、結局簡単な説明になっってしまった。

彩音ちゃんは、ほんの少しだけ顔色が変わった様な気がするけど、すぐに元通りの彼女に戻ったから気のせいかな。

「あのね、陽菜ちゃん。もう気付いているかもしれないけど、私霜織君の事好きなの。もし知り合いなら、陽菜ちゃん応援してくれる？」

食堂で一緒にいた時に、もしかしたら？って思っていた事を本人に打ち明けられて、少し驚いた。

『応援してくれる？』って言われても、あんまり応援出来る様な事はない気がしたけど、彩音ちゃんの縋る様な目に思わず頷いていた。講義室へ向かう間、彩音ちゃんは色々と霜織くんについて聞いてきた。

でも、私が知っている事なんてほんとに少ししかなくて、ほとんど答える事が出来なかった。

講義室の席に着いてすぐに夕食のお誘いメールを結衣に送ると、すぐに承諾のメールが来た。

講義が終わると待ち合わせの正門前で結衣と合流して、そのまま結衣の家の近くにある創作ダイニングのお店に行く事にした。

お店の場所と名前をメールで霜織君に送ると、一時間後位には翔君を連れてお店にくるというメールが返ってきた。

案内された席に通され、二人ともビールを頼む。

結衣をこっそり窺うと、落ち着いている様で美味しそうにビールを飲んでいる。

これなら翔君とも話し合いできると思う。

結衣の様子に一安心すると、霜織君達がお店に到着するまでゆっくりと夕食を堪能する事にした。

そういえば、と何かを思い出した様に結衣が私に意味あり顔をこっそり向けてくる。

「ここ数日余裕がなくて聞かなかったけど、いつの間に颯太と連絡

とるようになったの？」

霜織君アドレス交換していることを結衣が聞いてきた。

意味ありげに私を見る結衣に、アドレスを交換する事になった経緯を話した。

その流れで今日彩音ちゃんから「霜織君との事を応援して」と頼まれたことも一緒に話した。

「それは・・・少し、厄介かもね・・・」

結衣は軽く眉を顰めて言う。

「そうだよな。私も、そんなに仲良くないから手伝える事なんてないと思うんだけど・・・霜織君、好きな人いるって有名だもんね。」

結衣が『厄介』といった意味が、霜織君には好きな人がいることを指すと思った私は、一緒になって唸る。

「いや、それだけじゃなくて・・・彩音って子・・・」

???

言い淀む結衣が何を言いたいのか、さっぱり分からなくて首を傾げる。

少し思案顔をした結衣が私に声をかけようと顔を上げたまま硬直しているのに気付いて、後ろを振り向くと霜織君と翔君が歩いてこっちに来ていた。

「よお、結衣久しぶりだな。」

何事もなかった様に霜織君が話しかける。

その言葉で、固まっていた結衣が正気に戻って、立ち上がってお店を出ようとする。

「まだ料理きたばっかだろ？せつかくだから、一緒に食べようぜ。」

霜織君と翔君の横を通り抜けようとした結衣の腕をつかんだ霜織君は、結衣をそのままテーブルに戻し私の隣に座らせると、翔君と二人で席に着く。

以前四人でファミレスに行った時と同じテーブル席になっていた。ただ、その時とは全く違って、緊張感のある雰囲気私たちを包んでいたけど・・・

第16話 企みと相談 side 陽菜（後書き）

minimoneです。

2/16、17日に拍手を下さった方有り難うございます。
続きが読みたいと思ってもらえる様に頑張ります。

第17話 色々な君 side 陽菜

今、私は霜織君ファミレスで二人きりで座っている。

向かいあう様に座った霜織君は、長い指で優雅にコーヒーカップを持ちコーヒーを飲んでいる。

その一連の動作を見ながら、まるで高級カフェにでもいる様な錯覚を起こしてしまいそうになる。

実際は、そんな優雅にコーヒーを飲んでいる場合じゃないんだけど・・・

どうして私と霜織君が二人きりでファミレスにいるかというと、時間は数時間前に遡る。

結衣と創作料理のお店にいるところに、翔君と一緒に合流した霜織君が二人を残して私とお店を出てきたから。

「一度二人でよく話せ」って結衣と翔君を残して霜織君がお店を後にしていくのを見て、

何かあったら連絡するように結衣に言っていると慌てて彼と一緒にお店をでた。

結衣達の話し合いが終わるまで、近くで時間を潰して待っていかんと思っていた所で霜織君から誘われて一緒に連絡を待つ事になったってわけ。

ちよつとだけ恨みがましそうな顔をしてこっちを見ている結衣に、少しだけ申し訳ないと思ったけど・・・

創作料理をほとんど食べる事なくお店を出た私たちは、ファミレスで夕食を食べて今は連絡待ちの状態。

二人と別れて、今二時間は経ったかな？

そろそろどちらかから連絡が来てもいい頃かな・・・

そろそろ落ちて着かない私に、霜織君は笑いながら「大丈夫だよ。

「と言ってくれる。」

「別れたりしないよね？」

今回の件に関して翔君側の事情を全く知らない私は、無いとは思っていても翔君が心変わりをしていないか確かめたくて霜織君に聞いた。

「翔は、別れるつもりなんてないよ。あいつは、本当に小さい頃から結衣一筋だから。それは、一番近くで見ている俺が保証する。」

自信を持って言う彼のその言葉に、安堵の息が漏れる。

「あのね、結衣本当の事を知るのが怖くて翔君と話しなくなかったんだと思う・・・前の彼氏の事とか、その・・・翔君って結衣と付き合う前、遊んでたって言ってたから・・・」

霜織君の目が少し大きくなった。

「もしかして結衣と付き合っている間も、他の子と遊んでたんじゃないかって・・・それを知るのが怖かったんだと思う。」

霜織君の言葉に安心出来ても、やっぱり翔君の昔の事を知ってしまった私は結衣と同じ様にもっとはつきりとした確信が持ちたくて霜織君に言う。

そんな私の言葉に、ずっと翔君を避けている結衣の態度に納得がいったのか一つ嘆息する。

「なるほどね・・・結衣知ってたのか。翔の名誉の為に話すけど、

翔が昔遊んでたのは結衣に彼氏がいたからだし。
今回の事だつて、俺から詳しいことは言わないけど、翔がすすんで
やった事じゃないから。」

一緒に寝ていたという女の子について、完全否定しているわけじゃないのが少し気になったけど、霜織君が私の心配している事を再度否定して安心する。

「翔君、優しいしカッコイイもんね。他の子が好きになってもおかしくないよね。」

あんなに完璧と思える結衣でも、翔君が人気があるのに不安を感じていただろうな。

きつとモテる彼氏を持つとずっとこんな風に心配してないといけな
いなんて、付き合うのにも覚悟が必要みたい。

それもなかなか大変だなつて考えていると、霜織君の声が聞こえた。

「吉岡さんつて翔の事好きだったの？」

思いがけない質問に、彼をじつと見つめてしまった。

「カッコイイと思うけど、恋愛対象じゃないよ。それに、私にと
つて二人つて理想のカップルなんだよね。端から見てもお互い好き
つて分かる所とか。」

「フェアな二人つてこと？」

どうやら彼は、高校生の時に話した事をしっかりと覚えてらっしや
つたみたい・・・ね・・・

そう言えば、あの時彼に対して失礼な事を言ってしまったことを、

ちゃんと謝ってなかったことを思い出した。

「覚えていたんだね。えっとあの時はあんな失礼な事言ってゴメンナサイ。」

頭を下げて謝る私に霜織君は、気にしなくていいよ。って言ってくれた。

「実際あの時の俺って、救いようのない奴だったからね。謝ってくれる事は、少しはイメージ変わった？」

その言葉に素直に頷く。

私の彼に対する印象は、高校生の時とは全く違った。というか、高校生の頃の事なんて忘れるくらいだった。

「うん。霜織君は、すごく素敵だと思う。私は、霜織君誠実な人だなんて思う。」

色々聞く彼の噂と、クラコンで見た彼。そして、幼馴染みの二人のために一生懸命な彼。

最近彼と接する機会が増えて、色々な彼を見ているんじゃないかと思う。

今私の前にいる霜織君は信用出来ると思うし、自分の特別な人に対する誠実さが伝わる。

昔の彼は別として、今の彼に思われる人は幸せなんだろうなっと思える。

霜織君は、満足そうな顔をしてこちらを見ている。

彼について考えていると突然『特別な人』で、思い出した事があった。

——そう、携帯のアドレス

クラコンの時、彼に集まる女の子達に彼のアドレスは『特別な人』しか教えないって言っていたのを思い出した。

私が彼のアドレスを知っていて本当にいいのか、不安になってしまった。

「私、霜織君の携帯のアドレス教えてもらって良かったのかな？そのつ、あんまり人に教えてないみたいだったから・・・」

自分でもよく分からないけど、意識して『特別な人』って言うのを避けた。

私が何を言いたいのか、分かったらしい霜織君はアイドル顔負けの笑顔を向けてくる。

「勿論。吉岡さんは、特別だから教えるのは当然。本当は、もっと前からアドレス交換したかった位だよ。」

きつと他意はないんだろうけど、『特別』って言われて自分の顔が赤くなるのが分かった。

彼の言う『特別な人』って、本当に大切な人なんだって思ってたから、自分もその中の一人に入っていた事が、嬉しかった。

自分で思っていた以上に・・・

だって、体がフワフワ軽くなった気がする。

私どうしちゃったんだろう？

彼にとって『大事な幼馴染みの親友』ってこと何だろうけど、それでも嬉しいと思えてる。

きつと、自分が『誰か』の『特別』になれる事が嬉しいだろうなあ

「ご飯食べに行くって話、いつにする？」

きつと締まりのない顔をしていた私に、霜織君は思い出したかのように昼間の話を持ち出した。

突然かわった話題に、霜織君を好きだという彩音ちゃんの事を思い出した。

急に錘が付いた様にフワフワしていた気持ちが沈んだ気がした。

「私は大抵いつでもいいから、彩音ちゃん聞いてみないと・・・あの、霜織君のアドレス彩音ちゃんに教えてもいいかな？」

日程合わせるのに、お互い連絡とれてた方がいいかなって・・・」

彩音ちゃんに応援を約束したからには協力をしようと思ったから、霜織君にアドレスを教えていいか聞いてみるけど、心が暗くなってくる。

「別に、彼女に教えなくてもいいんじゃない？連絡は、俺と吉岡さんがとればいい訳だし。」

彼の言葉に暗くなった心が少しだけ明るくなることに後ろめたさを感じながらも、断ってくれた事にホッとしている自分がいた。

結衣から連絡がきたのは、ドリンクバーで二回目の紅茶を飲み終わった時だった。

翔君との話は終わったらしい。

別れる事はないって霜織君が言っていた通りになったみたい。

このまま二人で家に帰るという事だったし、詳しい事は大学で会った時について言われた。

二人が別れない事に安堵していると、結衣に霜織君に替わって欲しいと言われ、彼に携帯を渡す。

結衣と話していた霜織君は、何度が頷きながら「大丈夫だって」と苦笑しながら話を終わらせ、携帯を返してきた。

「あの二人は、上手くいったみたいだから俺たちも帰ろうか？」

テーブルにある伝票を持ってレジへと歩き始めた。
自分の分を払おうとする私に笑顔で制される。

「ここは俺に払わせて？」

理由もなく他人に御馳走になるのは気が引けるから彼の言葉に、なおも言い募ろうとする。

「今日は吉岡さんと話せて俺嬉しかったんだよ。だから払いたいんだ。そんなに気にするなら、また別の時に奢ってくれる？」

勿論、今度の食事とは別で。と爽やかに言われると断れなくなる。
これって少なくともあと2回は彼に会えるって事だね。

そう考えると、今日は御馳走になってもいいかな？って思ってしまう。

私、断りたくなかったのかな・・・？

家まで送ってくれると言ってくれた霜織君の言葉に甘えて、送ってもらった。

ここから2駅先が私の最寄り駅。そこから歩いて15分程歩くと家

に着く。

街灯が全くないわけじゃないけど夜遅くなると人通りが極端に減ってしまつたため、なるべく早めに家に戻つてくる様にしている。

慣れている駅からの道のりが、今日はやけに早く感じる。

それはきつと霜織君のおかげだと思う。

彼が纏う雰囲気には、心地よさを感じている。

まるつきり気負う事なく話す事が出来るし、彼の話す話は退屈なんて感じさせない。

色々な事に興味があるのか、他愛もない会話の中にも知的さを感じさせる。

会う度に色んな面を持つている彼に興味を引かれる。

最初は、他校でも女の子とイチヤつく軽い所。

次に会つた時は、軽そうな雰囲気だけど案外普通っぽい所。入学式では、サークルの勧誘から助けてくれた男らしい所。

昨日は、『特別な人』を大切にしている真面目な所。

今日は、幼馴染みを何とかしようとする、友達のために一生懸命になれる所と、話題に事欠かない博識な所。

あとの位私の知らない彼がいるんだろう？

家まで送ってもらつた後でも、彼の事が頭から離れなかった。

こんなに興味を引かれる人はこれまでいなかった。

もっと彼を知りたいと思つている自分がなぜだか恥ずかしくなつてしまつた。

―― 私、どうしちゃつたんだろう・・・？

第17話 色々な君 side 陽菜（後書き）

minimoneです。

2/18、19、20に拍手を下さった方、コメントくださった方
本当に有り難うございます。

皆さんに読んで頂けるだけでも嬉しいのに拍手やコメントまで頂けるなんて、本当に幸せです！！

颯太の頑張りで、やっと陽菜も颯太に興味をもってくれるようになりました。翔&結衣の問題も解決し、次は颯太&陽菜です。

また続きを読んで貰えると嬉しです。

PS .

コメントを頂いた方のお名前を出すか迷いましたが、今回は控えさせて頂きました。

第18話 侮れない男 side 颯太

彼女と一緒にファミレスに行った日から数日が経った。

翔の浮気疑惑（途中まではしてるけど）は、なんとか事なきを得て別れずにすんでいる。

別れずにすんだ翔は本当に安心して何度も礼を言ってきた。

実は俺も翔達には感謝している。

翔達のお陰で二人きりで食事をする事が出来たから。

二人の事を話している時に、彼女が翔に対して好感を持っていることが端々で窺えた。

俺の中で少しだけ不安がよぎる。

——彼女は翔の事が好きなんじゃないか？

そんな事を思ってしまうと、どうしても彼女に確かめたくなる。

実際に確かめてみると、彼女は翔というよりも結衣と翔の二人に自分の理想を見ていただけだった。

思わず安堵の息が漏れる。

結衣から話し合いが終わったという報告が彼女にかかってきた。

携帯を彼女から受け取り結衣と話す。

二人このまま帰るため彼女を家に送り届ける様に言われた。

結衣に言われるまでもなく、こんな夜に一人で帰らせる訳がない。

彼女みたいな可愛い子が一人歩いていたら、変な奴らに絡まれるに決まっている。

そんな危険な事みすみす見過ごすなんて出来るか。

携帯を切ろうとした時、「変な気起こさないでちゃんと送ってよ。」

としつかり釘を刺される。

結衣に言われるまでもなく変な気を起こすつもりは全くなかった。

彼女には、ゆつくりと進めていくつもりだし、今日は二人で食事をする事が出来たんだ。

それだけで俺にとっては十分満足いくものだった。

変に焦ってしまうと、これまでの一年半という時間が無意味になってしまう。

それにしても会計をする時、自分の分を払おうとする真面目さが、彼女らしくて胸が温かくなった。

これまで周りにいた女達は奢られるのが当然の様にしている奴が多かった。

金に困っている訳じゃないから奢る事に何も感じる事はなかったが、彼女の様に真面目に自分の分を払おうとする姿を見ると、これまでの女達って奢られることが当然だと思っていたんだな。って思った。反対に、彼女にはもっと甘えてもらいたいと思った。

別に金銭的な事だけじゃなくて、もっと頼って欲しいと思う。

彼女の性格からして、簡単に人に頼る様な事はしないだろうと思うが・・・

いつか彼女から頼られる様男になりたいと思う。それには、彼女にもっと信頼してもらわないと。

なんとか自分の分を払おうとする彼女に、以前した食事の約束以外の約束を取り付ける事で納得してくれた。

今回奢られて次に食事では彼女が奢る。

これって彼女の言うフェアってやつだろ？

俺的には全然フェアじゃないって事に彼女は気付いていないんだろ
うな。

この提案は彼女のフェアっていう考えを利用して、次に会う機会を作ったんだから。

そんな俺の思惑に気付かずに、彼女は家に帰る間ずっと楽しそうに話していた。

初めて行った彼女の家は、女の子が好みそうな外観をしていて新しくセキユリティーもしっかりしていた。

実家から通うことも可能な距離にある大学だったが、彼女は一人暮らしをしていた。

父親の海外赴任が決まり、彼女の大学に入学と同時に母親も父親の所へ行ったそうだ。

駅から彼女の家までは、そんなに遠くなかったけれど存外暗かった。彼女と二人で歩きながら、やっぱり彼女を家まで送って良かったと思う。

彼女を送り届けた後の帰り道、これからもこうやって彼女を送るのが自分であればいいのに。と思った。

次の日大学で翔と会って、昨日の事を聞いた。

あの後、結衣にメチャメチャ説明して何とか許してもらおうとしたらしいが、

結衣は詳しい事を聞いた訳じゃないらしいが究極の所ヤツたか、ヤツてないかという所を確認したらしい。

あんなに避けていたのに、思ったよりもあっさり自分を許してくれて少し拍子抜けしたと言っている翔に、

彼女から昨日聞いた、翔の中学時代を結衣が知っているという事を教えた。

それまで結衣との関係が修復したと喜んでいた翔が、急に顔を強張らせたと思ったら急にどこかへ走りだしていった。

恐らく結衣の所へ行ったんだと思うが、翔は自分の過去を結衣が知っていて、その事実と今回の事が一層結衣を傷つけたという事にすぐに気付いたみたいだった。

その後、二人がどんな話をしたのか分からない。

俺からその事を聞くわけでもないし翔も何も言わなかったが、二人はこれまでと何ら変わらず一緒にいる。

まあ、当分の間エッチなしって言って落ち込んでたが仕方がないと思っただし、ぶっちゃけ笑ってしまった。

俺が知っている中で今回の事は、付き合い出して以来一番の危機だったと思う。

それでも変わらずにいる二人は、彼女の言う『お互いが同じだけ想い合い、想い返している』フェアな二人なんだろうな。

以前食堂で会った時に約束した食事について、 今度の金曜日が都合がいいというメールが彼女から来た。

すぐに横にいた梶に金曜日の予定を確認して、彼女にメールを送り返す。

「俺、かなりテンション上がるわ」

梶の言葉にチラリと目をやるが、気にせず梶は話を続ける。

「吉岡さんと一緒に食事出来るなんて、颯太が彼女と仲良くなってくて良かったよ。それに、吉岡さんと一緒にいた子も可愛かったし。」

「何、お前吉岡さん狙いの？」

どうしても彼女に好意をもっているような言葉に敏感になる。

それが友達であつても、だ！

軽く不機嫌になった気持ちを隠し平気な顔して梶に聞く。

「いや。そうじゃないけど、可愛い子と食事出来るのは誰だって嬉しいだろ。お前だって、俺との食事と吉岡さんとの食事だったらどっちがいいよ？」

暢気に少しズレた質問返しをされた。

即答で吉岡さんを選ぶと答えた俺に、「だろ？」と梶が頷く。どうやら梶は、可愛い子と食事できるのが嬉しいだけらしい。

彼女の事をそんな目で見て欲しくないが、本当に可愛いんだから仕方がない。

別に誰が彼女を気に入っていようと譲る気も負ける気もないが、なるべくなら友達とは女の趣味は被らないほうがいい。

お互いに夕方まで講義があるため、正門前で待ち合わせする事になっていた。

梶と待ち合わせ場所に行くと、まだ彼女たちは講義が終わってないらしく正門に来ていなかった。

二人で彼女達が来るのを待っていると、梶が徐に話しかけてきた。

「あのさー吉岡さんと一緒にいた子って大丈夫なん？」

時間を確認するために、時計に落としていた視線を梶に向ける。

「あゝ大丈夫なんじゃね？興味ないし。」

梶が言いたい事が分かった俺は、面倒臭いとばかりに答える。

彼女と一緒に来る彩音という女が、俺に好意を持っているんだろう

と梶は言いたいらしい。

そのことは、この間一緒に昼を食べた時に気付いていた。自意識過剰ってわけじゃないが、ある程度経験がある奴なら彼女の態度は分かりやすかったと思う。

実際、梶も気付いているから俺に聞いているのだろう。

・・・彼女は、気付いてなさそうだったけど・・・

あの後、ファミレスで俺のアドレスを彼女に教えようとして所をみると、

彩音っていう女は俺の事を気に入っていると、彼女に余計な事を言っただけで分かった。

だからアドレスを教えることを拒否した。

というか、彼女だから教えただけであって別の女からの連絡なんていらねー

悪いけど、彩音という女には興味全くない。

クラコンで助けたのも、一緒に昼食を食べたのも、今日一緒に食事に行くのも、俺が吉岡さんと居たかったからだ。

「やっぱりね。どちらかと言えば吉岡さんに興味あるって感じだもんね、颯太は。」

にやりと笑い俺を見る。

彼女には好意をみせていると思うが（あんまり気付いてないけど）、梶の前では見せてないと思う。

確信があるのか、かまをかけているのか、いまいちはっきりしないが、なかなか鋭い洞察力を持っているらしい。

梶は意外に侮れない男だ。

自分の気持ちがバレているかもしれないと思うと気恥ずかしくなつて梶から目を外し英文科の校舎がある方へ目をやると、彼女達がこちらに向かっているのが見えた。

第18話 悔れない男 side 颯太（後書き）

minimoneです。

2/21、22に拍手を下さった方、コメントくださった方、誤字脱字を教えて下さった方有り難うございました。

皆さんに読んで頂けるか不安でしたが、拍手やコメントを頂ける度に本当に胸一杯になってます！

PS .

ここ最近、更新が遅れていてすみません。次はちゃんと更新したいと思います。

第19話 男の友情、女の友情 side 颯太

四人で行った店は梶おすすめのアジアンテイストだった。

俺の隣には彼女の友達の彩音が座っている。

酒も食事も美味しく会話も盛り上がっていたが、梶や彼女が見えない所で彩音と何度か手がぶつかったり、指が微妙に絡んでくる様な気がした。

あからさまじゃないし故意なのか偶然なのか判断し難い所だったが、もし彼女に見られたりしたらたまったもんじゃない。

それとなく彩音から距離をおくが、話す時に上目遣いでじっと俺を見ってくる。

これまで俺が相手にしていた女みたいに色気を纏って絡んでくるようなものではないため、

はつきりと拒否の態度が出来ない。

男によつては誘っているのとれる彩音の態度に、彼女の計算高さを感ずる。

女の計算高さには慣れているから誘惑に引っかかりたくないけれど、吉岡さんにバレるんじゃないかとヒヤヒヤして様子を窺が、彼女は至っていつも通り会話を楽しんでいる。

「颯太、ちょっと席替わってくれる？」

会話の合間に突然梶が席を替わる様に言ってきた。

どうやら梶は俺と彩音のやり取りを気付いていたようで助け舟を出してくれた。

さすが侮れない男。

この分じゃ、吉岡さんの事を好きな事も気付いているんだろな。

彩音と離れたおかげで、何の憂いもなく吉岡さんとも話す事が出来

る。

彩音の打算的な態度の後だったから、彼女の純粋に食事を楽しんでいる様子に気持ちや和らぐのを感じた。

やっぱり彼女の雰囲気や俺は好きだ。

初めは、側にいるだけで止まらない動悸や緊張で上手く話す事も出来ない程の一目惚れだったと思うが、

彼女と話す回数が増える度に彼女の中身も含めて全てを好きになっていく。

純粋に彼女の事を知りたいと思うと同時に、彼女の女の部分を知りたいという欲望も出てくる。

――それは、恐らく誰も見た事のない彼女・・・

ふと時計をみると、そろそろ終電が気になる時間になっていた。

終電に間に合う様に店を出る。

吉岡さんを一人で帰す事は危険という事を知っているため、送ろうと声を掛けた。

「私そんなに酔ってないし、どちらかと言えば彩音ちゃんの方が酔ってて危ないからお願ひしてもいい？」

私の家に泊める事が出来たら良かったんだけど、明日、朝早くから用事があるって家に帰らないといけないんだって。

だから彩音ちゃんを送ってもらえると助かるんだけど・・・」

彼女に言われて彩音を見ると、彼女より酔っている様に見える。

俺の申し出に、申し訳なさそうな複雑な顔をした彼女に頼まれたら断れない。

それでも一人返すのはやっぱり不安だ。

すると梶が彼女を送ると言い出した。

悩んでいる彼女に「送ってもらいなよ。」と促すと、彼女も受け入

れる。

（くそつ、本当は彼女を送るのは俺の役目だったのに！なんで、別の女を送らなきゃならないんだ。）

梶と代わってもらいたいが、彼女の手前一度約束した事は守り通そうと思ひ直す。

帰り道を彼女一人で歩かせる事が無くなった事に安心する反面、梶とあの暗い道を二人で歩くというのも違う意味で心配だ。

だが、背に腹は代えられない。

梶の事を信用していないわけじゃなくて、彼女と一緒にいるということが俺的にダメなんだ。

「吉岡さんの事は心配しなくてもいいよ。ちゃんと送り届けるし、手は出さないよ。」

だから颯太は自分の事やってこい」

こつそりと俺に囁いて、意味ありげな笑顔を残して梶は彼女を送るために歩いてホームに歩いて行く。

やっぱり梶は俺が彼女の事を特別に思っている事に気付いているの間違いないだろう。

次に会った時に、何を言われるのかと思うと少し面倒だと思うが、彼女をちゃんと送ってくれると言った梶に安心した俺も彩音を送る事にした。

酔っている彩音が凭れかかってくるため仕方なく支えながら歩き始める。

家を聞くとここから遠くない所に住んでいるが、この状態で一緒に歩くのは勘弁して欲しい。

タクシーをつかまえ乗り込むが、二人になって話す事も特になく、お互い無言のままだった。

タクシーを降りると、彩音は少しフラフラしながら歩いている。家の前まで着いても、上手く鍵を差し込めず代わりに玄関のドアを開く。

さすがに家に上がる事は躊躇われるため、玄関から彩音がそのまま部屋の中と歩いて行くを確認する。

「じゃあ帰るから、ちゃんと鍵かけて」

一言声を掛けて家を出ようとすると、「霜織君」と呼びかける声に振り返る。

いつの間にこちらに戻ってきたのか、目の前に彩音がいた。

「帰らないで。・・・私、高校生の時から霜織君の事好きだったの」

そう言って、ゆっくりと抱きついてきた。

そのまま下から見上げる様に上目遣いで俺を見つめる。

「去年の夏に隣の県の高校に合宿に来たでしょ？私その出身で、夏に霜織君と会っているの。」

体育館横の水道の所で、私が置き忘れたタオルを隣にいた霜織君が追いかけて、渡してくれたの。

・・・思い出してくれた？」

思い出したかと聞かれても、さっぱり思い出せない。

たしかに合宿に行ったのは覚えているが、そんな小さな事を覚えているわけがない。

思い出せないため、何の反応も示さない俺に彩音は続けて話す。

「それ以来ずっと霜織君のこと忘れられなくて、バスケの試合に応

援行ったりして見ていたの。

だから大学でもう一度会えた時、凄く嬉しくて・・・それから大学で見かける霜織君の事を本気で好きになったの。

今日、一緒に・・・いて？」

少し潤んだ瞳で見つめられた後、顔を胸に埋めて抱きしめてくる。

客観的に見て彩音は男受けするタイプだと思うし、きっと昔の俺だったら、そのままベッドへに直行だったと思う。

だけど色々な女を見てきたからこそ、庇護欲をそそるような仕草や何気なく男を誘う様な態度を冷静に見る事が出来る。

彩音は全てが計算ずくというわけではなく、本能的に自分がどうすればいいか悟っているタイプなんだろう。

胸に埋めていた顔をあげ、もう一度俺を見つめてくる目は期待が込められていた。

そんな目をされても、俺の心はちっとも反応しない。

高校生の頃からと言われても彼女の事を知らないし、なんと言っても俺は吉岡さんが好きだ。

「ごめん、好きな人いるから」

期待を込めた瞳が暗くなっていく。

「ずっとその人の事好きで彼女の好みに少しでも近づきたくて俺、変わったんだよ。

今の俺がいいっていうなら、それは俺の好きな人のおかげだし、今の俺は、彼女のための俺だから、君のために同じ事を出来るかって言われたら無理だ」

吉岡さんを送りたいのに梶に任せたのは、はっきりと俺の気持ちを

彩音に伝える必要があると思ったからだ。

彩音は、吉岡さんの友達だ。

変に期待を持たせることも出来ないし、ここをはっきりさせなければ、

彼女が『友達の好きな男』としてしか俺を見てくれなくなると思ったからだ。

フェアを信念にしている彼女は、友達の好きな男を恋愛対象に見たりしない事は明らかだ。

きっと女の友情を優先してしまう。そうなる前に、先手を打つ必要があった。

じゃなければ絶対に彼女をたとえ友達だとしても、みすみす他の男になんかに送らせたりしない。

彩音が酔った振りをしていたのは、薄々気付いていた。

実際家についてからの彩音は酔っているように見えなかったし、俺に送らせる様仕向けるため、事前に吉岡さんに上手いこと言っていたんだと思う。

梶も彩音の酔った振りに気付いていたのか、俺の思惑を知っていたのか分からないが、

聡いあいつの事だから察してくれたからこそ、彼女を家まで送ると言ってくれたんだと思う。

背中に回っていた彩音の腕を外し、「ごめん」と最後に一言伝えて玄関を出て行く。

大通りまで戻りタクシーで家に帰ることにした。

タクシーに乗っていると、梶から「任務完了」というメールが届く。梶に心の中で感謝しつつメールを返し、こっちも無事に終わった事を伝えた。

第19話 男の友情、女の友情 side 颯太（後書き）

minimoneです。

2/23 24に拍手を下さった方ありがとうございます。
今回は、ちゃんと更新することが出来て一安心です。

第20話 裏切りですか？ side 陽菜

結衣と話す事が出来たのは、霜織君と一緒に食事した翌日の午後だった。

結衣と二人で、アップルパイが美味しいと流行っているカフェで三時のおやつをしている。

翔君と仲直りした結衣は、いつもの結衣に戻っていた。

「本当は色々詳しい事を聞こうとしたんだけど、それ知っちゃうと絶対許せなくなりそうだったから、エッチをしたかどうかだけ確認したよ。」

すっごい勢いで否定してたけど、エッチ以外の何かはしたみたいだね。何か言いそうになったんだけど、私が止めたの。なぜか、付き合う前のことまで話し出しちゃって・・・

あんなに一生懸命に謝ってる翔見ちゃうと、もう別れる事も怒っている事も出来なくなっちゃった。これも惚れた弱みよね。」

照れくさそうに笑っている結衣は、ここ最近で一番の幸せそうな顔をしていた。

「でも、これから一ヶ月はエッチな事はしないし、デートの経費は翔持ちにするように約束したんだ」

「許したからって、何のペナルティーなしっていうのはありえないからね」と言ってアップルパイを一口頬張っている。

さすが。結衣は押さえるべきポイントを押さえている。

デートの経費一ヶ月分にはチョット翔君に同情しそうになったけど、今回は仕方がないかな？

一時はどうなる事かと思っただけ、二人が仲直りしてくれて良かった。

「良かった」と一言漏らす私に結衣が話を変えてきた。

「それにしても陽菜と颯太には嵌められたな。いつの間にか颯太と連絡とって示し合わせてるんだもん。それで、あの日颯太と何かあった？」

照れた可愛い表情から一転、ニヤリと人の悪い顔をした結衣が聞いてくる。

「別に結衣が期待しているようなことは何もないよ」

平気そうに答えながらも、霜織君に感じた気持ちがバレるんじゃないかって動揺する。

それを隠そうと、プレートに添えられた生クリームをアップルパイに少しのせて食べる。

「陽菜は颯太のことどう思ってるの？」

ドキリ、と心臓が一回大きくウサギの様に跳ねたことを悟られない様、

必死に平静を装ってたけど動揺が一層増してきた。

女の子は恋愛話が大好きだから、どうしてもそっちに話が傾いてしまふ。

だけど、今まで結衣が霜織君について聞いた事なんて一度もなかったのにどうしたんだろう？

やっぱりバレちゃった？それとも何か変な所あった？

頭の中で色々考えが浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。

「べ、別に普通だよ。前は噂通りの軽い人と思っていたけど、大学に入ってから霜織君は全然別人みたいになっているし・・・もつと話せるといいな、って思う。」

きつと、言霊って本当にあるんだと思う。

どんなに誤摩化しても結衣にはバレちゃうんだろうな、って思ったら今の気持ちを正直に話していた。

そして一度自分の気持ちを言葉にしまうと、霜織君に興味を持つている自分を素直に認める事ができた。

彼を意識してしまった一方で、彩音ちゃんの事を思い出して気が重くなる。

この気持ちは何なんだろう？

ただの興味？それとも、もつと別の何か？

百面相をしている私をジツと観察している結衣に気付かずに、昨日から自分の中で感じている気持ちに想いを馳せる。

「颯太かぁ〜いいんじゃない？以前の颯太なら絶対に陽菜を近づけさせないんだけど、今は別人の様に変わったからね。もともと女関係以外なら信頼できると思うしね。陽菜が颯太に興味を持ったんなら、もつと話してみたら？興味が恋に代わるかもしれないしね。」

いたずらっ子の様な顔をした結衣が言っている事が少しの間理解出来なかった。

興味が恋に代わる・・・？

—— 恋？ ——

「べつ、別に好きだなんてっ」

思いがけない結衣の言葉に一層動揺してしまった。だって、霜織君の事を恋愛対象で見えていなかったから。

「誰も今、陽菜が颯太の事を好きだなんて言っていないよ。可能性の一つを言ってみただけ。」

あまりにも意外な言葉に動揺してしまったけど、結衣の言葉に落ちて着きを取り戻した。

好きになる可能性ね・・・

私が霜織君を好きになる事は多分ないと思う。

なぜなら、彼は彩音ちゃんの好きな人だし応戦するって約束したから。

じゃあ、彩音ちゃんと霜織君のことを考えると気持ちが沈んじゃうのは何でだろう？

せっかく仲良くなれた彩音ちゃんをとられちゃうって感じているのかな？

何も話さない私に、結衣も話は終わ리と思ったのか次の話題に話を変えた。

「彩音ちゃん、霜織くんたちと食事に行くって言ってたの覚えてる？日程決めるのに、彩音ちゃんは都合がいい日ってある？」

講義も終わり、一緒に新しいミュールを買おうとお気に入りのお店を物色してる時に彩音ちゃんに聞くと、すでにお目当てのミュールを買っていた彩音ちゃんは、目を輝かせながらこちらを振り向く。

「えっ、本当に霜織君と食事できるの!？」

嬉しさを表していた彩音ちゃんが急に眉を顰めて私をみる。

「何時そんな話したの？」

それまでの雰囲気が少しトゲのあるものに変わった様な気がした。

「前に話した霜織君の幼馴染みの結衣と食事している時に、結衣の彼氏と一緒に霜織君が来時に話したただだよ。」

彩音ちゃんが気分を害したんじゃないかと慌てて説明する。

嘘はついてないけど、携帯のアドレスについてだけは素直に言うことが出来なかった。

「そっか。そういえば、陽菜ちゃんの親友って同じ大学なのに一度も会った事ないね。今度私にも紹介してくれる？」

笑顔の彩音ちゃんは、やっぱり可愛いな。て思いながら頷く。

彩音ちゃんの言う通り一度も結衣と彩音ちゃんを紹介していなかった事に気付いて、今度紹介することを約束した。

彩音ちゃんは、自分のスケジュール帳をみながら都合のいい日を探している。

「金曜日なんてどうかな？今度は、クラコンみたいに迷惑はかけないからね。土曜日の午前中から予定があるから、家に帰らないといけないし」

クラコンで霜織君に助けてもらった事は、彩音ちゃんにとってよっぽど恥ずかしかったみたい、少し照れ笑いしている。

良かった。さつき機嫌が悪くなった様に感じたのは勘違いみたい。安心した私は、新作のミニールを試しに履いて鏡でチェックする。

買おうか迷って、後ろにいる彩音ちゃんにも聞いてみようと思つて振り向くと、彩音ちゃんが私の目をじっと見つめてくる。

「陽菜ちゃん。私、今度の食事の時に少しでも霜織君と仲良くなりたの。手伝ってくれる？」

見つめられて、不安そうな声で聞かれると協力したくなってしまう。彩音ちゃんは、霜織君に少しでも自分を知ってもらいたいって思っ
て一生懸命なんだ・・・

胸の奥の方がチクンと何かに刺されている気がする。

「何していいか分からないけど、勿論協力するよ。」

笑顔で応えながら、好きな人にひた向きな彩音ちゃんに対してひどく罪悪感を感じた。

彩音ちゃんを応援したいって、本当に思っている。

なのに、霜織くんから『特別』と言われて嬉しかった事や彩音ちゃんの事を話す時に気分が沈んだこと、

そんな自分がひどく最低な人間に思えた。

きっと胸がチクチクするのは、最低な私を責めているんだ。

霜織君の事は、気になっている。

もつと彼と話してみたいと思うけど、それは人として色々な魅力をもっているから、どうしても興味を持ってしまうつて言う意味。

だけど結衣が言う様に、今自分が抱いている気持ちに絶対に恋にならない、って誰が言えるだろう？

そんな風に興味を持って霜織君と会うのは良くない事なのかな？

この気持ちは、彩音ちゃんを裏切っている事になるのかな？

第20話 裏切りですか？ side 陽菜（後書き）

minimoneです。

2/25、26に拍手&コメントを下さった方ありがとうございました。

颯太の男っぷりがあがってきた。とお褒めに預かりminimoneも一安心です。

そして、彩音はこのまま本当に引き下がるのか？といったコメントも頂いて本当に嬉しいです限りです。

お察しの通り彩音は、もう少し頑張る予定です！

今回は、前回の場面から時間は少し遡った陽菜サイドでした。本当は、前回と今回どちらを先にしようか迷ったんですが・・・皆さんはどちらが良かったですか？

もし良ければ、教えて下さい。今後の参考にしたいです。

第21話 揺さぶる質問 side 陽菜

約束の金曜日が来た。

講義が終わって待ち合わせ場所に行く前に、彩音ちゃんは鏡の前でメイクを直し髪の毛をチェックしている。

終わるのを待っている私は、少しボーっとして彩音ちゃんを見ている。

彩音ちゃんに協力すると言っておきながら、霜織君に興味を持つ事は裏切っている事になるんじゃないかっていう思いが頭から離れない。

裏切っているって思う一方で、興味が恋に変わること前提で考えているのだから、興味は興味のままでいるようにすれば裏切る事にならないんじゃないの？って考えてしまう自分もいる。

出口の見えない問題を、一人でハムスターの様にグルグル空廻って考えている。

「陽菜ちゃん、どこか変な所ない？」

私の前でぐるりと回る彩音ちゃんを見る。

「大丈夫。どこも変じゃないよ。可愛い。」

どこか後ろめたい気持ちがあるからなのか、どうしてもぎこちなくなる。

明確な回答は見つからないけど、あんなに一生懸命な彩音ちゃんに協力したいって思うから、今はそれを優先する事にした。

「あのね、少しでも霜織君と話せる様に協力してね？」

私を覗き込む様に『お願い』と手を顔の前で合わせてくる彩音ちゃんに頷いた。

正門まで歩きしていると既に待っている霜織君たちを見つけた時、チョットだけドキって心臓がビククリした。

約束通り霜織君達と合流して、お店に行く間も彩音ちゃんと霜織君が二人で話す事が出来る様に、なるべく梶君と話したし、席も梶君の隣に座った。

彩音ちゃんは本当に嬉しそうに霜織君と話していて、それを見るとこれで良かったって思えた。

胸の奥の方がチクリチクリと刺してくるのを無視して、楽しそうに笑顔を作って無視をした。

帰る頃になると、彩音ちゃんは酔っている様に見えた。

クラコン程ではないけど彩音ちゃんを一人で帰すのは不安だし、私一人で家に送るのは無理。

霜織君か梶君に協力してもらった方がいいだろうなって思った時、すぐに霜織君に頼もうって思えた。

きっと、私や梶君が送るよりも彩音ちゃんは喜ぶと思ったし、これも彩音ちゃんの言った協力になるじゃないかって思えた。

霜織君に彩音ちゃんを送る様に頼むと、梶君が私を送ってくれる事になった。

私の帰り道の事を霜織君が気にかけてくれた時、ずっと感じていたチクチクが無くなっただけじゃなくて、心が温かくなった。

お店を出て駅前まで歩いた後、霜織君と彩音ちゃんと別れた所で、今日の自分の役目は果たせたかな？って思って一安心して彩音ちゃんを見ると、霜織君に抱きかかえられながら歩いていた。

それまで霜織君と楽しそうに話している所とか、二人並んで座っている所を見ても何とも思わなかったのに抱きかかえられながら歩い

ている二人を見た時、これまで感じた事ない様な胸を掻きむしられる様な思いが体の奥から込み上げてきた。

帰りの電車の中での二人の姿が頭から離れないし、胸を掻きむしられる思いはずっと燦り続けていて、梶君話も耳を通過するだけだった。

「ショックって顔してるね」

最寄り駅から家までの道を歩いている時に、突然梶君が覗き込む様に背を少し屈めてきた。

急に話が変わった事と近くにある梶君の顔にビックリした私に構わず、もう一度梶君が話を続ける。

「颯太と彩音ちゃんが寄り添って帰るのが、そんなにショックだった？」

梶君に指摘されて、胸を掻きむしられる程自分がショックを受けている事に気付いた。

それでも、そんな事ないよ。と何でもない振りして首を横に振る。

「ふ〜ん。彩音ちゃんって颯太の事気に入っているみたいけど、陽菜ちゃんはそれでいいって事？」

私の否定は意に介さない様な返事をした梶君の言葉にズキンとした痛みと共に二人の寄り添った姿がフラッシュバックする。

心はズキンズキンと痛みながらも、夜の冷たい空気を一度吸ってから答える。

「いいも悪いも私は何も言えないし、それに彩音ちゃんと霜織君の問題だから」

「じゃー陽菜ちゃんは颯太の事どう思っているの？」

次から次へと質問してくる梶君の意図が全く分からない。

さっきからチカチカと私の前でちらつく霜織君と彩音ちゃんの姿と、梶君のせいで頭の中が上手く回転しない。

ちゃんと正常に機能しない思考回路から理性的な考えなんて出てくるわけもなく、理性が追いつく前に感情的な考えがお腹の中に渦巻いてくる。

霜織君をどう思っているかって、こっちが聞きたい位なのに、そんな事聞かれても困るだけだよ。

どうして梶君はこんなに意地悪な事ばかり言うんだろう

「いい人だなんて思います。頼りになるし・・・だけど、自分でもよく分からないから、色々聞かれても困ります」

お腹の中には自分でも理解し難い気持ちがあっただけど、それを全部梶君に言える程私たちは仲良くないから、なるべく理性的に話そう、って思いながらも最後の方は感情的になってしまった。

そんな私をクールダウンさせるためか、梶君は何も言わずに歩き出す。

しばらく無言でいると、昂っていた感情が落ち着いてくる。

「彩音ちゃんが霜織君の好きだって、近くで見ててそれがよく分かるから上手くいって欲しいって思ってる。だから、私が霜織君を恋愛対象で見てるってことはないと思う」

梶君の質問攻撃がなくなると、カラカラと空回りしていた思考回路が元通り機能し始める。

戻ってきた思考回路と理性で、さっきの感情的な言葉をフォローす

るような言い訳を梶君にしてしまった。

「それって、彩音ちゃんが颯太を好きじゃなかったら恋愛対象で颯太を見るってこと？」

「やつ、そうじゃなくて、応援するって約束したし・・・」

焦った私はさらに言い訳を続ける。

「彩音ちゃんと約束したからダメなの？」

私の言い訳を繰り返す様に質問してくる梶君に、今度こそ頭の中がフリーズしてしまった。

――逆転の発想

さっきからの言い訳の裏を返せば、彩音ちゃんの事がなかったら、私は霜織君の事を恋愛対象としてみるって事を言っている様にも聞こえる。

私は、彩音ちゃんのがなかったら霜織君を恋愛対象としてみるのかな？

「友達が先に好きになったとか、約束したからって簡単に自分の気持ちをコントロールできるもん？」

聞いてきた梶君にコクリと頷く。

実際、今までの私はそうやってきた。

少しいいかな？って思ってた男の子も、友達が好きだと言えばそれ以上特別な感情を持つ事もなかったし、むしろ協力してた。

だから、梶君の質問には自信を持って頷く事が出来たんだ。

そんな私を梶君は少し目を細めて見るだけで、それ以上何も言うてくる事はなかった。

少し居心地悪い雰囲気の中、やっと家に着いた。

梶君にお礼を言って別れ家の中に入った後、どっと疲れがでた。

今夜はもうお風呂に入る気にもなれず、ノロノロとルームウェアに着替えてメイクを落とすとベッドの中へと入る。

アルコールのおかげか、すぐに睡魔が襲ってきたけど、目を閉じると色々な事が浮かんでくる。

彩音ちゃんを抱きかかえる霜織君、彼と一緒にいて笑顔の彩音ちゃん、『特別』だと言ってくれた霜織君、そして梶君の言葉・・・眠気でクリアでない頭は、考える事を拒否して深い眠りへと誘う。自分でも何を考えたいのか分からず、眠りの沼にどっぷり浸かりながら梶君の言葉が蘇ってくる・・・

—— 『彩音ちゃんが颯太を好きじゃなかったら、恋愛対象で颯太を見るってこと？』 ——

—— 彩音ちゃんが好きじゃなかったら、私はどうしてた・・・

？ ——

第21話 揺さぶる質問 side 陽菜（後書き）

minimoneです

2/27、28、3/1、2、3に拍手&コメントを下さった方ありがとうございます。

毎日の様に皆さんから拍手を頂けて本当に嬉しいです。

しかも颯太&陽菜だけでなく、翔&結衣の話も読みたいとのコメントも頂きました。

話がなかなか進まないため、翔&結衣の話は詳しく書かなかったのですが、いつか書ければいいなと思っていました。

もし、皆さんが翔&結衣も気に入ってもらえるなら書いてみようかな？と無謀にも思っています。

第22話 引力 side 陽菜

だんだん太陽も中天に近づいてくる午前10時、マンション前で立っている私の前に一台の黒い車がハザードランプをつけて停車した。不思議に思っ て見てみると、助手席の窓が開いて聞き覚えのある声が聞こえてくる。何となく気になったけど、知らない車の中を凝視するわけにもいかず視線を遠く駅の方へと向け目的の人を待つ。

すると、目の前の車のドアが開いたのもう一度視線を車に戻すと、そこには待ち人――霜織君――が立っていた。

霜織君から『前にファミレスで約束した食事なんだけど、来週の土曜日とかどうかな?』っていうメールが来たのは、彩音ちゃんや梶君たちと一緒に食事した翌日だった。

彩音ちゃんのことや梶君から聞かれた事が頭から離れなくて、色々考えてた私は霜織君のメールにどう返信していいのか分からなかった。

彩音ちゃんの事を思えば二人で会っちゃダメだって思うのに、彼に会って話したいと思ってしまう。

友達としてなら、いいかな?

だって約束してたんだもんね?

そんな言い訳を考えながら、メールの返信をした。

月曜日にあった彩音ちゃんは、霜織君に送ってもらった事について何も言わなかったし、私も土曜日に彼に会うつていう後ろめたさから、彼の話をする事はなかった。

「おはよう、吉岡さん。待たせてごめんね」

私の側まで近づいて爽やかに挨拶する霜織君を見て、ドキンと心臓が一回不規則に跳ねたその後にチクチクと小さな棘が私を責める。

「時間通りだよ。私もたつた今外に出たばかりだから」

すまなそうにしていた彼はニコリと笑い、「良かった。じゃあ、車に乗って」と自然な動作で助手席のドアを開けてくれ、私がシートに座るとドアを閉めてくれた。

なんだかお嬢様みたいな扱いに、ほんの少しの居心地の悪さと恥ずかしさを感じながら顔が熱くなった。

なんとか赤くなっている顔を元に戻そうと深呼吸していると、運転席のドアが開いて霜織君は座るところを向く。

「吉岡さんって車酔いとか大丈夫な人？俺、今日の事勝手に決めちゃって、吉岡さんが車酔いするかとかって全然気がつかなかったから・・・」

「全然大丈夫。車酔いとかって全くないよ。むしろバスの中でも本とか読める位平気」

霜織くんは、私の答えに安心したよう「それなら大丈夫だね」と頷くと車を走らせた。

それにしても・・・まさか車酔いまで気遣ってくれるなんて思わなかった。

だって、普通そんな事気付いて聞いてくれる人っている？

これまでも何回か友達の手で出掛けた事あるけど、そんな事に気付いて聞いてくれる人いなかったし、私も気にした事なんてなかった。なのに、一度も乗り物酔いつてしたことない程頑丈な私に、気を遣って聞いてくれる霜織君にむしろ申し訳ないような気がした。車を運転する霜織君は、いつも見る彼よりも大人びて見えた。

「霜織君って、車の免許持ってたんだね」

今まで霜織君が車を運転する所を見た事なかったから、今日目の前に車で登場した彼にビックリした。

「入試終わってすぐに免許はとったんだよ。で、合格祝いとしてこの車貰った」

サラリと言う彼に何も言えなかった。

だって、霜織君が乗ってる車って外車なんだから。

普通合格祝いって言っても、免許取りたての人にVOLKSWAGENのGOLFなんて買うもの？

ひょっとして霜織君の家ってすごいのかな？それとも家族が車好きなのかな？

何ともないといった風に話す霜織君に目をやって、そんな事考えたけど、まあいいやと考えるのをやめた。

迷いなく運転する霜織君にどこに行くのか気になって聞いてみると、

「実はあんまりどこに行くとか考えてなくて、ドライブしたかったんだ。でも、せっかく天気もいいし海なんてどう？」

楽しそうに話す霜織君に同意しながら、何だか楽しくなってくる。実はドライブって大好き。特に海沿いや平原みたいな所を走ってい

るのが好きだった。だから、霜織君が同じ事が好きだと聞いて、つい笑みがこぼれてしまう。勝手なイメージだけど、霜織君って自然よりも都会的なものを好みそうだなと思っていたから、余計に嬉しかった。

「はい。飲み物と甘いもの買ってきたんだけど、吉岡さん好きなものを選んで」

家を出て初めて信号待ちしている時、霜織君が後ろのシートからコンビニの袋を取り出して私に渡した。

そこには、コーヒー、ミルクティー、ジャスミンティーにウーロン茶それにシュークリームとエクレア、レモンキャンディーとミントガムが入ってた。

「すごいね。遠足みたい。」

あまりにも大量に買われた品物をみて、袋をガサゴソしながら素直な感想をいってしまった。

「吉岡さんの好みが分からなかったから、とりあえず目につくものを買ってみた」

その言葉にまたもやビックリした。

ホント霜織君って凄い。さっきも思ったけど、まさか飲み物とかまで買ってきてくれてたなんて思わなかった。

彼が、女の子にモテる理由かが分かった気がする。

見た目が派手って言うのもあるんだろうけど、きっとこの優しさと気遣いがあるからなんだ。

こんな事されちゃったら、ときめかない人の方がいないと思う。

何だかくすぐったい様な気持ちになりながらも、あまりに霜織君が

氣遣ってくれるから、先に飲み物を選ぶ様に言う。

「俺はどれでも大丈夫だから、吉岡さんからどうぞ。デザートも冷たいうちに食べた方が美味しいから、もし食べれるなら食べて?」

いつの間に青信号になっていたのか、前を見て車を走らせる霜織君の声が少し苦笑混じりの様に聞こえた。

せっかくの好意を無にするのも悪くて袋からジャスミンティーを選んだ後、霜織君が選んだウーロン茶の蓋を開けて彼に渡した。

ジャスミンティーを一口飲んだ後、こっそり運転している霜織君を盗み見る。

太陽に照らされて霜織君を縁取る光が彼を格好良く見せて、神様って不公平だなんてボンヤリしてしまった。

「なんだか、霜織君がモテる理由が分かった気がする」

あまりにもボンヤリしすぎたのか、思っていた事をつい口に出してしまった。

「いきなり何言ってるの?」

私の突然の言葉に霜織君は不思議そうに聞き返す。

「うーん。時効って事で言ってもいいかな?・・・霜織君で、高校生の時すごく遊んでるって噂が流れてたでしょ?いつだったか、うちの高校に練習試合に来た時に私、応援に行ったことがあるの。その時に、霜織君が体育館裏で女の子と一緒にの所を目撃した事があった・・・」

偶然とはいえ覗いた事に気まずさを感じて、一旦話を切った後霜織

君の様子を窺う。

少し唇を噛み締めていた彼が「マジかよ・・・」って小さく呟く声が聞こえた。

やっぱりこの事は話すべきじゃなかった。

誰だって、そんなとこ覗かれるのは嫌だし、その事を話されるのは自分のいいものじゃないって事を今更ながら気付いて、後悔から焦りが生じてしまう。

自分の配慮のなさに情けなくなりながら謝った。

「ごつ、ごめんね。わざとじゃなかったんだよ！？それに、すぐその場から離れたから、全部見てないよ！」

自分からこの話を持ち出しておいて、何を言ってるのかさっぱり分からない今のこの状況に既視感を覚えた。

高校の時一度だけ霜織君と食事した時と同じ状況に一層焦りを覚えてしまつて、自分を落ち着かせるためにジャスミンティーをグイッと一口飲む。

霜織君の様子を見たかったけど、気分を害したんじゃないかと思うと怖くて見る事が出来ない。

「えっと私が言いたかったのはこんな事じゃなくて、高校の時は噂通りの人なのにどうしてモテるのかなって思ってたけど、大学に入つて霜織君と会つて話してみたら優しいし、今日みたいにスマートに人を気遣えるのってスゴイと思って・・・だから、霜織君が皆から好かれるのが分かったって言いたかったの・・・ごめんね、気分悪くさせて」

段々小さくなつていく声を自覚しながらも、今となつては言い訳としか聞こえない話を懸命にする。

霜織君を見るのは怖かったけど恐る恐る様子を窺うと、一度大きく

嘆息した霜織君がこつちをチラリと見た。

「まさか、吉岡さんにそんな所見られたなんて思ってたよ。あの時の俺って考えなしだったからさ、出来れば忘れて欲しいんだけど」

いつもより低く真面目な声で言う霜織君に、勢いよく手を左右に振る。

「大丈夫！私、霜織君のこと今はそんな風に思っていないよ！？真面目で信頼出来る人だなんて思ってるから！」

さつきよりも大きな声で一生懸命に話す私が面白かったのか、あはっ、って霜織君が笑いだした。

「なんか、こんな風に焦ってる吉岡さん見ると初めて翔達と食事した時の事思い出す。てゆうか、展開が全然進歩してね」

そう言って笑う霜織君に、私は恥ずかしくなって下を向いてしまった。

ひとしきり笑って気が済んだのか、笑い声が止まった。

「あのさ、」

話しかけられて顔を上げると、丁度車も赤信号で止まった所で霜織君は私をじつと見ていた。

「俺、誰にでも優しいわけじゃないから。こつこつ事するの、吉岡さんだからだよ」

その言葉に呼吸が止まるかと思った。私を見つめながらゆっくりと話す霜織君は、男の人の色気を纏っていた。

「そ、それって、どういう、意味・・・？」

霜織君の雰囲気のにまれて、上手く言葉を紡ぐ事が出来ない。

「さあ、どういう意味だと思う？」

ニコつと色気のある笑顔を見せた後、静かに車を発進させた霜織君はそれ以上何も言わなかった。

さっきの霜織君の言葉と笑顔に、ドキドキが止まらない。

いつもは、そんな私をチクリと責める棘が今は感じられない。

私の心臓は今、棘の痛みを感じる以上に強く深く私の中で鼓動を刻んでいた。

第22話 引力 side 陽菜（後書き）

minimoneです。

3 / 5 , 8 に拍手&コメントを下さった方ありがとうございます。

今回、ストックしていた分が全部消えているという考えたくない状況に陥ってしまい、書き直してました・・・
なるべく更新ペースおとしたくないのに、すみません。

今回は、颯太&陽菜の初一日デートです♪♪

颯太は陽菜から過去の行いを目撃されていたという事実を暴露されてましたけど・・・ここでは、颯太の陽菜への甘やかしぶりが伝わればと思います。

第23話 満ちる月 side 陽菜

車がゆっくりと海岸沿いを走っていて、私はそこから見える青い青い海を窓から見ている。

だけど本当は景色を見てる振りして、さっき霜織君が言った謎かけが頭のなかを

駆け巡っていた。

あれ以来、霜織君は何も言わないけど、それが余計に私を考えさせる時間を与える。

霜織君の言葉をどういう風に解釈していいのか分からないまま悶々としていると、車がお弁当屋さんの前で静かに停車した。

不思議に思っただけで霜織君を見る。

「吉岡さん、お昼ってこの弁当をおごってもらっていい？」

そのまま車を降りてお店へと歩き出した霜織君を見て、慌てて車を降りる。

どうやら、ここで昼食を調達するらしい。

お弁当を払うのは全然いい。

元々食事をご馳走するって約束だったから。

でも、お弁当だよ？こんなのでいいの？

もつとちゃんとしたお店じゃなくていいのかなあ？

霜織君は気を遣ってるのかな？

心の葛藤が分かったのか霜織君が振り返る。

「今日は天気もいいし温かいから、お弁当買って海辺で食べない？」

外で食べるのは気持ちが良さそうで、思わず霜織君の提案に笑顔に

なつて頷いた。

ちよつと申し訳ないような気がしたけど、素直に二人分のお弁当を買つてお弁当を食べる事が出来そうな場所を二人で探しながら車を走らせる。

車を停めるスペースを見つけた後、二人で海辺の堤防に座つてお昼を食べることにした。

堤防から見える水面は太陽の光が反射してキラキラと光り、海岸から吹いてくる風は磯の香りがした。

父親は仕事が忙しくて、あまり家族と遠出をした記憶がない私にとつてこの遠出はすつごく嬉しい。

今食べているお弁当も3割増で美味しく感じてしまう程。

いつもよりも食欲がでて、パクパク食べている私の隣で既に食べ終わっている霜織君は買つて来たコーヒを飲んでいる。

「吉岡さんのヒナつてどんな漢字？」

ふいに思い出したように霜織君がこつちを向いて聞いてきた。

「産まれた日がつつても暖かくて丁度満開の時期だったから、太陽の『陽』と、菜の花の『菜』で陽菜つて名付けたって言つてたよ。まあ、よくある理由かな？」

霜織君は、ふふんと返事をしたただだった。

「じゃあ、吉岡さんつて早生まれつてことだね。誕生日いつ？」

「3月28日」

「なんだ、最近誕生日迎えたばかりじゃん。俺と一年近くはなれてる」

誕生日を聞いた霜織君は、ニヤッと笑ったかと思うと「じゃ、俺って年上じゃん」ってポンポンと頭を軽く叩く。それが子供扱いされたいで、少しムツとする。

「じゃあ霜織君の誕生日はいつなの？」

「5月30日」

何でもない様に誕生日を覚えてくれた霜織君だけど・・・
えっ？それって、今日じゃない？
あまりの衝撃に霜織君を見つめる。

「それって、今日が誕生日ってこと！？」

「うん。そう」

そんなサラッとビックリさせる事言わないで欲しいよ。

当然プレゼントなんて何にも用意してないけど、誕生日って知ったからには、何かした方がいいよね？

でも、霜織君の好みとか全然分からない。

どうしよう？本人に直接聞いた方が外れないかな？

「誕生日って知らなくて、何も用意してないんだ…ごめんね」

せっかく誕生日なのに、ランチがお弁当だし。

それって侘しすぎるよ。

知らなかったとはいえ、あまりにも申し訳なくて持っていたお箸を

おいて下を向いてしまった。

「別に気にしなくていいよ。．．．だけど、そんなに気にするなら夕食も一緒にとってくれる？」

あまりにも落ち込んだ私が哀れだったのか、霜織君は優しくフオロ―してくれる。

顔を上げて霜織君を窺うと、優しく笑っている彼が目に入る。

霜織君はズルイと思う。

簡単に他人をドキドキさせる事が出来るから。

だってそんな顔で見つめられて優しい言葉をかけられたら、目を逸らす事が出来なくなってしまう。

目が合っている間、心臓が長距離走をしているみたいにずっとドキドキしている。

このままずっと霜織君を見ていたら、身体的にも精神的にも疲労が強くなりそうで、それとなく視線を下にやった。

「えっと、じゃあ、一緒に食べる」

一言返すのがやっとだった。

でも本当に食事を一緒にするのでいいのかな？

誕生日だよ？

そうは言っても、今からプレゼントを用意するのは無理だし…

本人が「いい」って言うてくれるからいいかな？．．．．．やっぱりダメかな？

一度霜織君の提案を受け入れたのに、まだ箸を置いたままグダグダ考えてたら隣から、プツと嘖き出す音が聞こえてきた。

「気にしなくてもいいのに、吉岡さんって律儀っていうか・・・ほんとカワイイよね」

笑われているんだって分かっているんだけど、『カワイイ』って言葉に敏感に反応して顔がカーって赤くなるのが分かった。

そして、落ち着きかけた心臓がもう一度ダツシュします。

本当にこれ以上何か言われたら心臓が破裂しそうだし、頭の中が茹でって思考回路がおかしくなりそうだった。

ドキドキしていることがバレない様に残りのお弁当を食べる事を再開させ、食べる事だけに集中する事にした。

食事が終わった私たちは、砂浜をプラプラと歩いていると、周りには私たちと同じ様に砂浜で過ごしている家族連れがいたし、サーフィンをしている人たちもいた。

破裂しそうだった心臓や思考回路も歩いていると徐々に落ち着いてきたけど、取留めのない話の中、時々霜織君の視線を感じた。

それを確認する勇気がなくて気付いてないふりをして、なるべく視線を合わせないようにしてた。

もし、うっかり目が合っちゃったりしたら、きっと落ち着かなくなるのが分かっていたから。

ランチをとった場所から車で数十分行った所に、一見レストランに見えない隠れ家みたいなレストランがあった。

店内も家庭的な素朴な内装で、優しそうに微笑む夫婦が経営している所だった。

お客は私たちを含めて3組しかいないけど、テーブル毎に十分なス

ペースを確保していて落ち着いて食事が出来ようになっていた。

二人で「いい所が見つかった」って笑いながらメニュー表を見て、オーダーする。

せっかくの誕生日なのに車で来ているためアルコールを飲めない霜織君には申し訳なかったけど、料理は本当に美味しかった。

「今日、吉岡さんと一緒に過ごせて良かったよ。」

デザートにケーキ（誕生日だからね）を食べている時、霜織君が満足そうに言った。

「それは良かったよ。・・・でも、私なんかで良かったの・・・？」

その言葉に、小さく息を吸って、答えた。

実は、霜織君の誕生日だって分かってからずっと心の中に燻っていた事があった。

それは、他にも霜織君とお祝いしたいって思ってた人がいたんじゃないかって事。

—— 例えば、彩音ちゃん ——

それとも、霜織君がずっと想っているっていう

—— 霜織君の『特別』な人・・・ ——

きつと霜織君は、特別な人にお祝いしてもらいたいって思ってたはずだ。

そんなことすぐに気付いてた。

だけど、霜織君との『約束』だからって自分を納得させて知らんぷりした。

本当は、心からお祝いをしたいのに、どこかスッキリしないまま一緒にいた。

なのに、満足そうな霜織君を見たら燦つてた罪悪感が一気に吹き出した。

それが彩音ちゃんや霜織君の誕生日を祝いたかった他の人に対するものなのか、霜織君に対するものなのか分からなかった。

でも、霜織君の誕生日だって知っていて今まで一緒にいたのは、『応援する』って約束した彩音ちゃんを裏切ったことになる。

それでも、卑怯な私はその事に気付きながら気付かないふりして霜織君と一緒にいた。

霜織君の隣は心地よかった。今日一日は一緒にいたいって思ってたまう程に・・・だから、気付かないふりを続けてしまった・・・

「俺の誕生日なんだから誰と一緒に過ごすかは、俺が決める。俺は、吉岡さんと居たかったんだよ。迷惑だった？」

何も言えずに、ただ首を横に振るだけだった。

霜織君のその言葉が、痛かった。

こんな卑怯な私にこんなに優しくしてくれなくていいのに。

ちよっとでも気を抜いてしまうと、泣いてしまいそうだった。

ギュツと力強く目をつぶって、残りの紅茶を涙と一緒に飲み込んだ。

レストランを出るとき、優しく微笑むお店の奥さんが「また来て下さいね」という言葉を聞くのが辛かった。

周りの人の優しさが痛かった。だって、私は卑怯な人間なんだもん。一度認めてしまった罪悪感はずっと私を責めて、ドキドキしていたものがズキズキに変わる。

レストランの隣の駐車場は、街灯だけで少し暗くなっていた。

霜織君は少し後ろを歩いているけど、特に何も話さずに車までいく。助手席のドアに手をかけた時、フワリとマリン系の爽やかな香りと温かさを感じた。

一瞬何か分からなかったけど、眼下に腕が見えたことで、霜織君の腕に閉じ込められたことが分かった。

どの位時間が経ったのか分からなかった。長いようでとても短く感じた。

そつと私の肩に額を押し当てる様にしていた霜織君が、顔を上げたのが肩に感じる重みで分かった。

そして、耳元で霜織君はそつと囁いた。

「陽菜、つて呼んでも、いい？」

ゆっくりと、しっかりと、だけど、何かを耐える様な声に胸が締め付けられた。

今まで感じた事がない様な気持ちが体中を駆け回る。

罪悪感でズキズキしたものが甘い疼きに変わる。

何も考える事が出来ず、頷いたのかどうか分からなくらい小さく、小さく頷く。

霜織君は私を振り向かせると、そつとこめかみにキスを落とし、ゆっくりと、ただどさつきより力強く抱きしめてきた。

抱きしめられて、頬に霜織君の体温を感じる。

ズキズキするのは変わらないけど、それよりも甘い疼きが強かった。こんな気持ちがあるなって知らなかった。

ボーッとしている頭の中で、ようやく分かったコトがあった。

—— 霜織君が好きだって事 ——

『興味』から『好き』になったんじゃない。
『好き』だったから『興味』があっただ。

彩音ちゃんの応援をするって約束しておいて、霜織君と連絡とったり二人で会う事を言わなかった事に、罪悪感と裏切りを感じるのは事実だけど、それ以上に彩音ちゃんの話聞いてズキズキするのは、友達と自分の好きな人の仲を応援しないといけなかったから。

何も言えず抱きしめられたまま視線を上にとげると、夜空には白く輝く満月が見えた。

いつから好きになったなんて分からない。
ただ気付いたら好きになった。

非常階段で見た三日月がいつの間に満月になっていたように、知らない間にゆっくりと霜織君への気持ちが降り積もって私を満たした。

「陽菜・・・今朝車の中で俺が言った事、覚えてる？その理由分かった？」

霜織君の声が振動を通して聞こえてくる。
だけど、それには何も答える事が出来なかった。

第23話 満ちる月 side 陽菜（後書き）

minimoneです

3 / 9 , 1 1 , 1 2 , 1 4 , 1 5 に拍手&コメントを下さった方ありがとうございます。

読んで下さった方、拍手やコメントくださった方には本当に励まされています。

最近更新ペースが遅くなっていますが頑張りますので、見捨てないでやってください。

陽菜ですが、やっとここまで来てくれた！って感じです。
今回で少しは颯太の頑張りが報われたかな？！

第24話 彼女の性格 side 颯太

デスクの前に座って立ち上げたパソコンで週明け提出のレポートを書いていると、ポケットから振動を感じ携帯を取り出す。無造作に携帯をみると翔からの着信を伝えていた。

『なあ、次の週末あいてるか？せっかくだから結衣が皆でどうか行こうって』

俺が言葉を発する前に翔が話し始める。

「せっかくなんでどういう意味で？脈絡がないんだけど」

昔はよく遊んだりしたが、お互いに彼女が出来たりして三人で出掛ける機会は少なくなっていた。

しかもわざわざ事前に連絡してくるのも翔たちにしては珍しいうえ、一体何が『せっかく』なのか分からず、聞いた俺に少し呆れた翔の声が返って来た。

『はっ？来週、お前誕生日だろ？結衣が吉岡さん誘って祝おうって言うてたから、俺が颯太の予定を確認電話してんの。で、暇？』

そっか。そーいや来週って誕生日だったっけ？

気をきかせて、吉岡さんを誘ってくれるのはいいけど皆で集まるより、過ごせるなら吉岡さんと一緒に過ごしたい。もちろん二人つきりで。

「あゝそれ、いいや」

『なんで？ お前がいいならいいけど・・・じゃ、どっか行くか？』

吉岡さんを連れてくるって誘いを断った俺が不思議だったのか、翔が気遣わしげに聞いてくる。

きつと、俺が吉岡さんに嫌われる様な事をしたとか変な誤解してそうだった。

翔は、面倒見がよく察するってことが出来る奴だが時々変な方向に察する事がある。

このままでは誤解されたままになりそうだったので、翔たちの誘いを断った理由を言う。

「いや。俺が吉岡さん誘うから」

正しく俺の意図するところが分かったのか、翔はそれ以上言わずに「じゃ、別の日に改めて飲みにも行こうぜ」と言って電話を切った。

翔との電話を終わらせると、すぐ吉岡さんに来週会えるかメールする。

さほど待つ事もなく吉岡さんから返ってきたOKのメールを見て、ついニヤついてしまった。

これで、誕生日に一緒に過ごすことができる。

意識が来週の事に向いてしまっで、仕上げるはずのレポートがなかなか捗らない。

吉岡さんには、あえて誕生日ってことは言わなかった。

もし誕生日だって知ったら気を遣うに決まってる。これは、断言できる。

自分にとって、今まで誕生日なんてそれほど重要視しているわけではなかったし、その日を誰かと一緒に過ごしたいと思ったこともな

かった。

だけど、今は自分が生まれた日を吉岡さんと一緒に過ごしたいと思った。

吉岡さんに何か特別にして欲しい訳でもない。

ただ横にいて幸せそうにしてくれるだけでいい。

ホント数年前の俺に見せてやりたいくらいだ。

彼女でもなければ、キスさえもしたことない、ただのお友達という俺と吉岡さんの関係。

女とは、すぐにエッチだった俺にとって、側に居て笑って欲しいと思っていること自体不思議に思う時がある。

女に自分から何かをしたいなんて思ったことはなかった。

なのに、吉岡さんが喜ぶなら、俺ができる事は何でもしたいと思う。

吉岡さんが幸せそうに笑ってくれる事は、俺の幸せに繋がってる。

歌なんかで、『君の幸せが僕の幸せ』なんてよく聞くフレーズを今まで「んなことあるわけねえじゃん」ってバカにしてたけど、今ならその気持ちよく分かる。

彼女が幸せそうに笑ってくれるなら、それだけで嬉しい。

その側で一緒に笑って、彼女を笑わせるのが自分なら、もっと幸せだと思う。

「彩音ちゃんの事は解決できたん？」

講義が終わって、梶と二人夕食がてら居酒屋でビールを飲みながら、食べ物をつまんでいると梶が彩音の事を聞いてきた。

「んあ？大丈夫。ちゃんと断ったよ。」

とつくに記憶の彼方になって彩音の事だったため、軽くなす。

「それより、吉岡さんの方は？何もしてないだろうな？」

彩音の事よりも、吉岡さんの事を聞きたい。

「もちろん、ちゃんと家まで無事におくりましたよ。それより吉岡さんの事がバレた途端、お前あからさまに俺に隠さなくなっただな」

呆れた様に苦笑しながら梶は、ビールを飲む。

「別に吉岡さんのこと隠したいと思ってない。けどな。まだ態度にはつきり出す時期じゃないんだよ。」

初めの頃に比べたら、だいぶ近づいたと思う。

徐々にメールの回数も増えてきているし、少しずつ好意を持ってもらっていると思う。

だけど、吉岡さんがもう少し意識してくれていると確信をしてから行動を起こしたい。

それまでは正直、友達として付き合いながら様子を見ているつもりだ。

「なあ、吉岡さんとは実際どうなん？」

「どうって、どうもなってるないよ。彼女は、俺のことただの友達としか思ってるないよ」

実際友達なのだから仕方がないが、ただの「友達」と言葉にすると軽く凹んだ。

「そう」

自分から俺と吉岡さんの事聞いてきたのに、梶は少しニヤついてこっちを見ながら御座なりに答える。

「なんだよ。何か言いたそうな顔してっけど？」

凹んでいる俺をニヤついてみる梶が恨めしく思っで、ムツとした声になる。

「別に。なんていうか、吉岡さんって自覚なしだよな。」

梶は全く異に介さず、そんな俺を無視して話を続ける。

「それっていい意味で？」

「うーん。両方かな？吉岡さんって、可愛いじゃん？」

無言で頷いて、梶の意見に同意する。

まじで彼女を可愛くないって言う奴がいたらお目にかかりたい。

「なのに、恋愛慣れしてないっていうか、駆け引きっていうのができないよね。このあいだの彩音ちゃんの事も全く気付いてないし、警戒心もない」

梶は吉岡さんと数回しか会ってないが、しっかりと彼女の事を見ていることに、感心しながら頷く。

「確かに。そうかもね。吉岡さんは、何にでも真面目なんだよ。駆け引きできないのっていいじゃん。素直で可愛い」

「そりゃ、そうだけど。もし彩音ちゃんが颯太の事諦めてなかったら、お前にとってややこしくなるんじゃないかねえのって事」

彩音に関しては、ややこしくなる事は明らかに予想がついた。だから先手を打った。

彩音の事は終わったことだと思っていたため梶の言う事に、いまいち納得出来なかった。

「第三者から見た方が分かる事もあるってことだよ。でも颯太は諦める気はないんだろ？」

クイツと梶の口元が片方あがる。

「当たり前だろ？俺、これでも片思い歴長いけど？」

「颯太は、陽菜ちゃんにマジ恋だもんな」

少しおどけて答える俺に、梶もそれに呼応するようにおどける。これを合図に俺たちは話を他の話題に変え、遅くまで飲んだ。

第24話 彼女の性格 side 颯太（後書き）

minimoneです

3 / 1 6 , 1 1 7 , 1 1 8 , 1 1 9 , 2 1 , 2 2 , 2 3 , 2 4 に拍手&コメントを下さった方ありがとうございます。

本当にお待たせしました。もう何も言う事ができません。

こんなに遅れているのに見放さず拍手と温かいコメントをいただけて嬉しさと申し訳なさで一杯です。

ちゃんと続けていくので、これからも宜しくお願いします。

第25話 混迷1 side 颯太

俺は何か間違った？

焦りすぎた？

彼女は、もう俺とは会いたくないのかもしれない。

俺の事を嫌いになってしまったのだろうか。

彼女は・・・陽菜は俺の事をどう思っ、何を考えてる？

俺たちの間が近づいたと、陽菜に好かれてるって思ったのは勘違いだったのか？

陽菜に会いたい、声が聞きたい、それがダメならせめて連絡だけでもとりたいたい。

陽菜と連絡が取れなくなったのは、二人で出掛けて少し経ってからだった。

気がつけばリプレイ機能をつけたように、いつも同じ事を考えている。

二人で出掛けて、初めて陽菜を抱きしめた日の事を――

何がいけなかったんだろう。

どこで間違っただろう。

俺の誕生日。初めて二人だけで出掛ける日、その日の俺は少し緊張していた。

寝坊しない様にアラーム機能を駆使して起き、逸る気持ちを抑えつつ準備をした。

ヘビースモーカーではないが、どことなく落ち着かない気持ちを抑えるためにタバコを探すか切れている事に気付き、迎えにいく途中コンビニで買うため少し家を早く出る。

停車しやすいコンビニに入り、タバコと飲み物を買うことにする。今日は海へドライブにするつもりでいた。

それほど遠くまで行くつもりはないが、それでも1時間以上は車に乗る事になるだろうから、途中飲み物が必要になることに思い至り、陽菜の分も買うことにする。

ペットボトルの所にいったが、陽菜が何を好むのか分からず束の間迷った。

約束の時間も気になり、めばしい物をいくつか棚から選ぶと次は何か食べる物も用意しておいた方がいいような気がした。

陽菜はよく結衣と甘い物を食べに行っていると翔から聞いた事があるし、一緒に食事に行った時もデザートを嬉しそうに食べていた事を思い出し、甘い物も買う事にする。

会計を済ませ陽菜の家へと向かうと、すでに待ち合わせの場所に陽菜が待っていた。

車を目の前に横付けしたが、陽菜は全く気付かない。

声を掛け車に乗る様に促した陽菜は、うつすらと顔が赤くなっていた。

朝から二人きりで出掛けるということが嬉しくて、運転席の隣に座っている陽菜を時々見る。

気付かないふりをしていたが、少しタレ気味のクリっとした目がチラリとこつちを窺う様に見る様子や、ペットボトルを両手で持って飲む動作を可愛らしいと思ってしまう。

ほんと、どうしてこんなに俺のツボなんだろう。

焦ってはダメだと思っただけ、早く俺だけの陽菜にしたいと思う。一緒にいる事に、理由のいらぬ関係になりたい。

週末陽菜と出掛ける事が決まって、どうしたら今日陽菜が楽しんでくれるだろうと思って考えたら、俺ってちゃんとしたデートしてたことがなかった事に初めて気付いた。

これまでの女達とは何やってたか思い出せなかった。

というより、デートっていったらホテル行く前食事するとか位だけ？って感じだったし。

実際俺の欲求が満たされればそれで良かったし、相手の事を思いやるってことの必要性も感じた事がなかった。

過去の自分を振り返る度に、ホントどうしようもないな、と思う。

無駄に経験があるだけで、ちっとも役に立たない。

マジ恋愛初心者。

ぶっちゃけ、「海に行こう」って提案した時も、喜んでくれるか不安だったが、陽菜の嬉しそうな顔を見れて安心すると同時に充足感が込み上げてくる。

二人だけの初デートに陽菜の嬉しそうな顔を見たことで、自然とテンションも上がっていた俺に陽菜は突然爆弾を落とす。

『霜織君が体育館裏で女の子と一緒にの所を目撃した事があって・・
』

頭の中が真っ白になった。

（は？今、何て言った？）

その一言は調子にのっていた俺をあっさりと地獄にたたき落とす。陽菜が話している体育館裏のことが何時のことなのか理解出来た。

（あの時鞠とやってた事を見られてたって事だろ？）

遊んでいた時の噂はどうしようもないと思っていた。
でもそれは、あくまで噂でしか陽菜は知らないと思っていたのに、まさか目撃されていたなんて思いもしなかった。

しかも、外なんかでやっていたわけだし・・・陽菜には、どんだけ節操なしって思われてたのかなんて考えもしなかった。

俺が陽菜に一目惚れした日に、自らの首を絞めていたなんて。

目の前が真っ暗になった。

陽菜にあの時の事を見られていた事、それまで平気でどこでもヤツていた自分に腹立ち、しらずに唇を強く噛んでいた。

『マジかよ・・・』思わず失意の言葉がこぼれる。

ただ噂だけを知っているのと、実際に見ているのでは相手に与える印象が違う。

百聞は一見にしかずって言うが、きっと彼女の第一印象は最悪だったんだろうなということを再認識すると、まだまだ俺が望む関係になるには時間がかかるような気がした。

自分が蒔いた種だ。昔の事を今更嘆いても仕方がない。

ここは気持ちを入れ替えるしかないと思い直し、一度息を吐いて自分を立て直す。

昔の事を忘れて欲しいという俺の頼みに、慌てる陽菜を見て笑いが込み上げてくる。

笑っている俺に対し下を向く彼女をみながら、やっぱり陽菜を好きになったことは間違いじゃないと思った。

昔のどうしようもない俺を実際に知っている陽菜が、それでも今、俺と一緒にいて一生懸命フォローをしてくれている。

最低だった俺のことも含めて、今の俺をちゃんと見てくれている。そして、自分で判断して今側に居て笑ってくれる。

それは、陽菜に出会ってから変わった俺を、この１年半を陽菜に認

めてもらえている気がした。

彼女が少しは好意を持ってくれていると自惚れていいんだろうか。

懸命にフォローする陽菜は、高校の時と変わらない。

一見何も進んでいない様に見えるこの状況だけど、あの頃よりも陽菜は俺の近くにしていると感じる事が出来る。

それが嬉しい。可愛い。愛しい。抱きしめたい。もっと陽菜を感じたい。

俺の中で、何か吹っ切れた。

もっと陽菜に意識してもらえる様に、少しでも陽菜に対して積極的になろうと思った。

だからもっと態度に出そう。言葉で伝えよう。俺の想いを。

「俺、誰にでも優しいわけじゃないから。こういう事するの、吉岡さんだからだよ」

簡単な謎掛けをする。

陽菜、この意味ちゃんと理解してくれる？

俺は、自己中で優しくない。

誰にでも優しくなんて出来ない。

陽菜だから。

陽菜だけだから。

第25話 混迷1 side 颯太（後書き）

minimoneです。

3/26、27、28、29に拍手&コメントを下さった方ありがとうございます。
とございます。

コメントを下さった方の中で、「梶さん大好き」と言って下さった方がいて、実はかなりビックリしました。

当初の予定では登場予定ではなかった彼なのですが、気に入ってもらえてすごく嬉しいです♪

確かにいい所もあっていつてる梶に対して、同じサポート役の翔はいい所なしな気がする・・・いやいや。翔もいい奴なんですよ!?

ということで、翔の名誉挽回として翔&結衣のスピノフ書いてます。ただ、こちらの方の更新も遅くなっている状況なので、もう少し書いてから定期的に更新するか、不定期更新にするか検討中。

ちゃんと決めたら、改めてお知らせします。

第26話 混迷2 side 颯太

堤防に座って一緒に食べる弁当に幸せを噛み締めながら、これからどうやって陽菜との距離を縮めていくか考える。

さっきの謎掛けに、少しだけ反応があったがその後何も言わずスルーしている陽菜。

今ここで、強気でいくよりももっと効果的な場面がきつとあるはず。その時に、もう一度陽菜に聞こう。

パクパクと擬音語がつきそうな位美味しそうに食べたり、子供扱いされて拗ねたりと感情豊かな所や、今日が俺の誕生日だと知って慌てたり悩んだりしている姿が、予想通りで笑いと愛しさが込み上げてきて自然と出てくる「ほんとカワイイよね」という言葉。

さっきの謎掛けが効いているのか、『カワイイ』の言葉に顔が真っ赤になっている陽菜を見て、恋愛感情かはイマイチはつきりしないが好意を向けられている事を確信する。

二人で話しながら歩く海辺。

陽菜は楽しそうに周りを見ているけど、彼女と手を繋いで歩きたいと思いつながら陽菜を見ていた。

昼間楽しそうにしていた陽菜が、レストランでは途中から表情が暗くなった。

きっかけは分からないが、あんなに可愛かった笑顔が消えた。

陽菜が、何について悲しく思っているのか分からない。

ただ、彼女は誕生日に俺が自分と一緒にいることを気にしているみたいだった。

俺にとっては、誕生日だからこそ一緒に居たかった。

自分の気持ちを隠さないと決めたからには、彼女に『今日、一緒に居たかった』という気持ちを知ってもらいたかった。

もつと俺に気持ちに気付いてもらいたかった。そんな俺の言葉に彼女は泣きそうな目をしながら、ただ首を振るだけだった。

少しでも彼女に笑ってもらいたかったのに、消えてしまった笑顔を取り戻すことが出来ない自分がかくして堪らなかった。

どうしたら良かったんだろう？

レストランを出て、車に向かう陽菜の後ろ姿がひどく頼りなく、泣いている様に見えた。

風が吹き、彼女の細く厚みのない華奢な肩から髪の毛が泳ぐ様になびく。

髪の毛が靡く事で見え隠れする細い首。

それら全てが彼女を儚くみせ、そのまま消えてしまふんじゃないかと感じてしまう。

焦燥感に駆られながらも彼女が消えてしまわない様に、そつと後ろから抱きしめる。

飛び立たないよう、蝶をそつと捕まえる様に――

抱きしめた陽菜は本当に華奢で俺の体にスッポリ収まる。

抱きしめて初めて分かる彼女から香る甘い香り。

甘い香りに誘われる様に、肩に顔を埋める。

その香りが呼び起こすものは、どうしようもない程の切なさ、愛しさと、もどかしさ。

『陽菜って呼んでもいい？』

その言葉に小さく頷いてくれた彼女に、込み上げてくる感情。

堪らなくなつて陽菜を振り向かせる。

少しタレ気味のクリつとした目。厚くも薄くもない唇は、そのままでも赤味を帯びていて白い肌が一層彼女の唇の色を際立たせていた。肉欲的なタイプではなく、まだ少女らしさが抜けきらない――

まだダメだ。焦るな。

理性はそう言つて俺を押しとどめようとする。

だけど、ここで何もしない程聖人君子でもない。

理性と欲望の妥協点のこめかみへのキス。

唇から甘い痺れが体中に広がる。

その心地いい痺れとキスを受け入れてくれた彼女をもつと感じたくて、抱きしめる腕に力が入る。

きつと彼女に俺の気持ちは届いたと思った。

これまでに不確かだった彼女の気持ち。

だけど、受け入れてもらえるんじゃないかという期待を抱いて、陽菜にした謎掛けをもう一度する。

それに対して何も言わない陽菜。

それでも良かった。彼女が俺の腕の中にずっといてくれたから。それが陽菜の答えだと思った。

どの位抱き合つていたか分からないが、どちらともなく離れた。

陽菜をみると、その頬には涙の後が一筋あった。

帰りの車の中では、お互い何も話さないままだった。

俺は、陽菜の涙のわけが分からず、その理由を聞く事も出来なかった。

陽菜の家の前に車を止め、彼女がドアを開いた途端に不安が襲ってきた。

駐車場で抱きしめた陽菜が、消えて俺から逃げていきそうだと思う

引き止める。

「また、メールするから」

小さく微笑で頷いた陽菜を見て安心する。

受け入れたられたはずなのに、嬉しさよりも不安が凌駕する。

陽菜の一挙一動に気持ちいがふらつく。

何でだろう。

捕まえた思った陽菜の涙の理由も分からず、今の関係がひどく不安定な元に築かれた気がして足下のフラつき、不安を拭いきれない。

そんな漠然とした不安を抱えながらも、嬉しさも確かにあって俺は家へと戻った。

「どうも」。残念会にご招待頂き有り難うございます」

明るく大きな声で俺たちのもとやってきた梶に頬が引きつる。

「颯太。陽菜ちゃんに振られたんだって？」

賑やかな店内と同様の梶が笑いながら軽く俺の地雷を踏んだ。

「お前、不吉なこと言っくんじゃねーよ。まだ振られてねえーから！」

音をたてて手に持っていたジョッキを置き、梶を睨む。

「まだって振られるつもりなんだ。弱気だね」

睨む俺を軽くないしながら、梶はまた笑ってオーダーを取りに来た店員に生ビールを注文する。

今こいつにそこはかとなく殺意を覚える。

苛つきと殺気を纏ってビールをガツと飲み下す。

「まあまあ、梶もそう颯太を虐めるなって。実際、かなり凹んでるんだよ。颯太」

今まで俺たちのやり取りを見ていた翔が苦笑しながら梶に言う。
梶は肩をすくめてみせた。

「でもさ、避けられてるんだろ？陽菜ちゃんに」

俺が凹んでいるのを知っているくせに、わざと傷に塩を塗る様なことを梶は言う。

「いや、はつきり言えばそうなんだけど」

そんな齒に衣着せぬ梶に、フォローしているはずの翔まで俺をどん底に突き落とす。

「颯太はこれまで、そういう経験ないんだって」

翔の言葉に梶が「これだからモテる奴は」と言って運ばれてきたビールを飲み、つまみの唐揚げを食べる。

最近大学近くの居酒屋で翔と梶の三人で飲む事が多い。

今日も、翔から誘われていつもの居酒屋に行くと遅れて梶が来た。そしてその第一声が、さっきの「残念会へのご招待」なんて笑えな

い冗談だ。

そんな梶の縁起でもない発言が実際ピッタリな今の状況を考えてみると、陽菜と一緒に過ごした誕生日が嘘の様に思えてくる。

てか、俺の妄想？とか真剣に思ってもおかしくないくらい今、陽菜に避けられている。

初めは何とも思ってたんだけどね。

あの日の翌日もメールした俺に、陽菜からちゃんと返信がきたし変わった所は何もなかった。

それが、いつの間にかメールを送っても返信がないし電話をかけても繋がらない。

忙しいのか。としか思っていなかった俺は暢気に構えていた。

避けられていると気付いたのは、構内で陽菜に出会った時だった。

構内を歩いている俺の反対側から陽菜が歩いてきた。

久しぶりに見る陽菜におもわず笑顔になり声を掛けようとした時、俺に気付いた彼女はあからさまにクルッと向きを変えたかと思うと走り去って行った。

あまりの出来事に、驚いた俺はしばし動く事が出来なかった。

陽菜の行動が分からずメールを試みるが、俺の携帯が鳴る事はなかった。

そこにきて初めて陽菜に避けられている事に気付いた俺は、見事に落ち込んだ。

さっきの翔じゃないけど、これまで追っかける恋愛なんてした事なかったから避けられるなんて経験した事なかった。

むしろ簡単に女をきってた俺は、分けもなく切られる事の辛さを知った。

いくら遊びだったとはいえ、面倒臭くなったら切り捨てていたこれまでの女達に懺悔の気持ちだった。

やっぱりキスは早すぎたのか、とか、受け入れられたと思ったのはただの勘違いだったのか、とか、陽菜にとっては強引だったのか、とか色々ネガティブな思考に陥ってしまう。

こんなんじゃないダメだと陽菜に直接気持ちを聞こうと思ってみても、連絡つかないし、ついたとしても拒否られるんなら、このまま何事もなかったかの様に友達に戻ったほうがいいんじゃないかとさえ思ってしまう。

マイナスな考えが頭から離れず、翔と梶が何やら二人で話しているのを尻目に、グイグイとオーダーしたビールを飲む。

（あーここ最近の俺って情けない）

「では、ここで陽菜ちゃんに振られるカウントダウンが始まった颯太にお伝えしたい事があります」

今日は終止このチャラけたテンションで通すと決めたのか、翔と話していた梶が話しかけてきた。

『振られるカウントダウン』とか、マジで笑えないとイラつく。

「今学内に広がっている噂があるって知ってるか？」

梶の話を引き継ぐ様に翔が聞く。

もともと噂なんて興味なかったし、最近はそれどころじゃなかったから噂なんて知らない、黙って首を振る。

「颯太は知らないかもな。最近の颯太は、イライラしているって雰囲気醸し出して皆が近づけなかったし」

「俺イラついてたっけ？」

梶の言葉に、自分がこれまでどんな雰囲気だったのか分からなかった。

「おう。俺それどころじゃねえから話しかけんなってオーラが語ってた」

翔も頷く。

「結衣も言ってたぞ。颯太の機嫌が悪いつて女の子が近づけないって騒いでるって」

翔の言葉で、そういえば、ここ最近纏わりつく女とかいなかったと思ひ当たる。

噂ってそれ？

べつにそんな噂俺関係ない。

構内で広がっている噂に興味をなくした俺に気付いたのか、「俺たちが話そうとしている噂それじゃないから」と、梶は手を軽く振る。

「霜織颯太と吉岡陽菜が海辺デートしてたって噂知ってる？」

その言葉に驚いて翔を見ると、翔も俺を見て頷く。

「そこで問題です。二人がこれまで親密だったなんて話を聞いた事がなかった周囲は、この噂を聞いてその是非を知りたい。事の真相を知るには、本人に聞くのが一番手っ取り早い。そして、女の習性として責めるとしたら男と女、どっちに矛先が向くでしょう？」

梶は軽い口調で話しているが、その内容は全く軽いものじゃなかった。

俺の周りに女達が居なかったのは、俺の機嫌が悪かったただけじゃなくて、その噂のせいもある事に気付き、すぐに立ち上がるうとした俺を翔が制止する。

「待てよ、颯太。それだけじゃない。むしろ、こっちの方が重要」

そういつて翔が話した内容は、俺を本当にムカつかせた。どうして女って、そう（・・・）何だろう。

中高生みたいな幼稚な事すんなよな。

言いようのないイラつきに、頭をガシガシと搔く。

「落ち着けよ颯太。こればかりは陽菜ちゃん自身が解決しなきゃどうしようもない事だろ？」

分かってる。

頭では分かってるけど、今は感情を抑える事が出来ない。

昂った気持ちを抑えようと、最近吸う回数が増えているタバコに火をつける。

一本吸い終わって、多少落ち着いた俺を見た二人は小さく嘆息する。

「颯太がする事は、一人凹んだりイラついているんじゃないって、やる事やれって事だろ」

今まで軽かった梶の口調が、一変真面目なものにかわる。

俺の向かいに座っていた翔があるもの（・・・）を目の前に出した。

「ということで、俺と結衣からこの前のお礼と誕生日プレゼント」

差し出されたものを見つめ、フツと笑ってしまった。

一人弱気になって凹^へんである場合じゃない。

こうしている間にも、陽菜が逃げて行ってしまう。

必ず捕まえてみせる

だから陽菜、俺から逃げないで。

そして受け入れて欲しい。

そのためだったら俺何でもする。

第26話 混迷2 side 颯太（後書き）

minimoneです。

約2週間ぶりの更新です。

遅くなってすみません。皆さんに見捨てられてないか不安ですが・

そして拍手&コメントくださった方有り難うございます。
皆さんに頂いた拍手とコメントは私の元気の素です！

第27話 何かが違う side 陽菜

はあゝ

思わずため息をついてしまう。

最近では、癖のようにでてくるため息。

つく度に逃げる幸せって何だろう？

彩音ちゃんの事？それとも霜織君の事？

霜織君への気持ちに気付いた日から、彩音ちゃんに対する罪悪感が日をおうごとに膨らんでくる。

彩音ちゃんに早く言わなきゃ、って思いながらもそれが出来なくて、時間だけが過ぎていく。

心の中では焦りながら、何も言うことのできない自分に呆れてしまい意気地のない自分に自己嫌悪のため息の数がでる。

何だろう？教室の中が変な雰囲気になのは気のせいかな？

講義が終わって、一人トイレから戻ってきた私は、彩音ちゃんか他の子達と話してるのを見かけた。

私に気付いた彩音ちゃんは、一旦話を止めたがすぐに話始めた。彩音ちゃんと一緒に話している子たちは、うちの学科でも可愛いくてお洒落な子たちが集まっているグループで、彼女たちの華やかさと高いテンションに付いていけない私は、少し苦手なグループでも

あつたせいで彩音ちゃんの所へはいかず自分の席にもどつた。

教授が講義室に入ってくるのと同時に彩音ちゃんは戻ってきた。講義中あまり話したりしないけど、さっきまでの彩音ちゃんとか何か違う気がする。

いつも通り座って講義を受けてるだけなのに彩音ちゃんから感じる雰囲気がいつもと違ってる。

話しかけちゃいけないような雰囲気。

何か怒ってるのかな？

講義が終わってザワザワと皆が帰っていく中、話しかけていいのかわからなくて、こっそり彩音ちゃんの様子を窺ってみる。

帰る準備が出来た彩音ちゃんは明るく話しかけてくるから、講義中に感じた違和感は私の思い違いだったと、いつも通りの彩音ちゃんにホッとした。

彩音ちゃんが違うと感じたのは、私自身にやましい気持ちがあったからなのかもしれない。

週末、霜織君と二人で過ごして初めて霜織君の事を好きだと気付いたことや、キスされたこと。

そんな後ろめたい気持ちがあったから、いつもの彩音ちゃんなのに怒ってると感じたんだ。

そうなんだ。

私はまだ、あの日のことや自分の気持ちをずっと彩音ちゃんに隠したままにいる。

こんなの卑怯だって分かっているのに、ダメだって思っても霜織君からくる何気ないメールを待っている。

あの時言われた謎かけも、自分のいいように解釈しちゃって、私のことを少しでも好きでいてくれるのかな？とか思っている。

霜織君には、ずっと想っている人がいるっていうのに・・・

（私、何時からこんなに卑怯になったんだろう？）

知らずに、またため息をついてしまう。

今、私がやっていることって自分のポリシーに反している。

彩音ちゃんの応援するって約束しておいて、自分も好きになってしまった事を隠しているなんて。

しかも、二人で会ったりして全然フェアじゃない。

「彩音、昨日は楽しかったね。今度あのショップに行ってみない？」

楽しそうに私達が座る席に近づいてきたのは、お洒落な集団の一人・麻奈美ちゃんだった。

二人で雑誌を広げて見ていた彩音ちゃんが顔をあげ楽しそうに話した。

麻奈美ちゃんは、手入れがしっかり行き届いた自慢の髪の毛を綺麗に巻いていて、クリクリの目にバサバサと音がしそうな長いまつげで瞬きしながら話している。

何となく二人の会話に入りづらい雰囲気があって、話に参加せず一人下を向いて雑誌を見続けた。

こんな状況が最近よくある。

最初の頃は、一緒に話そうとしていたけど、どうしても居心地が悪

くて、だんだんと彩音ちゃんが麻奈美ちゃんたちと話す時は、違う子たちと話すようになった。

二人でいる彩音ちゃんは、いつもと変わらず笑って色々とお喋りをするけど、それは二人でいる時だけ。

麻奈美ちゃんとか他の子が一緒にいると私のことなんていない存在のようになる。

だから最近の悩みの大半が彩音ちゃんとの友達関係にシフトしてきている。

ひょっとして彩音ちゃんに嫌われているのかな？なんて、被害妄想まで出てくる始末だし……

今日もまた同じ様なのかな？って思うと憂鬱な気分になってしまう。

講義室に入ると彩音ちゃんはすでに来ていて、麻奈美ちゃんたちの席で話している。麻奈美ちゃんたちの席は教室の後ろだから、後ろのドアから入って真ん中のあたりの席に座ってる私は必然的に麻奈美ちゃんたちの席を通らないといけない。

「おはよう」と挨拶すると、彩音ちゃんや麻奈美ちゃんたちは笑顔で挨拶を返してくれたけど、すぐにおしゃべりを再開した。

席に着くとまた小さく嘆息する。

こんな事今まで経験した事ないから、どう対処していいのか分からない。

最近物事をネガティブに考えすぎてしまう。

そんな私を明るくするのは、霜織君からのメールだ。

霜織君かのメールを読むときだけ、沈んだ心が浮上する。

だけど彩音ちゃんへの罪悪感や、何となくおかしい彩音ちゃんとの関係があって霜織君への返信をなかなかする事が出来なかった。

少しでも自分の気分を上げるため霜織君からのメールを見ようと携帯を開いた時、「陽菜ちゃん」と呼ぶ声が聞こえた。

声を掛けられた方へ振り向くと、さーちゃんが手招きをしていた。

さーちゃんは、彩音ちゃんが麻奈美ちゃんたちと話している時に私が話す様になった子で、霜織君の学部と一緒にやった合同クラコンの時に、私たちと一緒に地元の話をしていた子の一人。

隣のあいている席をポンポンと叩いているさーちゃんの所に近づいていき、言われた通りに隣に座る。

「おはよう」と言う私に挨拶を返してくれるさーちゃんは、深刻そうな顔をして見つめてきた。

どうしたのかと首を傾げる私に、あのね。と小声で話し出した。

「霜織君と陽菜ちゃんが、この前の週末に二人で海辺デートしてたって噂が流れてるよ」

サーッと冷たいものが背中を流れたような気がした。

一気に頭の中が真っ白になる。

「それでね、言いにくいんだけど・・・麻奈美ちゃんたち、霜織君のこと気に入ってたって知ってる？」

さーちゃんが確認する様に聞いてくるのを、首だけ振って否定する。そっか。って頷いた後、さーちゃんが話してくれた事で最近の違和感の理由が分かった。

その噂が流れ出したのは、週が明けてホントにすぐだったらしく、この噂をいち早く知った麻奈美ちゃんたちのグループは、その真相を確かめるために、私がない時を見計らって彩音ちゃんに尋ねたらしい。

そして、それをきっかけに彩音ちゃんは麻奈美ちゃん達と仲良くなったということが分かった。

そしてショックだったのが、楽しそうに話している彩音ちゃん達が私の事を話していたという事。

どんな事を話していたのか具体的な事をさーちゃんは教えてくれなかったけど、私を感じていた違和感は決して勘違いでも被害妄想でもなく、悪意のあるものだったらしい。

「最初は黙っていようと思ったんだけど、陽菜ちゃん見てるとだんだん元気なくなってるし・・・もし辛いんなら、こっちにおいでよ」

あまりにショックで何も言えない私に、さーちゃんが優しく声を掛けてくれる。

「ありがとう」と小さく言って、足下が覚束ない感覚で席へと戻る。講義が始まるまで、グルグルとさっき聞いた事が頭を廻る。

何か考えようとするけど、何も考える事が出来ない。

下を向いている私に、隣の席へと戻ってきた彩音ちゃんが「どうでしたの？具合が悪い？顔色悪いけど？」と気遣う様に覗き込んでくる。

「平気。少し寝不足なだけ」と作り笑いをして取り繕う。

「気分悪くなったり、何かあったら言ってね」と優しく言う彩音ちゃんに泣きそうになった。

どうして？

こんなに優しく気に掛けてくれるのに、陰では私の事を悪く言ってる麻奈美ちゃん達と笑ってた事が信じられなかった。

どっちが本当の彩音ちゃんなんだろう。

こんなに優しくしてくるのは、演技なのかな？って思うと体の奥底から大きな塊が込み上げてきそうになって、思わず手で口元を押さえる。

目もギュッと閉じて、大きな感情の奔流をやり過ぎそうとする。

（ダメ。こんな所で泣いちゃダメだ）

勝手に被害者ぶって泣いちゃダメ。

傷ついちゃダメ。

こんな風になった原因は、私にあるんだから。

私が、彩音ちゃんを裏切ったのがいけないんだから。

彩音ちゃんも傷ついてるはずだもん。

自分がやった事を棚に上げて、傷ついて泣くのはズルイ。

ただ卑怯な自分にしっぺ返しがきただけ。

自分に一生懸命言い聞かせ、なんとか涙を飲み込む。

それでも、知ってしまった事実が残す爪痕からは、次々と痛みが生まれてくる。

講義の間中、泣かない様にずっと耐えながら、90分という時間がいつもの倍以上に長く感じた。

「ちょっと麻奈美ちゃんのところに行ってくるね。体調悪そうだったら帰った方がいいよ。ノートはちゃんととっておくから」

笑顔で言う彩音ちゃんに無言で頷いて、その後ろ姿を追う。

陰口を言われることもショックだけどそれ以上に、たった今気に掛けていた私の事を麻奈美ちゃんたちと話していると思うと彩音ちゃんがすごく怖かったし、聞こえないと分かっている、聞こえない様に耳を塞いで机の上に顔を伏せた。

「陽菜ちゃん、体調大丈夫？もし、平気なら一緒にお茶しよう？」

私の体調を気遣いながら、彩音ちゃんが誘う。

なんとか1日を乗り切った私は、正直気力体力ともにすり切れそうだったけど、彩音ちゃんと一緒にお茶する事にした。

彩音ちゃんは噂を知っているんだから、これ以上隠すことは出来ない。

今まで逃げたおいて今更だけど、正直に言おうと決心した。

第27話 何かが違う side 陽菜（後書き）

minimoneです。

4 / 14 , 15 , 19 , 20日に拍手&コメントくださった方有り
難うございます。

皆さんから応援して頂いたおかげで、前回よりも早く更新する事が
出来ました！

颯太が本格的に動き出した一方、陽菜の周りも動き始めました。
ただいい方向とは言えませんが・・・

なるべく早く更新出来る様に頑張ります。

第28話 アンフェア or フェア side 陽菜

彩音ちゃんに付いていったカフェは、穴場なのかお客さんがパラパラという位で落ち着いた感じの所だった。

いつもなら楽しいはずの時間が、今日は辛い。

お互いオーダーしたものを待つ間沈黙が流れる。

どうやって切り出したらいいのか分からず、目の前に置かれた氷の入ったコップに目をやる。

だけど、時間が経つにつれて二人に流れる沈黙に苦しくなってくる。

「急に誘ってごめんね？陽菜ちゃん、予定とかなかった？」

重苦しい沈黙を破ったのは、首を傾げて聞いてくる彩音ちゃんだっ
た。

「大丈夫だよ。特に何もなかったから」

笑顔で答えようするけど、頬に変な力が入る。

私のぎこちない笑顔をジッと彩音ちゃんが見る。

「そっか。デートでもあるのかと思った」

ポソつと言われた一言に全身が金縛りにあつたようになった。

今日彩音ちゃんに誘われた時から、ちゃんと自分の気持ちを言おうと決心していたのに、私の勇気は一向に膨らむことがない。

もともと穴の空いた風船は、その穴が一層大きくなった様な錯覚を覚えたと同時に、彩音ちゃんの一言は胸を突いた。

金縛りはなかなか解けてくれなくて、再び沈黙が重く漂っている。

「あつ、あのっ」

「ねえ、陽菜ちゃん」

二人とも同じタイミングで話を切り出したのは、目の前にオーダーしたコーヒーと紅茶が置かれて間もなくだった。

勇気を出して話そうとして、言葉が被ったことで一度膨らんだ勇気が一気に萎む。

そんな私に気付いたのか、彩音ちゃんが言葉を続ける。

「陽菜ちゃんって、颯太くんと付き合ってるの？」

その質問に首を振って否定する。

ふーん、と彩音ちゃんは小さく言うのと、ジッとこっちを見る。

その表情は、いつもニコニコ笑っているものとは全く違っていた。

予想出来ていたこととはいえ、彩音ちゃんの一挙手一投足は鋭さを帯び私を突き刺す。

「じゃあ、陽菜ちゃんは私が颯太君の事好きって知っていたのにデートしたんだ」

目を細める彩音ちゃんに何も言えないまま、じっとしていると彩音ちゃんは増々言葉を重ねてくる。

言いたいことが纏まらず、ただ沈黙する私に彩音ちゃんは畳み掛け
てく。

「約束したよね？協力するって？なのに、颯太君と二人で誕生日過ぎ
したんだ？友達って顔しながら陰で私の事バカにしたのね！」

「違う！違うよ。彩音ちゃん的事バカになんてしてない。でも、霜織君と二人で会ったのは本当。・・・ごめんなさい」

話しながら感情が昂ってきたのか、声が大きくなってくる彩音ちゃんの言葉に咄嗟に否定する。

バカになんて一度もしたことなかった。

だけど、罪悪感を感じながらも、それを無視して霜織君に会いたかったっていう気持ちは嘘じゃないから、謝るしかなかった。

そんな私を彩音ちゃんは蔑み、そして断罪する様に私を見つめる。

「ホント、無邪気な顔してやってる事えげつないよね。私のこと知ってるのに何とも思わないで二人で会ってたんだ。っていうか、寧ろ私をダシにして颯太君に近づいたんでしょ？」

その言葉が私の奥深くにグサリと突き刺さる。

（そうじゃない、そうじゃないよ！そんなつもりなんて全然なかった。）

心の中では、彩音ちゃんに伝えたい言葉が溢れてくるのに、実際に声に出して伝えることが出来ない。

そうじゃないと伝えるために、ただ首を振だけの自分が増々嫌になる。

「じゃあ、そんなに違うつて否定するなら、颯太君のことちゃんと協力出来るでしょ？私たち友達でしょ！？友達裏切る様な最低なことしないでよ！！」

ダン！っとテーブルを叩いて立ち上がると彩音ちゃんはお店を出て行った。

もともとあまりお客がいなかった店内では、きっと私たちのやり取りが聞こえていたんだと思う。

彩音ちゃんが出て行った後も、じっと下を向いている私のぼやけた視界にオシボリが入ってきた。

顔を上げると、そこには温かい表情をしたお店の人が私の様子を窺っていた。

お礼を言いたかったけど、声を出すときつと体の中に凝っているものが込み上げてきそうで、黙って頭を下げるだけが精一杯だった。手にしたオシボリはお店の人と同じ様に温かくて、それを目に押し当てて声が出そうになるのを必死に噛み殺しながら泣いた。

あれ以来彩音ちゃんが霜織君の事を言うてくることはない。

だけど時折私を見てくる視線が、雄弁に彩音ちゃんの言いたいことを伝えてくる。

その視線を避けながら、どうしていいのか分からなくて、立ち往生している中途半端な状態だった。

それでも、霜織君からのメールは届いてくる。

本当は自分のすべきことは分かっている。

彩音ちゃんのことを考えると拒否した方がいいんだと思う。

頭では分かっている。だけど、頭では分かっている、心がついていかない。

先日構内で霜織君と遭遇しそうになって、慌てて逃げしまった。

きっと不快に思っただろうな、霜織君。

だって、目が合ったもん。

わざと逃げたのバレてるよね。

はあ、私ってこんなにイジイジしてたっけ？

最近、暗いなって自分でも思う。っていうか、ネガティブ思考に陥りがち。

何とかしなきゃ。

だけど・・・彩音ちゃんと霜織君、友情と愛情。

どちらかを選ばなきゃいけないのかな？

「陽菜。ちょっとこっちにいらっしやい」

そう言っただけで腕を引っ張られて、振り向くと結衣が綺麗な眉を寄せていた。

その表情に、ああ、やっぱりって思ってしまった。

そろそろ結衣にもバレるんじゃないかって思ってたんだよね。

結衣も、自分が何の用件で私を呼び止めたのか、私が理解してると思ったのか小さく頷く。

「ここじゃ何だから、どこか行こ？」

結衣はそう言っただけで、私と並んで大学を後にする。

時間はちょうど昼時で、大学周辺には同じ大学の人らしき人たちが多くいた。

やっぱり知り合いに会いそうな所で話したくないと思っていたのは結衣も同じだったのか、大学から数駅のオフィス街に行こうと提案してきた。

オフィス街もやっぱり、サラリーマンやOLの人が多くて時間がか

かりそうだったため、結局二人で適当にデパ地下でランチを確保して私の家に行くことにした。

「お邪魔します」

明るく言いながら、結衣はそそくさとリビングに向かっていった。すぐにキッチンに入って飲み物を用意すると、座ってリラックスしている結衣の前に冷やしておいたジャスミンティを置く。

いつ話を切り出されるんだろうって気負いながら食事するけど、一向に結衣から話を切り出されることはなくて、普通に他愛無ないおしゃべりを続けた。

買ってきたランチを食べ上げひと心地ついた時に、結衣が急に真面目な顔をして私を見た。

「翔に聞いたんだけど、颯太のこと避けてるって本当？」

（きたっ！）

食事の間中楽しい雰囲気だったから、このまま触れないでくれるのかな？って甘い考えが浮かんだりしたけど、無理だよね。

そう思いつつも、逃げ腰の自分に呆れてしまう。

霜織君のこと、避けたくて避けてるわけじゃないけど、実際本当の事だから何も言えない。

「こら！目をそらさない」

後ろめたくて視線を結衣から外すと、デコピンされてしまった。

突然のことで、しかもそれがクリーンヒットだったから額を押さえながら結衣を見る。

「じゃあ、陽菜が颯太のことで責められたってホント？」

思わず息を飲み込め、結衣を見つめる。

彩音ちゃんも霜織君のことが好きで、裏切る様な事をしたのは私だから責められても当然だったと思う。

だから、違うと言って否定すると、結衣は視線を一度下に下ろした後視線を戻す。

「実は、その噂結構前から知ってて、でも陽菜何も言わないし・・・気になって陽菜の様子見に講義室まで行ったことあるんだよ、私。」

結衣の言葉に、驚いてしまった。

いつ見に来たんだろう？全然気付かなかった。

「そしたら陽菜、暗いし、他の子と話してる時も顔が強張ってるっていうか、いつもと雰囲気全然違うでしょ？よく教室見ると、後ろの方のグループが何かヒソヒソ話しながら陽菜のこと見てるし」

あゝ結衣には大学で起こっていること全部バレちゃってるんだなっと思って。

正直こんな事初めての経験で、自分でもどうすればいいのか分からなくなってた。

だって、自分という時には普通に笑ってるのに、他の子と陰で色々言ってるって知ってしまったら、何だか人と話すのが少し怖くなった。

だから、さーちゃんと話す時も何となく、ぎこちなさが抜けなかった。

結衣のこと信じてないわけじゃない。

だけど、話すことが出来なかった。

だって原因は私にあるんだから、当然の報いなのかもしれないとも

思う自分もいた。

「様子見に行つた後も、陽菜から言ってくるのを待とうと思つてただけど・・・もう我慢出来なくなつたってわけ。ほら。もう隠しても無駄なんだから、全部話しちゃえ」

優しく微笑んで促してくれた結衣に、ピンっと張つた心の線が緩んだ。

そうなつたら、今まで自分の中で考えてたことや起こつたことを途中^{つか}支えながら、全部話してしまった。

ずっと黙つて聞きてた結衣が、話終つた私に、えいつ、とデコピンをもう一度してきた。

胸の中に堪つていた物を吐き出すことが出来て油断していたから、さっきのデコピンと同じ位痛かった。

痛いと呟いてる私に、結衣が溜息をつく。

「あのさ、陽菜がいつも言っている『フェア』ってどんなの？自分の友達とその子の好きな人との事を協力するって言つて、自分も好きになつてしまつたらフェアにならないってこと？」

額を擦つて痛みを少しでも和らげようとしていた手が止まる。

「人を好きになるのに順番つて必要？大事？先に好きな人の事を相談した方を優先しないといけないのかな？」

私はそんなの本当のフェアじゃないと思う。フェアって事は、正々堂々と公平につて事でしょ？陽菜が颯太の事を好きになつちやつたんなら、その事を彩音ちゃんに伝える事がフェアなんじゃないの？」

結衣の意志の強い瞳が私を見据える。

「で、でも・・・応援するって・・・」

「確かに、陽菜は約束したよ？だけど、もう協力出来ないって言えばいいだけの事なんじゃないの？だって陽菜は協力するって事をダシにして、颯太に何かした？」

その問いかけに首を振って否定する。

そんな、彩音ちゃんの事をダシにするなんて絶対にしない。

「じゃあ何の問題もないじゃない。それはフェアよ。寧ろ、その事や陽菜をダシにしてるのは向こうのほうじゃない。だから、陽菜は正々堂々とフェアに彩音ちゃんに本当の事を言えればいいのよ」

結衣の言葉は、雷に打たれたように衝撃的だった。

大体、前に協力云々の話を聞いた時から打算的だって思ってたのよ。って結衣がばやいているのが、意味をなさずに耳を通過する。

それほど、結衣が言った言葉は私に大きな衝撃を与えた。

だって、今まで一度もそんな風に思ったことなかったんだもん。

今まで、約束していたのに裏切る様な事をした自分、彩音ちゃんが好きなのを知ってて霜織君の事を好きになった自分を責めてばかりいた。

こんなのフェアじゃないって、いつも思ってた。

それって、本当のフェアじゃなかったのかな？

私、霜織君の事好きだって彩音ちゃんに言ってもいいのかな？

「もし陽菜が自分の気持ちを正直に伝えて、壊れる様な友達関係なら、そんなの本当の友達じゃないよ。今は良くて長続きしないし、卒業したらサヨナラになるって。それに、陽菜の友達は彩音ちゃん

だけじゃないでしょ？私もいるし、きつとクラスの子の中にも陽菜の事分かってくれる人はいるから。」

涙が一粒こぼれた。

最近彩音ちゃんたちの冷たい視線や態度に晒されていた私にとって、結衣の言葉はとても温かくて、本当に私の事を思ってくれているんだな、って素直に受け入れる事が出来た。

「それに、私は寧ろ颯太を褒めてやりたいわね。颯太が変わったのは陽菜も知っているでしょ？高校生の時一度食事を一緒にしたこと覚えてる？」

今までの真剣な声色が少しおどけた様な声に変わった結衣の質問に頷く。

忘れないよ。あの時の霜織君は聞いていた噂通りのような、少し違ったような気がした事覚えてる。

そんな事を思い出している私にお構いなく結衣は話を続ける。

「あの当時の颯太は、ぶっちゃけ幼馴染みとしてはいい奴だけど、男としては最低だったからね」

その当時を思い出す様に顔をしかめた結衣が、急にフツと笑い出す。

「人間その気になれば変われるものなんだって本当に思ったよ。陽菜に会って以降、陽菜の理想に近づこうと颯太必死だったんだから最初は、すぐに飽きるだろうって思ってた私も颯太を応援したくなっちゃう位。幼馴染みとして近くで見てた私が言うから颯太の事信じていいよ。私だけで不安なら、翔もいるし？」

どんな反応をしたらいいのか分からないけど、顔が火照ってくるの

が分かった。

そんな私を見ながら、結衣はもう一度真面目な表情に戻る。

「陽菜は、颯太の中身を知って惹かれたんでしょ？もし、外見だけなんて軽い気持ちだったら、これまでに彼氏なんてとづくに出来ているはずだし。颯太とも、高校の時に付き合い始めてるよ。だから、今、陽菜が颯太の事を好きになったのは、少しでも陽菜に認められたいって颯太が頑張った成果でしょ？別に陽菜が悪いことしたわけじゃないの。もっと自信もって。何もアンフェアな事してないんだから」

優しく励ましてくれる結衣に、止まっていた涙が込み上げてきそうになる。

それを必死に我慢して、結衣に感謝の気持ちを伝えたい。

「ありがとう。結衣。もっと早く話聞いてもらえば良かった」

「ホントだよ。バカチンがあ」

そう言っただけで結衣がデコピンをする。

「もう3回も。痛いじゃない」

そう言って、滲んできた涙を痛みのせいにする。

「当たり前でしょ。痛いようにしてるんだから」

結衣のその言葉に、また泣けてきて、ホント痛い、って小さく呟いて泣いた。

ずっと泣かない様に頑張ってきたから、これまで溜めこんであつた

涙が次から次へとが零れる。
ようやく落ち着いてきた私に、結衣は頭をグリグリ撫でて慰めてくれる。

「よし！じゃあ、明日は気晴らしに朝から出掛けよう！」

まるで今思いついたかの様に明日出掛けることを提案する。

「えっ。でも、明日普通に講義あるし・・・」

泣きすぎて重くなった瞼で結衣に言けど、あっさり却下されてしまった。

「あんな辛い状況で、休まずに講義に出てたんでしょ？一日位大丈夫よ。それに、今まで頑張った陽菜の心にもエネルギーを与えなきゃ。って事で、明日朝迎えに行くから準備しとく様に！詳しいことは、夜にでもメールするから」

満面の笑みと結衣らしい強引さに、つい頷いてしまった。

講義を休むのは後ろめたいけど、うん。少しは気分転換も必要かな？
何だか、久しぶりに心が明るくなる。

本当に結衣がいてくれて良かったって、心から思う。

そして、もっと自分の気持ちに素直になろうと誓う。

せつかく心に灯った温かな想いを大切にしていきたい。

第28話 アンフェア or フェア side 陽菜（後書き）

お久しぶりです。

気付いたら2ヶ月近く更新がストップしていました。

今回は陽菜さんがなかなか動いてくれず、それに伴う逃避が原因です。

本当にすみません。

それなのに、拍手やメッセージを下さった方々本当に有り難うございます。

感謝しても仕切れない程の気持ちで一杯です。

今回は彩音の悪役ぶりとキラリと光る活躍の結衣が書けて良かったです。ただ、イマイチ陽菜が輝いていない様な・・・今後に期待したいです。

次は、颯太サイドの予定なので比較的早く更新出来るのではないかと思います。

第29話 君をさらう side 颯太

ベッドの上でゴロゴロしながら翔に貰ったチケットを見つめる。

避けられてるよなあゝって思ってた所で、それを翔たちにも認められると、

分かってた事でも余計に凹む。

凹みながらもその一方で、俺や陽菜に關係ない周りの奴らが勝手に言ってる事実

にイラついてくる。

マジで勘弁して欲しいよ。

どうしようもない憤りを抱えながら、

じっとチケットを見ていると翔から連絡が来た。

「あつ颯太？お前って明日講義？」

何の脈絡もなく話し出した翔に、イラついていた俺は一層イラつきが増した。

「普通に一般教養があるけど？」

不機嫌な声で答える俺に翔は全く我関せずといった様子。

「そっ？じゃ明日は自主休講しろよ？んで、朝、車で俺んちに迎え

に來い」

いきなり何言い出すかと、口を開こうとしたが「チケット忘れんなよ」の一言で口を閉じた。

翔の言わんとすることが分かって、素直に頷いた。

いつもよりも気合いを入れて早起きし、シャワーで目を覚ました後、クローゼットから洋服を見繕うって出掛ける準備をする。

大学に入って一人暮らしを始めてから、朝食を摂るという習慣がすっかり無くなってしまったので、

いつもの様にコーヒーを一杯飲む。

逆にここ最近習慣化しつつあるタバコを吸って時間を確認すると、

翔たちを迎えに行くには丁度良い時間になっていた。

タバコの火を消し、徐に車のキーを持って出掛ける。

外に出ると、いつもよりも湿気もなく気持ちよい天気。

外出にはもってこいの今日は、きっと神様も俺を応援しているに違いない。

翔の家が見えてくると、すでに翔と結衣が玄関先で待っているのが見えた。

車を止め、二人が乗り込むのを待つ。

「はよ。颯太」

「おはよーこのまま陽菜の家に言ってくれる？」

携帯を耳に当てたまま後部座席に座る結衣をルームミラーで確認する。

陽菜の名前を聞いて、体が強張った。

今日俺がいる事を陽菜は知っているのかな。

俺がいるのが嫌で、今日キャンセルするって事ないよな？

またネガティブ思考に陥りそうになる俺の横で、助手席に座った翔は鼻歌まじりで、流す音楽を探してゴソゴソしている。それを見て、何だか無性に翔を恨めしく思ってしまう。

（くそつ 無性に頭を叩き^{はた}たくなった）

「翔。頭叩いても良いか？」

「何いきなり言ってるんだよ」

「いや。無性にそんな衝動に駆られて。いいから叩かせろ」

翔の頭を無理矢理叩こうとする俺に、それを避ける翔。

いや。本気じゃないんだけど、なんつーか落ち着かない。

まじでネガティブになってる場合じゃないし。

こうやって翔と絡んでテンション上げていかないと。

なんとかテンションを元に戻し、陽菜を迎えに車を走らせる。

いつの間に電話を終わらせた結衣が「ったく、いつまでも子供なんだから」と、言ってる。

「そっぴや、今日のことちゃんと陽菜に言ってるのか？」

さつきから気になっていた事を結衣に聞く。

「ううん。全く何も言ってない。気分転換に遊びに行こうって誘っただけ」

おいおい。

それって大丈夫か？

いきなり俺たちが現れたら陽菜が驚くдар。

いや、こうでもしないと陽菜は会ってくれない気もする。

シレッと答える結衣に、一瞬不安な目を向けるも気を取り直す。せつかく翔や結衣がセッティングしてくれた『お返し』だ。

ここは有効に活用させないとな。

陽菜の家まで近くなると、結衣が玄関先で待つ様に陽菜に連絡した。俺たちが到着した時、以前と同じ様に陽菜が立っていた。

だけど陽菜の顔が驚いている。

可愛い目がいいつもより大きくなって、固まってる。

すぐに結衣が車から降りて陽菜に近づく。

少し会話をしていた陽菜が小さく頷いて、結衣の後ろでこちらに歩いてくるのを車の中から見ていた。

車に乗り込んだ陽菜に翔が挨拶する。

俺も同じ様に「おはよう」と言うと、「おはよう」ときこちなく陽菜が返す。

そんな陽菜の様子をルームミラーでつぶさに確認。

驚いてはいるけど、嫌がっているわけじゃないな。

内容は聞こえなかったけど結衣と離している時も、そんな素振りはなかった。
てことは、俺の事が嫌いで避けてたとか、そんなわけじゃないって事だよな。

陽菜本人に聞いたわけじゃないが、嫌われていないと結論を出した。
とにかく、今日はちゃんと陽菜と話したいんだ。

平日ってこともあるんだろうけど、車も渋滞に引っかからなく順調に高速に乗ることができた。

「あのね、今日ってどこに行くの？」

ちょうど最初のインターを通過した所で、陽菜が聞いてきた。

「結衣、お前陽菜ちゃんにまだ何も言ってなかったのか？」

呆れた様に翔が結衣を振りかえると、結衣は「そうだっけ？」ととぼける。

「今日は遊園地に行くんだよ。親父の知り合いが優待券くれたから」

翔がチケットを見せながら説明する。

俺たちが今日行く遊園地は、『日本最大級の』を売り物にするジェットコースターとかがある。

「陽菜は絶叫系大丈夫？」

あの遊園地に行って絶叫系が乗れなかったら辛いだろうと聞くと、「大好きだ」と笑顔で答えてくれた。

最初のぎこちなさも無くなっていて、いい感じだ。

そのまま陽菜と会話をやり取りしていると、翔が話しかけて来た。

「俺喉が渴いた。次のサービスエリア寄って」

「あゝドリンクならいくつか買って来た。後ろにあるだろ？」

「何、颯太。いつからそんなに気の付く男になったの?!」

結衣があからさまに驚いてみせる。

悪いかよ？俺がみんなの分のドリンクを買ってくることが。

実際は、陽菜のためなんだけど

「ジャスミン茶は陽菜の分だから、それ渡して」

前に一緒に出掛けた時、陽菜がジャスミン茶を好んで飲んだのを忘れてない。

あの時ジャスミン茶が好きかどうかも、それとなく本人に探りを入れて確認したから。

それ以外にも、翔や結衣がいつも飲んでいるドリンクも買って準備しておいた。

「私もジャスミン茶が飲みたかったかも」

結衣がボソリと呟く。

つて、ウソつけ！このやろー！！

お前、癖のあるお茶苦手じゃねえか！！

知ってんだからな！

ほら見ろ、陽菜がジャスミン茶を結衣に譲ろうとしてじゃんか

翔が結衣のドリンクと交換しようとしている陽菜を、笑いながら止める。

結衣の奴絶対にからかってやがる。

翔も止める気全くないし。

このままだったら、陽菜と話す前にコイツ等に邪魔されそうな気がしてきた。

後で覚えてるよ、結衣。

無事に遊園地に着き、入園の際に貰ったマップを広げながら、翔や結衣がどこから回るかを相談している。

時折、陽菜にも聞いているのを俺は眺めながら考えていた。

勿論ここまで来たからには、おもいきり楽しみたい。

だけど、それよりも大事なことが今の俺にはある。

まずは話をするために二人きりになりたい。

それが俺の最優先事項だ。

陽菜には申し訳ないけど、俺に付き合ってもらおう。

「なあ、颯太はどこ・・・って、オイ！」

翔が話しかけたのと、陽菜の手を引いて走り出したのが一緒だった。後ろから翔や結衣が呼ぶ声が聞こえる。

「悪い！昼前になったら連絡するから、それまで別行動な！」

走りながら振り返ってそれだけ言う。

目線を下にやれば、朝見た時以上に驚いてこっちを見ている陽菜と目が合った。

そんな陽菜の手を引っ張って、翔達から遠ざかる。

さっきマップで確認した目的地に近くなった事で、走るペースを少しずつ落とす。

俺は普段鍛えているから平気だけど、陽菜はキツそうに呼吸している。

近くのベンチに陽菜を座らせると、そこから少し離れた所にある自動販売機でドリンクを買って陽菜に渡した。

「ごめん。急に走り出したりして」

ある程度呼吸が整ってきた陽菜が、「ありがとう」と言っでドリンクを飲む。

「まずは、陽菜と話したかったから」

一度は近づいたはずの陽菜が遠くなった様な気がして不安だった。別に付き合っていたわけでもないし、陽菜が俺に対して恋愛感情を持ってくれているかは自信が無い。

少しずつ陽菜に近づいているはずだった。

だから、陽菜と話したかった。

自分の気持ちを強引に押し付けてるのかもしれない。

だけど一度近づいた、その距離の心地良さを知ってしまったら、もう、元には戻れない。

戻りたくない。

ただ、陽菜のことを思っていた時に、戻りたくないんだ・・・

「逃がさないから」

俺の想いが籠った声音に気付いたのか、陽菜が見上げる。

「ちゃんと話してくれるまで、俺、陽菜の事離さないから」

一度離れた手をもう一度握って、目的地に向かって歩き出す。
さっき陽菜の手を引っ張って走っていた時より、少しでも強く握る。
この手から、陽菜に俺の気持ち少しでも届く様にと。

第29話 君をさらう side 颯太（後書き）

minimoneです

いつも拍手有り難うございます。

現在、遅筆で更新もゆっくりですが完結させたいと思っていますので、これからも宜しくお願いします。

第30話　ただ、君だけを　side　颯太

ここの売りは絶叫系のアトラクションと巨大観覧車だ。

遊園地なんてテンション上げて楽しむ所に、静かに話が出来る場所なんて多くない。

とにかく二人きりなれる所って考えたら、観覧車しか思いつかなかった。

口を開いたら、陽菜に色々聞いてしまう。

だから無言で観覧車の所まで陽菜を引っ張っていく。
陽菜も何も言わず、ただ黙って歩く。

タイミング良く観覧車は一周回り終わったらしく、待っていたカップル達が次々に乗り込んでいる。俺と陽菜もその流れに入るこ
とが出来て、待ち時間もなく乗り込むことが出来た。

観覧車という狭い密室の中、陽菜と向き合って座る。

緊張しているのか、きつちりと座っている陽菜に笑みがこぼれる。
メッチャ気負ってたんだけど、陽菜を見ていたら逆にリラックスで
きた。

「何にもしないからさ、緊張しないで」

苦笑まじりで見つめる俺と陽菜の視線が絡んだ。

「じめんなさい」

頭を下げて絡んだ視線を外す陽菜。

— ごめんなさい —

何に對してのゴメンナサイ何だろう。

避けていたことに対してだろうか。

それとも、俺の気持ちを受け入れないって意味だろうか。

「連絡くれていたのに、返信とかしなくてごめんなさい」

何も反応を示さない俺に、陽菜はもう一度謝る。

別に謝って欲しくて、二人きりになったわけじゃない。

陽菜の気持ちが知りたいだけなんだ。

陽菜に俺と同じ位の気持ちを返してもらえるなんて思っ
てない。

反対に、彼氏になりたいっていう気持ちを受け入れてもら
えるかどうかわからない。

誕生日に過ごした日に、『陽菜の事が好きだ』という事を初めて態度で意思表示をしたのに、すぐに陽菜から返答を求めようとするのは時期尚早なのかもしれない。

じゃあ、いつまで待てばいい？

今更高校の時にみたいに、たった数回しか会ったこともない陽菜をひたすら思うだけなんて、本当にもう無理なんだ。

陽菜の理想に近づくため、真面目に過ごした日々。

一度も迷わなかったかと言えば嘘になる。

本当に俺は陽菜のことが好きなんだろうか、と疑問に思ったことがある。

他の女とやってもいいや、とか隠していたらバレないだろうかとは思わなかった。

陽菜の何がそこまで俺を惹き付けるのか分からなかった。

これまでに付き合ったりヤツた中には、もっと俺の好みの子がいたのかもしれない。

ただ、それまでの出会った女に俺の中の雄が食指を向けることがあつても、陽菜を見た時の衝撃は、そんなものを凌駕したものがあつた。

大学入試の時、試験なんかよりも陽菜の姿を会場や行き帰りの道程で探した。

入学式でやっと再会して手を繋いだ時、『やっぱり』って思った。

理由なんてないんだ。

陽菜に会って、これまでの生活の全てを変えてもいいと思えた。

うまく言葉に表すことができないけど、

言葉にしたら陳腐で、軽いものになってしまうけど、

陽菜に側に居て欲しいと思う。

陽菜のそばに、俺が、居たいんだ。

陽菜は、陽菜だけは、大切にしたい。泣かせたくない。

「俺のこと嫌い？」

「俺とは友達になりたくない？」

「俺のこと恋愛対象として見る事が出来ない？」

「そんなことない」と言って否定していた陽菜が、最後の質問にだけは答えてくれなかった。

ただ、少しタレている大きな目に大きな水滴を湛えて、俺を見つめる。

泣かせたいわけじゃない。

笑って欲しい。

名前の様に、春の様な朗らかな笑顔を向けて欲しいんだ。

「ごめん。俺が泣かせてるんだよな」

「ちっ、ちがつ・・・」

涙でいっぱいになっている目を大きくする陽菜を見たら、思わず抱きしめていた。

考えるよりも、体が動いていた。

「し、霜織君・・・」

陽菜の甘やかなで透き通る様な声が、耳をくすぐる。
その甘い痺れを体中を感じる。

「これまでしてきた過去のこと、俺を信じられないのかもしれないかもしれないと思う。」

信じてって言うても、すぐには難しいと思う。・・・だけど、

一度言葉を切って、抱きしめていた陽菜を少し離し、陽菜と目を合わせる。

「好きなんだ」

瞳を逸らさずに・・・見つめる。

「陽菜のこと、　すごく、好きだ」

想いを込めて、一言ずつはつきり伝える。

陽菜が小さく息を飲み込んだのが分かった。

それでも陽菜は見つめ合う事を、視線を外すことはなかった。

生まれて初めての告白に緊張しながら、陽菜の反応が怖かった。

見つめ返してくれる陽菜に安堵し、淡い期待が沸き上がってくる。

「構内での噂のことは聞いている。俺が勝手に陽菜のこと好きになった事で、陽菜に迷惑かけてるのも分かってる」

陽菜の事好きなら身を引くべきなのかもしれないと心の何処かで思うけど、

同じ陽菜を守るなら、側に居て守っていきたい。

「俺の事嫌いじゃないなら、逃げないで欲しい。

周りに流されないで、俺の事を見て欲しい。

周りのせいで、俺から離れて行かないで欲しい。

守るから。

陽菜が俺をみってくれるなら、俺が陽菜を守るから。

だから、陽菜には自分の気持ちだけ考えて俺の事を決めて欲しい」

もう一度、陽菜を胸に閉じ込めた。

陽菜の腕が恐る恐る俺の背中に回された。

抱きしめるといふには、あまりにも弱々しいけど、陽菜が腕を回して答えてくれた。

「時間が欲しいの。もう少し・・・待ってもらってもいい？」

くぐもった声が俺の耳に届くと、ゆっくり陽菜への戒めを解く。

「うん。待つよ。陽菜が答えてくれるのを、いつまでも待ってるから」

陽菜の顔を覗き込む様に「出来れば、俺の彼女になってくれるって言葉を待ってるよ」と言う俺に、陽菜の顔はアメリカンチェリーの様に赤くなっていた。

いつの間にか観覧車は頂上を過ぎ高度を下げていく。

それから地上に戻るまで、二人でただ座っているだけだった。手を繋いだまま特に話さなかったけど、時折目が合う陽菜は最初と違い緊張や戸惑いみたいなものはなく、ただハニカんでくれた。

それだけで、幸せになれる。

かなり強引に引っ張ってきたけど、気持ちを伝える事が出来て良かったと思う。

陽菜が他の事に煩わされる事なく、俺の事を考えてくれる様にしたい。

周りに邪魔されるなんて、まっぴらごめんだ。

陽菜、君を守るよ。

君がいつまでも笑っていられる様に。

俺にだけ特別な笑顔を向けてくれる様に。

君が好きなんだ。

きっと、この想いは冷める事はないんじゃないかって思う。
それは確信めいたもの。

俺は陽菜をずっと、ずっと想い続けるよ。

君をずっと――

ただ、君だけを・・・思い続けるよ。

第30話　ただ、君だけを　side　颯太（後書き）

minimoneです。

7/20、21、22拍手&メッセージありがとうございました。
更新を待っていてくれる方がいる事が、本当に嬉しいです。
あまりに嬉しくて、書き上げるスピードが倍速以上でした。
少しストックしてから更新しようかと考えていましたが、少しでも
楽しみにしてくれる方へ、お礼代わりとして更新しました。

本当にどうもありがとうございます。

ここまで読んでくれた皆様に、感謝をこめて・・・

第31話 遊園地デート side 颯太

観覧車から降りた後も陽菜と手を繋いでいた。

時間が欲しいと言った陽菜に『返事をくれるまで待つ』って答えた俺だけでなく、陽菜のことを諦めたり気持ちを隠したりするつもりもなかった。

陽菜と話すという目的を果たすことはできたけど、すぐに翔たちと合流するのも勿体無い気がする。

やっぱり二人で過ごしたい。

折角ここまで来てグループ行動だけってのもな・・・中学生みたいじゃん？！って感じだし。

「翔たちと合流するの後からにして、少し二人で遊ばない？」

ここまできたら、どんどん陽菜に俺を意識してもらわないとな。

二人の雰囲気気まづくならないように笑顔を意識して軽い感じで陽菜に提案してみると、少しだけ目を瞬かせた後コクンと頷いてくれた。

何、この可愛い生き物！まじで、可愛いすぎです。

ホントこのままギュって抱き締めたい！

抱きしめた時のあの柔らかさや香水じゃない甘い香りを思い出す。本当に陽菜のことが好きだ。

そう思ったら自然と陽菜の頭を撫で、頬に触れていた。

顔を赤くしながら見上げてくる陽菜に理性を試されてるような気がする。

このままだったら、思わず嫌われてしまうようなことをしてしまい
そうで、触れ
ていた手を離れた。

何事もなかったみたいに歩き出して、陽菜と二人で近くのアトラク
ションに乗る
ことにした。

陽菜も特に気にしている感じじゃなくて楽しそうに笑ってくれるし、
手を繋ぐのも嫌がっているようには見えなかった。

切実にこれが二人にとって当たり前になりたいと思った。

二人でいるとマジで時間がたつのが早くて、気が付くともう昼前だ
った。

さすがにそろそろ連絡しないと結衣の怒りがマックスになりそうで、
翔に連絡する。

『お前今どこにいるんだよ？結衣が怒ってるぞ。いきなり颯太が陽菜
を拉致ったって』

呆れた声の翔に苦笑して、曖昧に答えながら手を繋いで歩いている
陽菜を見下ろすと、不安そうに見上げてくる陽菜と目が合う。
安心させようと笑顔で頷くとホッとしたような表情をみせる。

「翔たちは今どこにいる？」

『俺らは丁度ジェットコースター乗り終わって次のアトラクション
に移動中』

「俺らも翔たちと合流しようと思うんだけど、何処行けばいい？」

翔に現在地を説明するとお互いの中間地点にある最高速度が日本一というコース

ターで落ち合うことにした。

翔たちはすでに待ち合わせ場所に到着していたらしく、俺たちの姿を見つけた結

衣が駆け寄って陽菜に飛び付いてきた。

「陽菜無事だった？！颯太に変なことされなかった」

真面目な顔して言っていることは、俺に対してかなり失礼な事を言っ
てやがる。

オイオイと言いたかったけど、あながち間違っ
てないから何も言えない。

「大丈夫。変なことなんてされてないよ」

「正直に言っ
ていいからね。相手は颯太だし、陽菜に何かあったら
申し訳ないよ」

「

「確かに颯太だもんなあ」

結衣の心配ぶりに翔が面白そうにのっかる。

マジでありえねえ。俺の味方はいねえのかよ。

俺がただ真面目になっ
たと思うんだよ。

あいつら知っ
てるくせにわざと言ってやがる。

とりあえず近くのフードコートに入ろうと歩き出した時、翔に軽く蹴りをいれて

やった。

「今日は楽しかった。どうもありがとう」

車から降りた陽菜が笑顔をみせる。

朝会った時にみせたぎこちなさが無くなっていて安心する。

翔たちと合流してからの陽菜は楽しそうに笑っていた。

始めは二人きりの方がいいと思っていただけ、こんな陽菜をみる事が出来るなら翔や結衣達と一緒に出掛けるのもいいかもな。
まっ、たまにだけ。

「私たちの誕生日プレゼントは気に入ってくれたかしら、颯太君？」

運転しながら浸っていると、後部座席から身を乗り出してきた結衣が聞いてくる。

ルームミラーには自分たちのプレゼントに自信を持っている結衣の顔と、その奥にはニヤリと笑う翔の顔が映っていた。
まさに二人の思いつぼの自分に小さく溜息つく。

「あゝはいはい。二人にはマジで感謝してます」

俺の言い方が不服なのか、結衣は俺の頭を叩いてきた。

確かに言い方はマズかったかもしれないが、二人には感謝してる。

二人のおかげで避けられてた陽菜と会うことができたわけだし、陽菜から返事を貰う約束を取り付けたんだからな。

「喜んでくれたのならいいのよ。次は颯太に頑張ってもらわないと困るんだから」

「結衣に言われなくても、そのくらい分かってるよ」

そう。待つてるだけじゃダメなんだよな。

今まで頑張ってきたのに、最後は待つてるだけなんて性に合わない。陽菜には俺の事を考えて欲しい。

それにはまだやる事が残っている。

陽菜の憂いは取り除きたいから、まだ俺にはやれる事はある。今後の自分の行動を考えていく。

携帯のアラームの音が耳元から聞こえてくる。

沈んでいた意識が徐々に浮上してくる。

スヌーズでしつこい位起こそうとするアラームを消す。

まだ目覚めてない意識をシャワーで目覚めさせると、コーヒーを飲んで出掛ける支度をする。

大学最寄りの地下鉄の改札口に立っていると、教えてもらった情報通り目的の人物が改札から出てきた。

「おはよう。講義の前で申し訳ないんだけど、ちょっといいかな？」

意識的に愛想のいい笑顔を向けると、話しかけられた相手は驚いた表情でこちらを見て何度も瞬きしている。

まあいきなり話しかけられたら驚くだろうとは思っけど、そんなに瞬きしなくても・・・っていう位している。

「ここじゃ何だから、場所変えてもいいかな？」

「は、はい」

いつまでたっても状況が変わらなそうだから、こちらの用件を伝えることにした。

第31話 遊園地デート side 颯太（後書き）

お久しぶりです。

ここ更新できない間に環境の変化があり、現在ネット環境が整っていない状況です。

そんな中、更新を待つて頂けていることに本当に感謝しています。更新できない間も書いてますので、なるべく頑張つて更新できたらいいなと思っています。

拍手にメッセージありがとうございます。これからも宜しくお願いします。

minimone

第32話 ドキドキの行きつく先1 side 陽菜

だんだん日差しが強くなりだして、あーもうすぐ夏が来るんだって
昼下がりの公園で一人思った。

自宅から歩いていける距離に公園がある。

この公園は近くに住んでいる人なら皆知っている公園で、春になるとお花見に来る人で盛り上がる。

なかでも小さい子供に人気なのが噴水。

今も子供連れのママさん達が噴水前で子供を遊ばせているのを見つめる。

幸せそうだなあゝなんて思っていた所で、こちらの方へ歩いてくる人影を見つけた。

はつきりと姿が見えなくても、それが誰なのか分かって自然と鼓動がはやる。

こちらをに気付いていないその人を気付くまで見つめる中、縮まる距離に反比例する様に、心拍数は上昇してくる。

霜織君たちと一緒に رفت 遊園地の日からずっと考え続けた。

私はどうしたいのか？

どうすることが一番良いのか悩み続けて、やっと答えを出せた。

私に気付いた霜織君と目が合って、フワリと微笑する彼に心臓が一瞬止まる。

本当にいいんだろうか？

私が出した結論は間違っていないかな？

そんな考えが頭の中をよぎる。

「ごめん。待ったかな？」

私が先に待っていただけなのに、約束の時間より早くに来てくれた霜織君はいつもと同じ様に優しい声で気にかけてくれる。

言葉以上の優しさを声色や仕草から感じてきて心臓がキュンと悲鳴を上げてくるけど、これから彼に言うことを考えると一層緊張してきて顔が強張る。

「こつちこそ、呼び出してごめんね」

「そんなこと気にしないでいいよ。俺は陽菜に会えるだけで嬉しいんだから」

ドキンとする様なことをサラリと言う霜織君。

どうしてこんなに好意を持ってくれるのか不思議に思ってしまう。

何か好かれることをしたわけじゃないのに・・・

自分じゃ分らない。

だけど、とにかく今日は自分が出した答えを伝えなきゃ。

遊園地に行った以降も霜織君くんからメールでの連絡は来るけど、『待ってくれる』っていった言葉通り答えを急かすこともなく待っていてくれた。

凄く待たせたと思う。

だけど、ちゃんと考えたかった。

霜織君のこと。彩音ちゃんのこと。そして自分のこと。

そして今日、やっと霜織君に伝えることが出来る。

「あつ、あの」

「その前にさっ」

やっと出せた答えを伝えようと霜織君にバレない様小さく深呼吸緊張して、言葉にしようとした時、私の言葉に被って霜織君が話しました。

「食事。食事もう済んだ？俺、実はまだ食べてなくて。よかつたら、どこか行かない？」

少し焦った様に言葉早めに話した霜織君の勢いに負けてしまつて、二人でお店に行くことにした。

公園近くのパーキングに止めてあつた霜織君の車に乗り込む。

いつ乗っても車は綺麗にされているけど、今日はいつもと違って微かにタバコの匂いがした。

一緒にいる時にタバコを吸っている所を見たことがなかったから、この時初めて霜織君がタバコを吸っていること知つた。

タバコを吸っている姿は格好良いだろうということは想像がついたけど、何となく違和感があつた。

車が静かに発進していて道を滑らかに進む一方、車内は静かだった。話をいつ切り出したらいいのかタイミングを伺って、横目で盗み見た霜織君は口を引き結んで運転していたけど雰囲気はピリピリと気を張っていた。

多分私が今日呼び出した理由を彼は気付いているからなんだろうと思う。何ともいえない雰囲気漂っているなか、二人とも会話というコミュニケーションを忘れたままたまたまに無言が続いた。

食事に行こうと言って車を走らせた霜織君だけど、もうずいぶんと車を走らせていることに今更ながら気付いて窓から見える風景を確かめる。

（あれ？）

車は見たことのある車道を走っていた。

霜織君の誕生日に一緒にドライブに行った時に来た海の近くだと気付いた。

「もしかして、海に行ってる？」

「うん。食事しようと思ったんだけど、やっぱり食欲なくてさ。どうせなら海に行こうかなって思ったんだけど。良かったかな？」

何となく聞いた私にチラリと目をやった霜織君は、やっぱりいつもよりも硬めの声で答える。

そしてやっぱり沈黙が続いていた車が徐に止まった。

「少し歩こうか」

シートベルトを外して私に話しかけた霜織君は幾分かいつもの彼に戻って、少しぎこちなさは残った笑顔をみせた。

和らいだ雰囲気、霜織君にホッとした自分に、彼の雰囲気が知らずに緊張を強くさせていたことに気付いた。

もしかしたら、答えをいつ言おうかと伺っている私の緊張が霜織君にも伝わっていたんじゃないかって思い当たってリラックスしようと深呼吸する。

二人で歩く砂浜は、以前歩いたときよりも海の青さが増しているように感じて、サーフィンなど海を訪れている人は多くなっていた。賑やかになっていた海岸とは切り離されたみたいに私たちはゆっくりとだけ、特に話す事なく歩いていた。

霜織君の半歩後ろ歩いていただけ、思い切って今日呼び出したことを伝えようと呼びかけたけど、霜織君は振り向く事はなかった。

呼びかけた声が小さかったのと、ザザンという波の音で私の声は霜織君に届く前にかき消されたみたい。

これから伝えることにも勇気がいるのに、もう一度呼びかける勇気を出そうとする前に体が自然に動いた。

咄嗟に霜織君の洋服を後ろから引つ張って引き止めた私に、振り向いた霜織君は目を小さく見開いて立ち止まった。

「あのね、今日来てもらった事なんだけど」

一旦言葉を切った私に、やっぱり少し硬い表情の霜織君が頷いた。

「分かってるかもしれないけど、遊園地の時に話してたことで……ちゃんと自分で出した結論を伝えたいの」

何も言わない霜織君に不安を感じて、何て言って伝えればいいのかわからなくなる。

昨日の夜も、今日伝える事を何度も頭の中で反芻していたけど、実際その場になると頭の中が真っ白になっちゃって昨日の練習も意味がなくなってしまった。

「ずっと……ずっと考えたの。私……私ね、」

言葉が喉に詰まって途切れてしまう。

酸素が足りない金魚の様に、空気を取り込むため喘ぐ様に呼吸する。そんな私を霜織君は、じっと見ているだけで何も言葉を発しようとはしなかった。

背中中に冷たいものが流れ、緊張で手が冷たくなる。

「好きなの」

本当はもつと色々な事を伝えたかったのに、最初に口から出た言葉は『好き』っていう一言だった。

一度自分の気持ちを言っちゃうと、他に伝えたかった言葉はもうどこかに消えてしまった。

「霜織君の事好きなの。返事遅くなつてごめんなさい」

精一杯の気持ちをやっと伝える事が来たという思いと、未だに反応を見せてくれない霜織君に不安になる。

どうしていいか分からなくなつて途方に暮れて、視線が自然と下げてしまう。

一度視線をおろしてしまつたら、霜織君がどんな表情や反応をするのか怖くて、もう顔を見る事が出来なくなつてしまった。

どの位時間が経つたのか分からない。多分、そんなに時間は経っていないのかもしれないけど、気持ちは死刑執行の宣言を待つ死刑囚だった。

いいしれない不安が全身を覆い尽くそうとした時、上からハアという大きな溜息が聞こえたかと思うと、その場で蹲つた霜織君が視界の中に入ってきた。

「緊張したあ」

脱力といった感じの声の霜織君は、いつも自信に満ちている彼とは違っていた。

「自分でも情けないけど、陽菜の答え聞くのが怖かった」

顔を膝の間に埋めて呟いている霜織君は見方によつては情けない姿なのかもしれない。

だけど、その姿に胸がキューンと締め付けられた。

締め付けられた胸の痛みに促される様に霜織君を抱きしめていた。気温は熱いのに、抱きしめて感じた霜織君の体は冷たかった。

「待たせてごめんね。それと、ありがとう」

『ありがとう』の言葉に沢山の気持ちを込めた。

抱きしめていたはずの霜織君は顔をあげて、お互い同じ目線の高さで見つめ合う。

はた。と自分の行動を振り返って、緊張で冷たかったはずの自分の手温かくなっていた。

きっと顔も赤くなっているはず。

恥ずかしいけど、霜織君の顔もうつすら赤くなっていることに気付いたら、自然と笑みが零れる。

「なんか安心したら腹空いてきた」

そう言った霜織君と顔を見合わせて声を出して笑った。

さっき思いを伝えてばかりなのに、二人でこうやって笑い合っていると少し照れてくすぐったい感じがあるけど、幸せを感じてしまう自分が不思議だった。

第32話 ドキドキの行きつく先1 side 陽菜（後書き）

minimoneです。

いつも拍手&コメントありがとうございます。

皆さんからの反応は私のやる気の素です。

やっと思いが通じ合った颯太&陽菜

次回はもう少しイチャついてもらいたいな〜と思っています。

次は一週間後ぐらいと期間をあげずに更新したいな。できるかな？

誤字報告や感想等お待ちしております。

Sweet Day 番外編（前書き）

お久しぶりです。

なかなか更新できない状態が続いていますが、この時期のイベントにのかつて番外編を書いてみました。

といっても、順調に更新できていれば番外編なんて形式とらなくても本編で投稿できたと思うのですが・・・

最近ではすっかり忘れていた年齢制限。

今回は甘いです。

Sweet Day 番外編

俺にとって彼女は何よりも大切に守りたい女性。

彼女が笑っていられるなら、どんなことでも耐えられることができる。

二人で作る記念日や、今まで馬鹿にしていた企業の戦略に踊らされているイベントにさえ周囲と一緒に踊らされている自分がいることに、苦笑はしてもそれすらも受け入れている自分がいる。

つきあい始めて数ヶ月たって初めて迎えるクリスマス・イヴ。

今年最後の恋人たちのビックイベント。

もちろん彼女に何か贈りたくてリサーチするけど、彼女は答えてくれない。

「一緒にいたい」

「側にいてくれたらいい」

そう言つて柔らかに微笑むんだ。

彼女は俺に指輪とかこれまでの彼女たちが俺に求めてきた物を何も求めない。

現実には上手くいかないと思う。

特にあげたいと思ったこともなかった贈物を、本当に『贈りたい』

『受け取って欲しい』と思う相手からは求められない。

だから彼女に何を贈ったら喜んでくれるか分からない。

ただ贈りたいんだ。

物を贈る事が重要なんじゃない事は理解してる。

それでも、いつも俺に与えてくれるばかりの彼女に俺の気持ちを形にしたいんだ。

インターフォンが部屋に響く。

それまで数字が羅列した画面にデータを打ち込んでいた手を止めるとPCの電源を落とし、玄関モニターの所まで行く。

インターフォンを押した相手には合い鍵を渡してある。

なのに、俺が家にいる時は絶対に合い鍵を使わず、必ずインターフォンを押して俺が出てくるのを待っている。

モニターに映された姿は、やっぱり合い鍵の持ち主。

両手に大荷物を抱えて、一生懸命歩いてきたのだろう、色白の肌がうつすらとピンク色に色づいて色っぽく映る。

オートロックを解除し、そのまま玄関を出てエレベーター前まで出て行くと、エレベーターが到着するのを待ち受ける。

エレベーターの扉が開いて抱えていた荷物を受け取り、彼女が降りるのを手伝う。

「こんなに大荷物なら、どうして連絡くれなかった？」

彼女から引き受けた荷物の重さに、眉間に皺が寄る。

俺が持つて少し重く感じるのだから、細身の彼女にしたらきつと重かったに違いない。

こんな重い物を持つて一人歩いて来たと考えると、つい連絡をくれなかった事を問いただしてしまった。

一段低い彼女は、叱られた子犬のようにションボリとしている。

彼女の性格――他人に頼る前に自分で何とかしようとする不器用

な性格だつて事――からして俺に連絡できなかったことは分かる。だけど、どうしても彼女に荷物を持たせて一人ここまで歩かせ、自分は家で彼女を待っていたことが納得いかなかった。

「ごめん。責めたつもりじゃないんだ。こんな重い荷物を持っている時は素直に連絡して」

玄関のドアを開いた状態のまま彼女を先に家の中に入れた後、後ろから抱きしめたまま思いを伝える。

突然抱きしめられて驚いたのか、小さな背中が腕の中でビクリと跳ねた。

そんな彼女を宥めるように髪の毛を優しく撫でる。

「陽菜が俺に気を遣ってくれるのは嬉しいけど、その為に陽菜が一生懸命に歩いてきたって知った俺の気持ちも考えて？」

腕の中で小さくなっていた陽菜が動こうとするのが分かって、抱きしめていた腕の力を少し緩めると、見上げてきた陽菜が「だって・・」と納得いかないと言葉を発しようとした瞬間、桜色した唇に唇を重ねる。

陽菜の言葉を封じるためにしたキスはいつもより甘く感じ、その甘さに惹かれて何度かチュツチュツと軽いキスを繰り返しながら段々と角度と深さを増していった。

しつかりと舌を絡めながら繰り返すキスに、陽菜の頬の赤みが増す。重ねた唇を少し離し、大きく息を吸う陽菜の唇に再度深いキスを落とす。

続けてされるキスにクタリと体を預けてきた陽菜を解放し、額を合わせあう。

「俺は、同じ道を歩くなら陽菜と二人で歩きたい。だから、変な気を遣わないで連絡して。迎えに行けたら、その分早く陽菜に会えるし、長く一緒にいられる」

「颯太くん、無理しない？」

キスでトロンとした視線で聞いてきた陽菜は息を飲む程艶めいている。

今日のことは色々計画していたけれど、そんなことは陽菜の艶めかしさにあっさりと流された。

陽菜のまぶた、目尻にキスをしながら空いている手で、初めて陽菜と一緒に過ごした夜から知り尽くしている陽菜の感じる所を優しく焦らすように撫でる。

耳を甘噛みした後で「無理な時は言う」と囁く。

「うん」

俺の囁きに頷いたのか、我慢していた声が漏れたのかというような曖昧な声が響く。

そのまま陽菜を抱き上げると、寝室に直行する。

静かにベッドに横たえた陽菜の目に理性という光が戻ってきたのが分かった。

上半身を起こそうとする陽菜を押し留め、顔を包むようにキスをする。

「颯太君。荷物が・・・」

「うん。後でちゃんとするから、今はこっち」

繰り返すキスの合間に陽菜が言葉にするけれど、俺の本能が今はこ
つちを優先しろと言っている。

「でも、せっかく一緒に食事食べようと思ったのに・・・」

なおも陽菜は弱々しい声で瞳を潤ませて訴えるけれど、俺にとって
は何の効果もない。

むしろ煽っているようなものだって陽菜は分かってないんだ。

「ちゃんと食べるけど、まずは陽菜から」

再びベッドに押し倒した陽菜に俺は静かに覆い被さった。

Sweet Day 番外編（後書き）

minimoneです。

いつも拍手&励ましのコメントありがとうございます。

皆さんには本当に感謝しています。

最近は、遂行もできず更新しているので、誤字や文章におかしなところがあったら教えてください。

これからも宜しくお願いします。

心地よい倦怠感の中、腕の中にある温もりを覗き見る。

気持ちよさそうに眠っている陽菜の髪の毛を、起こさないようにゆつくりと梳く。

こうやって陽菜の体力が限界になるまで抱き続けてしまう。

バスケをやっている俺と陽菜では体力差は歴然で・・・

気を失っている陽菜の少し癖のある柔らかい髪の毛を梳きながら陽菜を眺めるのが、夜を共にするようになってからの颯太の楽しみになっていた。

初めて過ごすクリスマス・イヴを本当は二人で楽しむつもりが、陽菜を目の前にしたら衝動が止まらなかった。

透き通るように白い陽菜の肌は熱を持つと自然と赤みを持ち始める。どんなときでも相手の反応を見ながら官能を引き出す余裕あるセックスをしていたのに、陽菜とのセックスは勝手が違う。

自分の愛撫によって体をよがらせながら哀願する女達のように陽菜の官能を引き出したいのに、初めての時から陽菜には余裕が持てない。気持ちよくしようと愛撫をしているうちに自分の方が追い詰められ、いつの間にか本能のまま陽菜の体を貪ってしまう。

赤みを持っていた白い肌は幾分か赤みが引いていたが、その代わりに所々に赤い花卉——マーキング——が散っている。

これまで自分の痕跡を残すようなことをしたことがなかった。

いや、残したいなんて思いつきさえしなかった。

なのに、陽菜を抱いている時は自分の痕跡を残すとか考えるよりも、本能で残していた。

初めて陽菜を抱いた夜も、至る所に散っている花卉をつけた自分で

さえも内心驚いていたけれど、俺以上に大きな目を丸くして驚いた後に真っ赤になっている陽菜を見て、その可愛さに腕を伸ばし抱きしめてキスをしていた。

（まさか、俺がこんなことするなんて・・・独占欲強かったんだな）

改めて知った自分の独占欲の強さ、過去の自分を振り返ってみて、どれだけ陽菜が自分にとって特別なのかを再認識してしまう。

離したくない。

ずっと一緒にいたい。

お互い学生だが、そう遠くない未来二人に想いを馳せる。

きつと、幸せにするから。

俺が、絶対に陽菜を守ってみせる・・・

だから、陽菜はそのままいつでも笑顔でいて欲しい――

徐々に瞼が重くなっていき、もう一度しっかりと陽菜を抱え直して意識を手放した。

頬に柔らかい感触を感じて眠い目を薄く開けると、明るい光が差し込んできて、思わず目をつぶってしまつと、「起きた？」と耳に心地よい声が降り注ぐ。

やや影になつた事を感じて、再び目を開くと俺を覗き込んでいた陽菜が笑顔で朝の挨拶をしてくる。

思わずベッドサイドにある時計を見るとすでに昼近くなっていた。

「陽菜。体大丈夫？」

気を失うまで抱いた次の日には必ず聞く恒例の質問に、顔を赤くしながら少し頬を膨らませる陽菜は俺の心をくすぐる。

「颯太君ひどいよ。後で食事するつて言つたのに・・・それに、こんなに跡つけちゃつて・・・」

最後の方の抗議は、恥ずかしさのあまり声が段々と小さくなって近くにいた俺でもやつと聞こえる程だった。

床に膝立ちして覗き込んでいた陽菜を、抱え上げ再びベッドの中に引き込む。

「ごめん。だけど、陽菜は俺のだつて証をつけたいんだ。ダメか？」

互いの鼻がくつつく程近くまで顔を寄せたずねると、「程々でお願いします」と伏し目がちに答える陽菜に軽くキスする。

「陽菜が持ってきてくれたケーキや荷物は片付けておいたから、今度こそ食べよう」

陽菜の頭を撫でながら、昨日の夜にできなかった食事を誘うと、陽菜がパツと顔を上げた。

「そう。あのね、『これ』ありがとう」

俺に拘束されていた腕を布団から引き出すと、華奢な陽菜の手首に金のチェーンに一粒のダイヤが光っているブレスレットが揺れていた。

「でも、これって・・・すごく」

その先をキスで封じる。

「陽菜が喜んでくれたら、良いんだ。何も気にしないで、身につけてくれたら俺は嬉しい」

クリスマスに贈るプレゼントを決めるのに、何店舗も回った。

陽菜のイメージに合い、常に身につけていられる様な物を探していたら、某有名店に俺のイメージにぴったりのブレスレットを見つけた。

ゴールドといってもイエローゴールドのようなきらびやかな色ではなく、少し控えめでチェーンも細く華奢で存在を主張しないデザインになっていた。

同じようなデザインで、ダイヤがいくつも連なっているタイプはさすがに俺が買えるような代物ではなかったが、一つだけついているブレスレットもシンプルで上品なもので陽菜に似合いそうだった。

（今は、これが精一杯だけど、いつかもっとちゃんとした物を贈るよ）

俺に見せるように腕を出して礼を言う陽菜に心の中で誓う。

俺が贈ったプレゼントは、思った通り陽菜にぴったり似合っていて

笑みが零れる。

そんな俺に陽菜はゴソゴソと腕から抜け出し、小さな箱を俺に差し出した。

「颯太君からのプレゼントみたいな高価な物じゃないんだけど・・・ごめんなさい」

申し訳なさそうに渡されたプレゼントは、意外と重みがあった。包装された箱から出てきたのは香水だった。

「この香りが颯太くんのイメージ通りで・・・毎日使って貰える物が良くなって思ったの」

陽菜がくれた香水は、爽やかな香りをベースにしてほのかに甘さも含んでいた。

自分が贈ったプレゼントと俺の反応に不安なのか、上目遣いで様子を伺う陽菜に意識しなくても出てしまう笑顔を向けて礼を言う。

「ありがとう。良い香りだ」

その言葉に安心したのか陽菜は満面の笑顔を見せて、「私も、ずっと大切にするから」と言ってくれた。

陽菜からもらった香水を軽くつけた俺と、俺が贈ったブレスレットをした陽菜。

自然と二人の顔が近づいて、そっとキスをする。

ゆっくり、ゆっくりしたキスをしながら、二人を包む雰囲気は昨夜と同様の甘いものに変わっていった。

それから、どんな時も俺はずっと陽菜から贈られた香水を使い続けた。
いつでも、陽菜が俺と共にいると、感じられるために・・・

Sweet Day 2 番外編（後書き）

minimoneです。

クリスマスは終わってますが、前回の続きで翌朝編です。
少しでも楽しんで頂けたら嬉しいです。

いつも拍手&コメントどうもありがとうございます！！
まだまだ続く予定の颯太&陽菜ですが、これから宜しく願います。

第33話 ドキドキの行きつく先2 side 陽菜

夕食をこの前行ったレストランに行こうと霜織君と決めたので、昼はコンビニで軽く食べた後浜辺を歩いたり、少し車で移動して海岸に隣接しているモールで色々なショップを見て回った。

この前の時と違うのは、お互いの指を絡ませて手を繋ぐ所謂カップル繋ぎでいた事と、霜織君は時々甘い視線で見つめてくる事。

霜織君は、時々見上げたことに必ず気付いてくれて微笑んでくれるけど、その甘さにくすぐったい気持ちが沸き上がって、二人してハニカむ。

何回か同じ事を繰り返すとさすがに照れてしまった私に、繋いだ手をわざと大きく振って歩いて『何でもないよ』って顔する霜織君にプって笑いが零れる。

特別何かするわけじゃない。

だけど、他愛無ないやり取りが心をホッコリさせてくれる。



夕暮れ時、お腹が空いてきたところでレストランに行く事にした。二人でお店に入ると、以前と同じ様に温かい笑顔のオーナーが迎えてくれた。

今日は二人にとって記念日になるんだから少しだけ贅沢をしよう。っていう霜織君は、オーナーおすすめのコースを選んだ。

霜織君は運転しないといけないから今回もアルコールはやめて、ノンアルコールの物で乾杯した後何となく照れくさくなってお互いに

照れ笑いし合う。

きっと今の私たちは初々しい雰囲気醸し出しているのかもしれないけど、周りのことを気にする余裕も無いほど一杯いっぱいだった。それでも、なんとか霜織君と会話を続けてちよっとお洒落な雰囲気なレストランの中でも少し余裕を持てるようになってきた頃、オーナー夫婦の奥さんがテーブルに近づいてきた。

「いらっしやいませ。本日はお越し頂いてありがとうございます。またお会いできて嬉しいです」

とても親しみを込めて挨拶をしてきたことに驚いた。だって、前に来た時は特に会話することもなかったし、時間だって結構経っているから覚えてもらっているなんて思いもなかった。

「覚えてくれていたんですか？」

素直な感想と驚きで、つい聞いてしまった私に、前回見せてくれた穏やかな笑顔を向けながら頷いてくれて、笑顔と変わらない優しい声で『勿論よ。来てくれたお客さんは忘れないわ』得意げに胸を張る奥さんに、スゴイって尊敬の眼差で見えたら、クスクス奥さんが笑い出した。

「そうだったらカツコイインだけだね。そうじゃなくて、貴方達はとっても印象深かったから覚えていたの」

何か印象に残る様な事したかな？と二人で顔を見合わせていると、楽しそうな声のまま奥さんは話を続ける。

「以前来てくれた時、美男美女のカップルでお似合いだったから。芸能人さんなのかと思ちゃたもの」

確かに、霜織くんは誰から見ても人目を引く人だから印象深かったのかもしれない。

芸能人だっていっても、きつと周りは信じるんじゃないかな。

「その時も雰囲気があつて素敵なカップルだなんて思っていたけど、今日来てくれた貴方たちを見ていたらこっちまで幸せそうな雰囲気があつて、邪魔しちゃダメだって分かっていたんだけど、どうしても声をかけたかったのよ」

その後デザートを持ってきてくれた奥さんと3人で雑談をしていると、あつというまに時間は過ぎていて、そろそろ帰ろうと席をたった時厨房からオーナーも顔を見せてくれた。

『また来てくださいね』というオーナー夫婦に挨拶をして、車に乗り込んだ。

楽しかった食事で、緊張がほぐれていたのに霜織君と二人きりになって改めて霜織君を意識すると、レストランの奥さんが言うように、霜織君は芸能人にみたいだった。

これまでそんな事にしなかったのに、こんな人が自分の彼氏になったんだと思うとなんだか、緊張してきた。

いったん緊張すると何を話していいのか分からなくて、一体これまで二人きりの時どんなことを話していたか考える。

そういつてこれまでを思い返してみる、いつも会話が途切れないように霜織君が話を自然につないでくれていたことに今更ながら気づいた。

霜織君は、こんな風に私が気づいていないところでも気を遣ってくれる。

だから、私は今彼と一緒にいることが出来るんだって思ったら、胸

が締め付けられるほど苦しくなった。

本当は、告白する前に伝えたいことがあったんだけど、緊張のあまり気持ちを伝えちゃって言わずにいたことを今話しちゃってもいいかな？

「陽菜。右手出して」

言われた通りに右手を前に出すと、「そっちじゃなくて、こっち」
運転しながら器用に自分の左手を伸ばして、私の手を捕まえた霜織はそのまま何も言わずに運転している。

（手、このまま繋いじゃってもいいのかな？）

「当分急なカーブとかないう直進だからね」

霜織君が私の疑問が通じたように答えてくれる。

今走っている道は海岸通り沿いで、霜織君が言うように殆どが直進だから手を繋いだまま運転はできる。

昼間もずっと繋いでいたに車の中でもって嬉しいような恥ずかしいような・・・

誰かに見られるわけじゃない、二人だけの秘密の空間。

時々霜織君は悪戯するように、繋いだ手全体でギュッて一瞬力をいれたり、人差し指でトントンってノックしてきたりする。

経験値の差なのか、どう反応していいか分からなくて、悪戯される度に霜織君を見てしまう。

だけど、嫌じゃない。

心がくすぐつたくなるけど、繋いだ手は離さない。

彼の誕生日の帰り、この道を車で通った時に感じていた罪悪感や彩音ちゃんを裏切っている自分に対する嫌悪感。それと霜織君を好き

だつて気持ち・・・

そんな自分でも持て余しそうな気持ちを抱えていた事が嘘みたいに
今幸せ。

でも今感じている幸せも霜織君のおかげだつて、私は知ってる。

話すなら『今』だつて、思った。

ありがとう。つて伝えるなら、この時だと思った。

「あのね、二人でレストランの帰り、この道を通っていたとき私辛
かったんだ」

突然話し始めた私にチラッと投げてきた霜織君の視線に翳りを感じ
たから、「そうじゃないよ」っていう意味をこめて繋いだ手に力を
少しいれると、無言でトントンって返事が返ってきた。

無言だったのは、私にそのまま話を続けさせたかったんだと思う。

「あの日、霜織君を好きだつて思う気持ちと、その時、その・・・
友達にね、霜織君の事好きだつて相談されてて、協力するって約束
してたの」

霜織君が彩音ちゃんの気持ちを知っているか分からなかったから、
名前を出すことは避けた。

「約束した時、まだ霜織君のこと好きとか考えたことなく・・・
でも、いつの間にか好きになつてた」

あの時の私は霜織くんと一緒に過ごすことが心地よければ心地良いほど、彩音ちゃんとの板挟みで苦しかった。

もっと一緒にいたいと思う反面、これ以上一緒にいることはダメだと自分に言い聞かせて、彩音ちゃんへの裏切りに心臓が潰されるように息苦しかった。

「その後も色々あって、友達の事やと霜織君の事ずっと考えて・・・正直に言くと、最近まで霜織君とのこと諦めた方がいいんだろうなっと思って考えてたの。だけど・・・」

ピクリと小さく反応した霜織君の手から、彼の心の動きが伝わった。何も言わず話を待っている霜織君に、そのことには敢えて気づかないふりをする。

「どうするべきなのか悩んでいたらね、ある日クラスの友達が話しかけてくれたの」

第33話 ドキドキの行きつく先2 side 陽菜（後書き）

明けましておめでとございます。
今年最初の更新です。

話が途中ばいですが、思ったよりも長くなりそうだったのでここで一度話を区切りました。

いつも拍手&コメントありがとうございます
本年も颯太&陽菜を宜しくお願いします。

mini mone

第34話 ドキドキの行きつく先3 side 陽菜

霜織君から告白された後も、ずっと彩音ちゃんとの関係はぎくしゃくしたままだったし、麻奈美ちゃん達のグループからのあからさまな敵意を感じていた。

こんな生活をこのまま続けるぐらいなら、霜織君の事は無かったことにしたいと思うほど精神的にも疲弊していたんだと思う。

『無理して彩音ちゃんと一緒にいなくてもいいんだよ？』

『もしよかったら私たちの所席空いてるから、こっちおいでよ』

そう言って私に救いの手を差し伸べてくれたのは、さーちゃんだった。

これまでもさーちゃん達と話したりしていたけれど、大学生の友達関係は高校の時と違って選択科目によって受ける友達が変わったり、一緒にいるグループが変わると全然交流がない子がいるのは当たり前だった。

だから、さーちゃんにかけられた一言に私は救われた。

それから少しずつ彩音ちゃんという時間よりもさーちゃん達という時間が長くなってきて、自然と彩音ちゃんとは離れるようになった。その間、霜織君の事よりも新しく作り上げていく友達関係についていくのに精一杯だった。

まさか大学生になって、こんな苦勞をするなんて夢にも思っていなかった。

さーちゃん達と一緒にいるようになって、心が軽くなった。

これまでどれだけ、彩音ちゃんや真奈美ちゃん達の事が負担だったのか改めて気づかされた。

だけど、彩音ちゃんとうなった切欠は私にあると思うし、彩音ちゃんと離れたからといって、そのままするべきじゃない。

霜織君の事を彩音ちゃんとはちゃんと話すべきだと思っている。

自分の気持ちに気づいた時点で正直に打ち明けていれば、こんなことにならなかったんじゃないかって思う。

だけど、自分の正直な気持ちを彩音ちゃんに言う事で学内に友達がいなくなる事が怖かった。

いくら結衣ちゃんがいるからっていつでも一緒にいるわけじゃないし、学科内で一人平気なほど強くもなかった。

さーちゃんが言ってくれた一言は、居場所と共に私に勇気もくれた。そんな感謝の気持ちを伝えたら、さーちゃんは本当に感謝を伝える相手は私じゃないだよって、小さく意味ありげに笑った。

『今、吉岡さんに関する悪い噂とかって信じないで欲しいんだ。俺が勝手に彼女の事を想っているだけだから、彼女に迷惑をかけるつもりはなかったのに、こんな事になってしまった。彼女の事守りたいけど、俺だけじゃ限界がある。こんな所に連れてきて頼み事するなんて常識外れだと思うけど、君の力を借りたいんだ。講義とかの時、吉岡さんのことお願いしたいんだ』

いつものように大学へ向かう駅の改札口に出たさーちゃんに声をかけてきた霜織君は、さーちゃんをコーヒーショップに呼び出すと話し出したらしい。

さーちゃんの話に驚いている私に、『まさか霜織君にお願いされちゃうなんて思わなかったからホント吃驚しちゃったよ。私も気にな

って声をかけようか迷っていたから、彼の言葉に背中押された感じかな。

このことは秘密にしてくれって言われたんだけど、ここまで陽菜ちゃんの事思ってくれてるんだってこと、やっぱり陽菜ちゃんは知っておいた方が良いんじゃないかと思って話しちゃった。』と話してくれた。

思いもしなかった事実を聞いて、霜織君の事を諦めるっていう簡単な道に逃げそうになった自分が恥ずかしくなった。

それと同時に、霜織君は私の状況も分かってくれて、守ってくれようとしていた事に胸が熱くなった。

逃げちゃいけない。

さーちゃんから知らされた事実と霜織君の誠実さに、逃げるのだけは止めようと思った。

霜織君だけじゃない、さーちゃんや結衣。

私を支えてくれている友達がいる。

彩音ちゃんとの関係が壊れるのは怖かったし、出来れば嫌われたくないって思っていた。

自分を応援してくれている人たちのためにも、恥ずかしくない自分でいたかったから彩音ちゃんと向き合う事を決心した。

「さーちゃんから聞いた時、霜織君の事を無かった事にしようとしていた自分が恥ずかしかった。霜織君は誠実さに対して、こんな卑怯な私で良いのか迷ったけど私も霜織君みたいに自分の気持ちに正直になりたいって思ったの。あの時逃げていたら、人としても良くなかったと思う」

自分の思いを霜織君に伝えたくて、ここまで一気に話したから息が切れそうだった。

自分を落ち着かせるためにも一度息継ぎをし、前を向いてる霜織君を見つめ直す。

「私の事好きになつてくれて、ありがとう。私が今こんなに幸せなのは、霜織君がいてくれたから・・・」

届いてくれるかな？

ありったけの気持ちを込めた私の気持ち



静かに家の前に車を止め、玄関ホール前まで見送りに来てくれた霜織くんにお休みの挨拶をしようと見上げる。

「陽菜。抱きしめてもいい？」

突然の霜織君の言葉にどう反応していいか分からずに俯いてしまった。

赤くなつて何の反応も出来ない私に、霜織君の腕が伸びてきて引き寄せられた。

霜織君に抱きしめられるのは初めてじゃない。

だけど『彼氏』という私にとって特別な場所に位置する彼に抱きしめられると、緊張する以上に安心している自分がいた。

この場所にいていいんだ、って安心出来た。

彼の胸に額を付けて幸せに浸っていると、「陽菜？」という声が上から注いできた。

夢見心地のまま霜織君を見上げると、少し照れた様な霜織君が体を少し離して見つめてくる。

「あのさ、キス・・・してもいい？」

「キス したいんだ。陽菜が俺の彼女になったことを、もっと実感したい」

霜織君の表情は意外な程真剣で、どこか切なさがあった。

キスなんてしたことがないし、こんな時どうすればいいのか分からなくて頷くことしか出来なかった。

頷いた後にその意味を自覚して恥ずかしさに俯こうとしたら、霜織君から頬を包まれ上を向けられた。

霜織君の大きな手に包まれると、私の顔からじやなくその手から熱いといってもいい位の温かさが伝わってきた。

両手で顎から持ち上げる様に顔全体を包み込んだままゆっくりと霜織君の顔が近づいてくる。

その整った綺麗な顔がピンボケする程の近づいた時、霜織君がピタリと動きを止めた。

吐息を直に感じられる距離。

やっぱりどうしていいのか分からない私は、じっと霜織君の瞳をみつめていた。

「陽菜、目。閉じて」

その言葉に慌てて目を閉じると、少し顔を左に傾けられた瞬間、柔らかい何かがフワリと降りてきたかと思うと、唇に感じたその温もりはすぐに離れていった。

自然に目を開けると、さつきと同じ所に霜織君の瞳がそこにあった。視線が絡んだかと思っただけ、唇を食べられるんじゃないかという様な長い、長いキス。

唇を解放される最後の方には、息苦しさや何ともいえない気持ちで全身をめぐって意識が朦朧としていた。

離れたと思った唇は、最後にもう一度チュツと小さく音を立てて離れていった。

自然に見上げてしまった霜織君は満たされたようなどこか誇らしげな表情をして、優しく抱きしめてくる。

「俺が見ている都合のいい夢じゃないんだな」

自分自身に確かめるように言う霜織君は面映ゆい表情から一転、真面目な顔をして見つめてきた。

「絶対に陽菜を大切にやるから、ずっと一緒にいよう」

霜織君の言葉が嬉しくて自分から彼の胸に顔を埋め返事をする、彼も私の肩に埋めるように包み込むように抱きしめてくれる。

身長差がある私達にとってこの態勢は霜織君には少し窮屈そうだけど、そんなこと全く気にしないのか、思う存分抱きしめあつた後、額、目尻、頬にとキスされた。

「今日はもうこれで帰るよ。このまま一緒にいたら陽菜を食べてしまいそうだから」

何を言われたのか分からなかったけど、少し考えてその意味を思い当たると、瞬間湯沸かし器のように赤く熱くなった。

動揺する私に、霜織君は素知らぬ顔で家に入るよう促してきた。とつくに赤くなっているのはバレていると思うけど無駄な抵抗で俯

き顔を隠し、お休みの挨拶をして霜織君と別れた。

こんな事をさらっと言えちゃうあたりやっぱり経験値の差だと思っ
きつとはこんな風に霜織君に私は翻弄されちゃうんだろっな・・・

第34話 ドキドキの行きつく先3 side 陽菜（後書き）

minimoneです

いつも応援の拍手&メッセージありがとうございます。
やっと、颯太も報われました。

今後どんな二人になっていくのか・・・

当分は、幸せモードでいきたいなあ〜と思っています。

ご意見・感想待っています。

もしリクエスト等ありましたら、教えてください
♪♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9298f/>

One ' s inmost thoughts

2010年10月11日01時44分発行